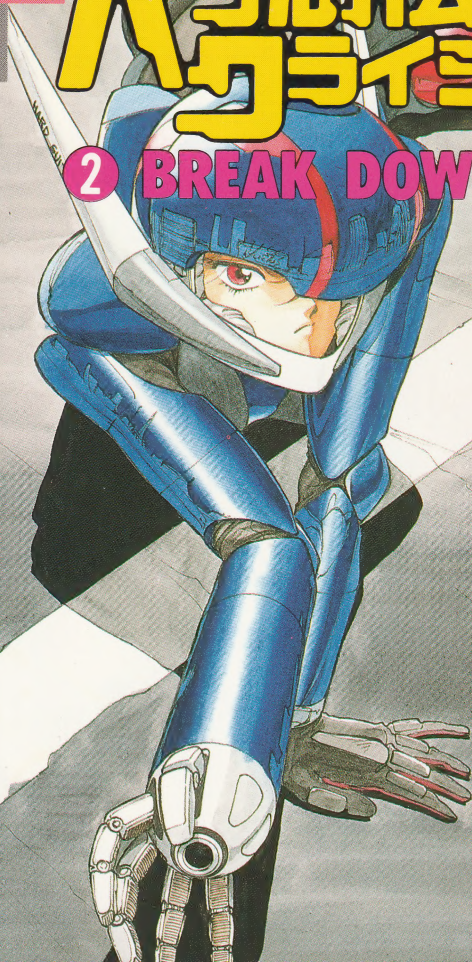
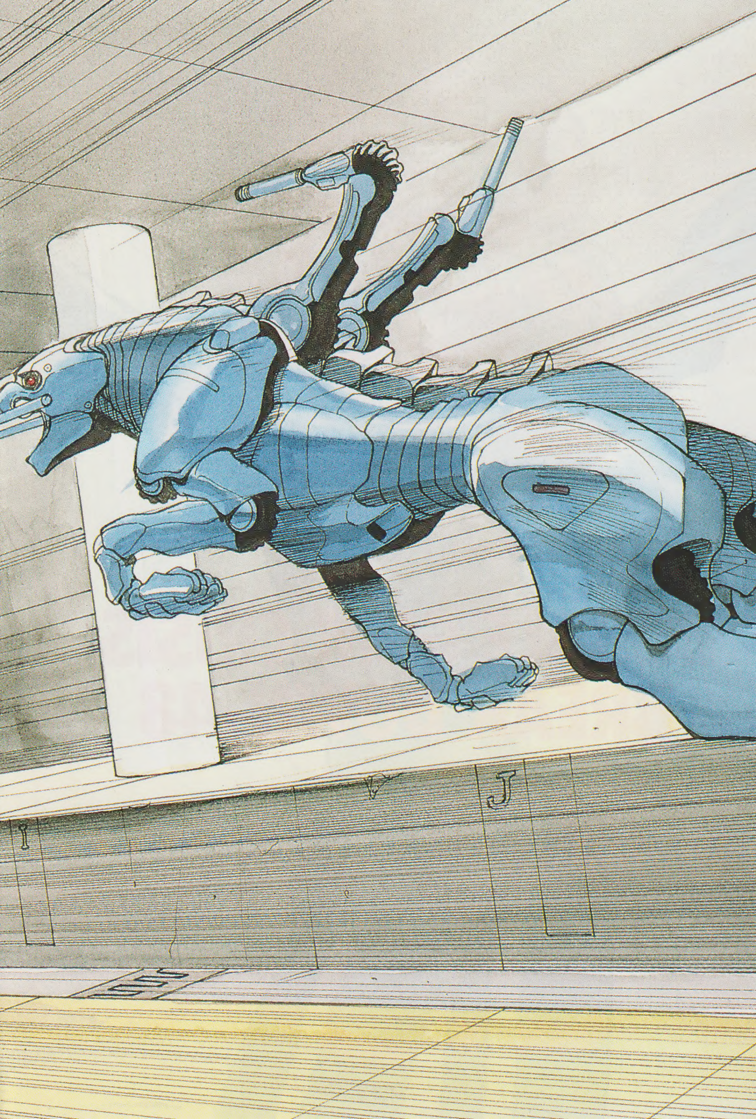
鈴木敏充

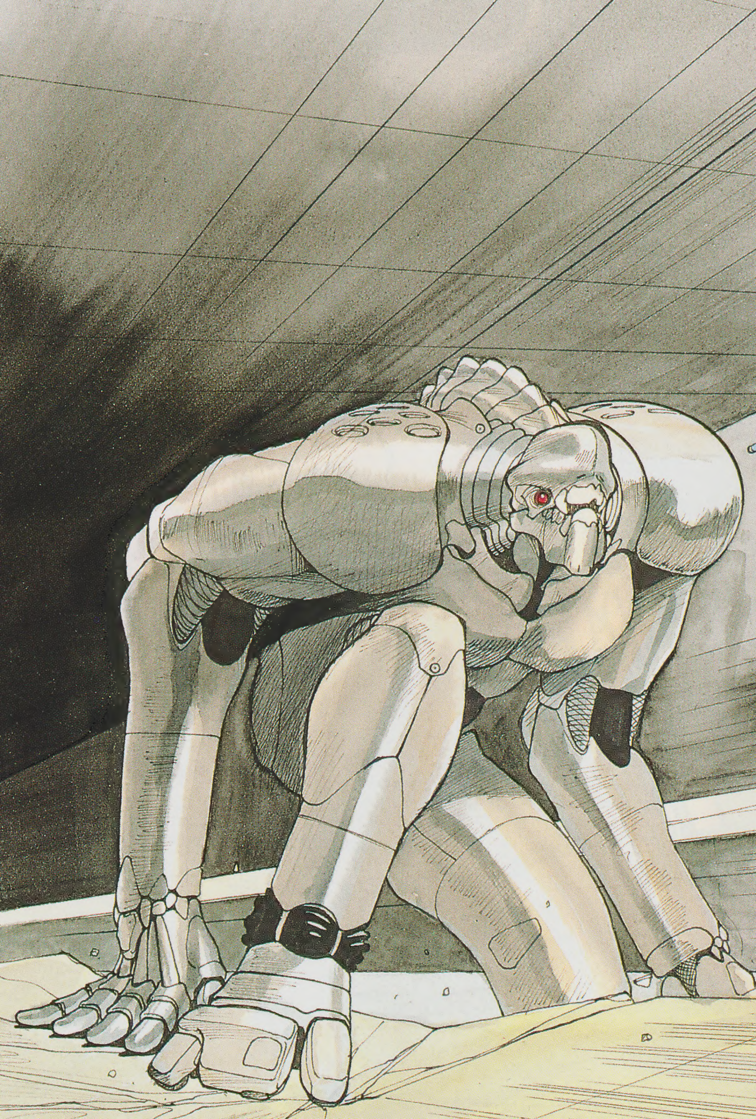
バブルガムクライシス

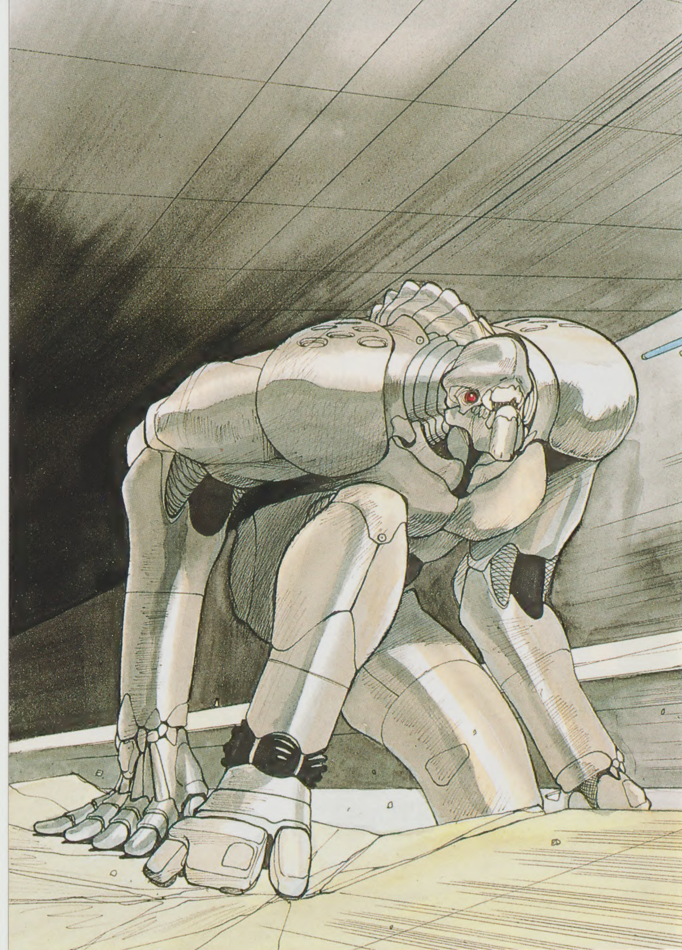
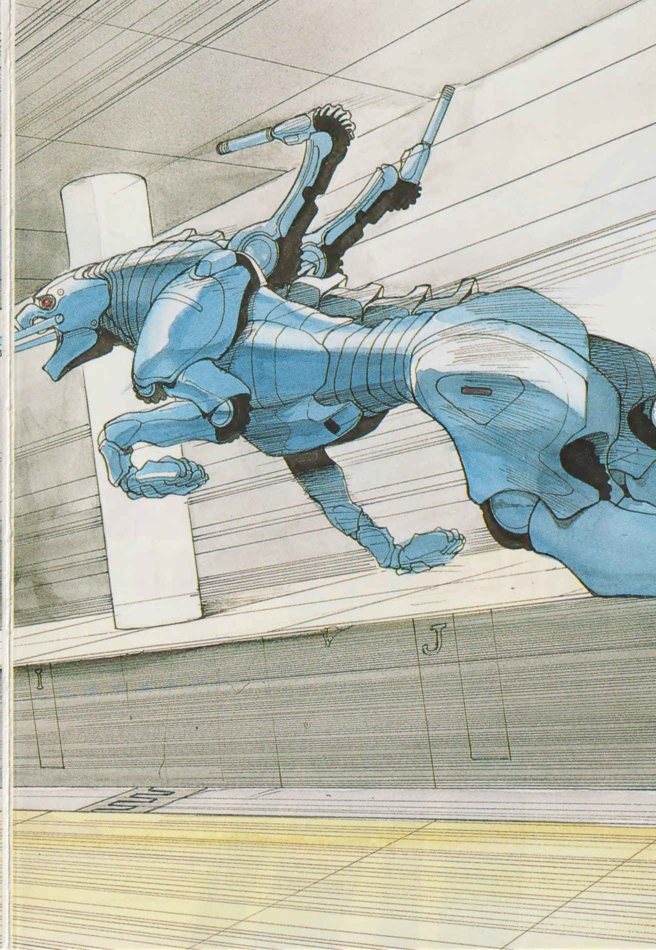
② BREAK DOWN-48



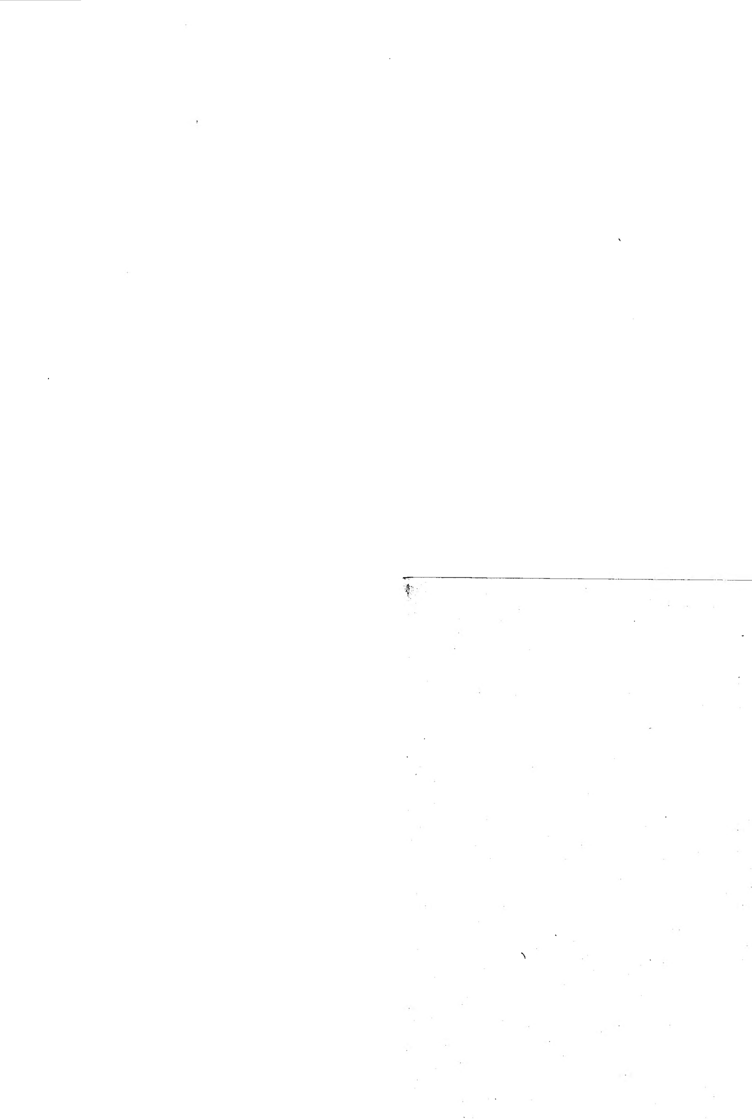

BUBBLE GUM CRISIS
BREAK DOWN-48









もくじ

プロローグ　5
第1章　異変　14
第2章　武闘集団　60
第3章　陰謀　111
第4章　発動　180
第5章　エレミア　245
あとがき　327

24

バブルガムクライシス

② BREAK DOWN-48

鈴木敏充



富士見文庫

口絵・本文イラスト　園田健一

プロローグ

世界の主要都市が、巨大なデータ集積体としての都市改造意識に本格的に覚醒したのは、二〇世紀後半から、二一世紀初頭の文明の激変期であった。時代の要請で、世界列強および巨大民間企業が、天文学と高エネルギー物理学、小型技術、環境工学等の、応用科学における発明発見のパテントと業績の主導権をめぐり、熾烈きわまりない争奪戦をくり広げていた。

その尖兵となり彼らの未来を託されていたのが、研究・開発に邁進してきた科学者グループである。西暦一九八八年に台頭し、コンピュータを活用した群体頭脳学のメッカといわれた米国カリフォルニア州のシリコンバレー、天文学理論と高エネルギー物理学のテキサス州のオースチン、サイバネティクスと光ファイバー、高速コンピュータのＮＩＰＰＯＮのツクバ、砂漠研究計画から太陽熱蓄電、磁気流体力学、遺伝子工学で先駆的な存在となったイスラエルのレホボト、同様にサウジアラビアのリヤド、高エネルギー物理学の応

用から超高速(ちょうこうそく)リニアモーターカー計画にいち早く着手(ちゃくしゅ)して成功したフランスのブルターニュ等々――。数え上げたらきりがないほどの、国家や民間の巨大資金を投下(とうか)された科学者グループが、クライアントの思惑(おもわく)とは別に、人類がいまだ体験したことのない未知の分野を模索(もさく)し、きたるべき未来の姿を知ろうとすさまじい情熱を持って研究にとり組んできた。

だが、人類にとって有益(ゆうえき)なはずの彼らの研究成果のいくつかが、時代を乗り越えるたびに、社会に多くの矛盾と疑問を投げかけ始めた。エレクトロニクス、量子物理学、遺伝子工学、マイクロ・コンピュータ、宇宙工学などの、当初は独立した科学的な研究成果が、相互(そうご)に干渉(かんしょう)しあい、やがて複雑に絡(から)みあいながら、未来社会を支(ささ)えるための巨大な原動力として、そのうねりを見せ始めたころ、人類はみずからの手で人類にとって代わるかもしれない〝機械生命体(サイバードロイド)〟を生み出してしまったのだ。

発端(ほったん)は、西暦二〇〇五年のある画期的(かっきてき)な研究成果であった。当時、世界的規模のネットワーク網を誇るコンピュニケーション企業として、デンツウと並びNIPPONを代表するGENOMは、商業的になりたつ人類初のコンピュータ革命ともいえる〝生物学的(バイオ)素子(ビット)〟を開発した。その成果は、西暦一九九〇年に超電導(ちょうでんどう)コンピュータによる独自のネットワーク網を世界的規模で確立させ、成功をおさめたGENOMが、その情報力をもってさまざまな産業に進出し、合併吸収(がっぺいきゅうしゅう)を重ねて巨大複合企業体となり、ツクバをバックアッ

プして得たものである。
人間の脳波を一瞬にして機械処理し、生体の自動制御機能に基づく符号を用いて、コンピュータの希望する波長の脳波を捕捉し、コンピュータが理解できる電気記号へとトランスレートする——、人間と機械の交感開始ともいえるこの偉大にして恐るべき出来事は、スーパー・インタフェース・コンピュータとしてその後の世界を急変させた。
西暦二〇〇七年には、世界各国の主要都市は、高密度、超高速ネットワークの知的コンピュータ・システムで結ばれ、共産圏を除いて、政治・経済の基礎情報をめぐり、国際的なコンピュータ権利条約が締結された。そして、西暦二〇一二年後期になると、人間とコンピュータの権利に関するコンピュータ責任法が施行され、当時人間を凌駕する勢いで増大し、政治、経済を管理監督しつつあったコンピュータの暴走に歯止めをかけることに成功した。
この時代、ＧＥＮＯＭはコンピュニケーション産業のリーダーシップをとっているという強烈な自負のもとに、世界経済の支配を夢見、その夢の具現化のために、マクロ・エンジニアリングの分野へ企業体の命運をかけ、進出していった。その結果、ＧＮＰ世界第一位のＮＩＰＰＯＮが公共企業として設立した宇宙開発事業団、ＳＤＥを母体として設立された宇宙防空軍ＵＳＳＤとの技術タイアップが実現した。

だが、しかし、GENOMの繁栄を許さぬ者がいた。国際間で定めた経済諸条約の更改を期に、GENOMの世界進出を阻止しようとするグループが牙をむいてきたのだ。そのグループの筆頭には、優良な巨大複合企業体をいくつも傘下に持った米国を拠点に活動するモルガン財閥がいた。

国家という枠をはずして、精力的に活動するGENOMと同様の体質を持つ多国籍企業体のリーダー——モルガン財閥は、その中枢に強烈にして排他的な民族思想を持ち、彼らの牙城を侵蝕しつつ急成長をつづけるGENOMを、明確な〝敵〟として認識しだしたのである。

〝敵〟の勢力拡大を抑え込み、可能ならば経済的崩壊におとし入れるほどの痛手を与えるために、彼らは共通の〝敵〟ともいえる共産圏の指導者をも動かし、混迷のきわみにあった軍事問題、貿易不均衡などの経済問題を、GENOM追撃の題材にしてクローズ・アップさせては政治的にも経済的にもGENOMを包囲し、苦しめた。

NIPPONイコールGENOMといわれるほどにもなっていた超集合企業体GENOMにとって、モルガン財閥の徹底した経済封鎖作戦や排GENOM運動は、大幅なる業績ダウンとなって現れ、躍進にストップをかけた。が、GENOMは希望を捨てなかった。GENOMの〝敵〟が彼らならば、彼らの〝敵〟はGENOMの味方になる可能性は高い。

そして、GENOMは〝敵の敵〟をとり込む有効な手段として、とてつもない研究に着手し、その成果の効用に期待をかけたのだ。

西暦二〇一一年に、GENOMの本拠地TOKYOにある研究開発機関のひとつバイオエスケープ・コーポレーション、通称〝ウィズ・ラボラトリー〟が、携帯用バイオピット・インタフェース・コンピュータの実用モデルを完成させた。このピットは、人間の脳の片側にある重要な神経束に近く埋め込まれ、皮膚上に露出させたプラグから、胸ポケットにもおさまるマイクロ・コンピュータとコードで連動させ、〝歩くコンピュータ人間〟を実現させたものであった。

開発当初は、バイオニック器官に内蔵させて、拒絶反応を起こさずに人体へと移植させながら、その機能性を効率よく発揮させる人間改造をめざしたが、やがて、USSD（宇宙防空車）との宇宙ロボット工学、サイバネティクス、重合体工学などの最先端の科学、技術の交流から、当時のロボットの概念をはるかに超える人造人間、すなわち、〝機械生命体〟をGENOMに夢想させるほどにまでなっていた。

彼らの夢想は、西暦二〇〇五年の〝生物学的素子〟の開発から始まり〝亜人創造計画〟PCBCとして、低迷をつづけていたGENOMの内で、実に一七年の歳月を要して、秘かに、しかも、着実な成果を上げながら具現化されていった。

西暦二〇二二年の八月の終わり、開発コードネームＧＳ―〇五（アダマー）型と呼ばれた〝機械生命体〟のプロトタイプが、実用レベルでの試運転（シェイクダウン）に成功した。人類への貢献を目的として創造されたこのＧＳ―〇五型の完成は、研究グループの科学ロマンスを際限なく膨張（ぼうちょう）させ、知育型マイクロ・コンピュータという人工知能を〝機械生命体〟に持たせるまでになっていったのだ。

しかし、人類と〝機械生命体〟の共存する未来に、法規制以前のコンピュータ暴走事件をオーバーラップさせ、人類存続（そんぞく）の危惧（きぐ）を覚えたグループの中心人物スティングレイ博士は、〝機械生命体〟の人工知能に「永遠なる人類の下僕（げぼく）」としての〝生物学的洗脳素子（バイオ・ブレインウォッシング・ピット）〟を秘かに植え込んだ。

それは、〝機械生命体〟の人工頭脳の進化の度合を、プラスマイナス一〇〇〇として、学習によってプラス八五〇を超えると、記憶中枢（きおくちゅうすう）のニューロン上の洗脳素子が働きだし、思考中枢を刺激して応用力をゼロにしてしまうものである。すなわち、〝機械生命体〟の人工進化をくい止め、行動パターンを画一化（かくいつか）させてしまうウィルス・プログラミングに似たものだ。このピットは、以後、あらゆる〝機械生命体〟の製造のたびに、その人工知能の正規基礎データに付着（ふちゃく）して潜り込むように設（もう）けられた。

いずれにしても、〝機械生命体〟のパテントと製造技術を独占的に掌握（しょうあく）するＧＥＮＯＭ

は、早くも、西暦二〇二三年には殺到（さっとう）する諸外国の注文に応じるべく、目的用途別にさまざまなタイプの〝機械生命体〟の量産を開始した。一体一体が、この時代の最新鋭戦闘機の製造コストに匹敵（ひってき）するプライスながら、その需要（じゅよう）は急増し、NIPPONの外貨獲得第一位の最重要輸出品となり、再びGENOMを、国際社会において、モルガン財閥と対等の経済的発言力を持つ存在にした。その需要の伸びの背景には、国際間にまたがる超集合企業体（スーパーコングロマリット）としての特質を生かした、国際法の盲点（もうてん）をついた〝機械生命体〟の製造のトリックがあった。

西暦二〇二五年になると、従来の〝機械生命体〟が持つ自己診断機能（セルフ・サーティフィケイト・ファンクション）、自己修復機能（セルフ・リカバリイ・ファンクション）を発展させて、初期型ながらも、物質融合機能（フュージョン・ファンクション）をそなえた脅威的（きょういてき）な戦闘能力を持つC系列タイプの〝機械生命体〟や、C系列機能を加えた宇宙戦闘用のD系列の発展型であるB系列タイプ、最も人類に近い姿形（すがたかたち）からD系列タイプを改造して創（つく）られた愛玩（あいがん）用のセクサロイド・S系列タイプなどが出現した。それら、〝機械生命体〟は、新旧あいまって、人間社会の中でしだいにその数を増し、いつのころからか〝BOOMER（ブーマー）〟と呼ばれ、各国主要都市部で、戦場で、頻繁（ひんぱん）にその姿が見うけられるようになった。

「内区（ないく）」と呼ばれる「インナー・ディストリクト」のTOKYO第六区（旧東京の初台（はつだい）あたり）にある円錐形（えんすいけい）の超巨大建造物（スーパーメガ・ストラクチャー）は、全高一〇〇〇メートルに近く、エクステリア

をスモーク・ブラックのミラーグラスでおおい、完成後の総体積は約一億七〇〇〇万立方メートルになる真に現代の〝バベルの塔(とう)〟といえるものだった。完成後というのは、着工以来八年をへてもなお、天空に向けて増築をつづけているからだ。

　この超巨大建造物は人々から〝タワー〟と呼ばれ、GENOMの総本山(そうほんざん)ともいえる本社ビルで、人類の持てる技術と複合知性の粋(すい)を集めて建造されているものである。そして、GENOMは、すでに〝タワー〟の下層部で超集合企業体の中枢機関(ちゅうすうきかん)を稼動(かどう)させており、世界各地の主要都市にもスケールこそ違え、同様(どうよう)の〝タワー〟を建造しながら、多業種、多分野にわたる関連機関をコントロールしていた。

　この〝タワー〟を中心に、TOKYOの超技術風景(テクノスケープ)は広がりを見せ、「インナー・ディストリクト」には、インダストリー、アカデミー、ハビテーションの各ゾーンに、人間性を完全に払拭(ふっしょく)させたようなインテリジェント・ビル群が立ち並んでいた。

　それに反して、「外区(がいく)」――「アウター・ディストリクト」には、都市開発計画から完全に忘れ去られ、ガソール車と電気自動車が往来する喧噪(けんそう)の旧市街(きゅうしがい)が、そこに群(むら)がり暮らす人々の異様(いよう)な熱気に包まれて存在していた。湾岸地帯(ベイエリア)には、すでに外洋を望む海原としての面影(おもかげ)はなく、「国家事業として推進(すいしん)されている、機能優先性構造物(コントロール・ファンクショナライズド・ストラクチャー)C・F・S、すなわち、浮体工法をもって海をおおいつくさんばかりに建造されつつある

第1章　異変

1

西暦二〇三二年三月某日夜――。

東京湾上の人工群島のひとつ「浮揚区」の二〇五区に、ＵＳＳＤの宇宙軍事開発センターが設けられていた。無機質で虚飾のかけらもないセンター内の地下三階にある研究室で、Ｂ系列ブーマ、すなわち、宇宙戦闘用の新型ブーマをとり囲んでさまざまなタイプの科学者、アシスタント研究員が実験をくり返していた。室内には、この時代の、この国の富を象徴している最先端のレーザー記憶装置や超高速計算装置などを有する知的コンピュータ・システムの端末機およびモニター類がそう広くもないスペースを埋めつくしていた。

そしていま、その中央部にはＧＸ―２と呼ばれるブーマが一体横たわっていた。ＧＸ―２の身体じゅういたる所から露出したプラグが、さまざまな色分けのコードで、コンピュ

「浮　揚　区」と称される人工群島と、幾条もの幹線、環状道路が人気なく見えるばかりだった——。

大規模な環境汚染、そして、理念のかけらもない夢の電脳社会。夢を見ないブーマと夢見ることをやめた人々の混在する、倒錯した超巨大技術集積都市ＴＯＫＹＯ。

バイオニック器官のおかげで長生きしすぎている老人たちと、人体改造手術で強靭な身体を創り、五〇歳になれば消去されてしまう厭世的な顔つきの暴走グループ。

明るい未来を信じる少数派と、暗い未来を憂う多数派が混在し、見せかけばかりがやたらと発達して、危険きわまりなく風船のように膨張しつづけるＴＯＫＹＯ。

そんなＴＯＫＹＯに大変革の時がきた。突如としてすさまじい地鳴りとともに、Ｍ８クラスの超巨大直下型地震がＴＯＫＹＯを襲ったのである。

西暦二〇二五年のクリスマス・イブの夜だった——。

——この物語は、それから七年後のティンセル・シティ（見せかけの街）と呼ばれ変貌したＴＯＫＹＯを舞台に、人類の技術が産んだ「恐怖」と「混乱」を描いたものである。

ータにつながれていた。ＧＸ－２は、すでに完成の域に達していた。いや、誕生して呼吸し始めたといったほうが適切な表現だ。人間の赤子のように、生まれてまもないために、なにゆえに自分が存在しているのかを知らないだけだった。彼の生命活動は、端末機のグラフィカル・データ群の赤、青、オレンジなどの色の明滅によって知ることができる。

彼の体内に埋め込まれたマイクロＢ・Ｉ・Ｃ——バイオピット・インタフェース・コンピュータには、いましも、これから彼が活躍する場所、０Ｇ０気圧での最新鋭戦闘ブーマとして必要なデータがインプットされ、やがて、内蔵する有機モーターを作動させ、活力を得て静かにゆっくりと覚醒するはずだった——。

だが、ＧＸ－２はそうしなかった。見守る人々の期待を裏切り、データインプットの最中にコード束を引きちぎって上半身を突然はね起こしたかと思うと、ブルッと、身体を数度震わせ、狂ったように暴れだしたのである。

外部からの何者かの干渉を受けて、ＵＳＳＤの誇るコンピュータ・システムが制御不能におちいり、恐怖のサイバードロイドとして、ＧＸ－２を産みおとしてしまったのだ。

彼によって惨殺されていく人々の、断末魔の叫び声が、停電したパニック状態の研究室にあふれ、この事件は、警報装置によって、またたく間にＵＳＳＤの保安局に伝わっていった。だが、始末の悪いことには、国際法上で違法とされていた宇宙戦闘ブーマの開発が、

外部に露見することを恐れたUSSD首脳部が、保安局にその事件の処置をまかせ、闇から闇へと事の顚末を葬り去ろうと画策したことだ。

彼ら首脳部は、この時点ではまだ事件の重大さを知るよしもなく、また、GX－2の知能レベルを過小評価しすぎていた。B系列ブーマといえども、誕生まもない、たかがサイバードロイドの始末にそんなに手間どるはずがないと考えた。過去に幾多のブーマを開発し、製造してきた彼らにとって、むしろ、そう考えるのが当然だったのかもしれない。

しかし、GX－2は並ではなかった。まるで、人間に対して、すさまじい憎悪の念を抱いているかのように暴れまくった。彼は、警報ブザーがわめき、非常警告灯がまたたくセンター内の迷路のような地下通路で、破壊のエネルギーをまき散らしながら、地上への出口を求めて移動していった。奇妙なことに、彼は人間が構築したすべてのモノに造詣が深く、人間というひ弱な存在とその行動パターンさえも熟知しているようだった。そればかりか、おのれの存在のなんたるかと、生まれ持った使命のなんたるかをすでに心得ているかのようでもあった。

そんなGX－2を相手にして、悲劇の渦中に飛び込んでくる、上からの命令で動く警備隊員たちが哀れである。いつもならば、ブーマの一体くらい、充分に駆逐できる重火器がてんで役にたたないのだ。一秒たりともGX－2の動きを止めることすらできないで、エ

レベーターからなだれ出た直後にGX—2の獲物にされていく。死の恐怖だけが彼らの友で、目の前のブーマの存在を許した社会への怨念だけが、いくらか彼らのうちに残る、戦闘のエネルギーだった。彼らは、この新型のブーマをひと目見てさとってしまったのだ。すべての行動がむだでむなしいことを。そして、そんな彼らを支援すべく殺到してくる別動隊も、やがて同じ運命をたどるであろうことは、たやすく察知できたのだった。

いずれにしても、彼らはよく戦った。脳さえ損傷を受けなければ、バイオニック器官満載のサイボーグとしてよみがえれる雇用条件の保証もある。隊員の中にはすでに、過去の対ブーマ戦でもぎとられた手足を機械にかえてしまった者もいるのだ。

だが、二級品のパーツを支給されてなんの役にたつのかという反論もある。現に、仲間のモノは安価なD系列タイプと呼ばれる汎用ブーマのシリコン・プラスチックとコラーゲンや天然重合体でできた胸板にさえ、風穴のひとつもあけることがかなわないみじめな義手、義足だった。ましてや、最新鋭のB系列ブーマが相手である。残忍で邪悪なGX—2の両眼が、閃光のように自分に向けてカッと輝き、その直後、もしも、破壊されていく肉体の中で、苦痛とか恐怖とかを自覚できたならば、彼らにできることは、薄れゆく意識の淵から声にならない声で、「まだ脳はだいじょうぶだ」と叫ぶしかない。

そして、結局、彼らは二度とよみがえることなく瓦礫と、血の海の中に、もと人間だっ

たとは判別しがたいほどの、つぶされ、引きちぎられた大小さまざまな肉のかたまりにされたのだった。

何がGX―2を狂わせたのか。巨大技術集積都市ティンセル・シティの闇部にひそみ、驕れる一部の人間の狂気が産んだ殺人サイバードロイド――B系列タイプ宇宙戦闘用ブーマ、GX―2は、USSD首脳部の憔悴をよそに、ブーマならではの強引さと非情さをもってその後も破壊と殺戮をくり返し、大都会の夜の闇に消えていった――。

2

西暦二〇二五年の第二次関東大震災の痕跡は、ティンセル・シティTOKYOを南北に二分する巨大断層として、この街の名物になっていた。現在まで七年間におよぶ復興作業は、壊滅的な打撃の大きさゆえに、「外区」はいまだ手つかずで、放置されているのが現状である。

だが、そんな行政指導の手際の悪さに、業を煮やした「外区」の住民たちは、みずからの手で街の復興に努めた。

その結果、「内区」の、統制のとれたインテリジェント・ビル群による超近代建築が醸すクールきわまりない景観とは正反対に、街としてのバランス感覚をなくした、貧民街と

安普請の新築ビルが混在する奇妙な住空間を生み出した。「外区」は「内区」からはみ出した人々のたまり場で、その大半が低所得者層で構成されていたため、いつしか住民のモラルは低下し、犯罪事件も日常茶飯事となっていた。

「外区」のどの街並にも数多くの老人が見られ、彼らの顔をしかめっ面にする鼻つまみ者の若者たちがいた。人工群島でGX－2騒動が起きたのと同時刻、将来のビジョンを見出せぬそんな若者たちの多くが鬱憤晴らしにたむろしていたのは、「外区」五五区のダウンタウンにあるライブハウス「HOT　LEGS」だった。

淡い蛍光ピンクで輝く「HOT　LEGS」のしゃれたイルミネーションの真下にあるドアをあけると、店内の猥雑なムードが、大音量のロックのリズムとともに伝わってくる。ステージ上にはスモークが立ちこめ、逆光ぎみのレーザービームがこの店の看板バンドである「プリス・アンド・レプリカンツ」を浮かび上がらせていた。

フロアを埋めつくす若者たちからの熱気と、バンドの放射する熱気が、狭い店の中でうまく溶けあい、そのキープされたライブの興奮がシンセドラムスのソロとともに、徐々に高まっていく。曲は「LOVE　ME　TONIGHT」。一九八〇年代後期を飾ったロック・バラードのカバーだ。やがて、タメのきいた重いフレーズを披露するかのようにかぶるシンセギター。次に渋い味つけのキーボード、そして、リードギターへとつづく。

今夜のプリスのバックコーラスは、ワンナイト・スタンドのリンナとネネの二人。ロックライブにふさわしいコスチュームとパンクっぽい派手(はで)な髪型で、ふだんの彼女たちを知る者でもたぶん見分けがつきがたいほどに変身していた。やがて、なかなか嵌(ハマ)ったノリのよいバッキングを背に、けだるい眼差(まなざ)しと小悪魔的な形のよい唇(くちびる)をした長い金髪のリードボーカル、プリスがスレンダーな身体(からだ)を震わせて歌い出す——。

——So many nights

——So many dreams

——There are them running in my sleep

——There's too much pressure in my mind……

プリスはこの曲が好きだった。歌いながら天井(てんじょう)のスポットライトを見つめ、その光に目を痛めながら、その光をバイクのヘッドライトに見たて、バイクとこの曲が好きだった、心を許した優(やさ)しい男の顔を脳裡(のうり)に描(えが)くのだ。

歌うプリスの額(ひたい)からくび筋へと流れる汗、逆光に映(は)えながら、しなやかに波打つロングヘアー。レプリカンツの完璧(かんぺき)なサポートで「HOT　LEGS」の女王の歌声がビートロッカーをきどる若者(カッティング・エッジ)たちの魂を揺(ゆ)さぶる。時代の最先端へと疾走(しっそう)することを夢見る孤独な連中の、ネクスト・ジェネレーションをきどる意気(いき)がった魂(たましい)が、しだいに彼女のソウル

に染まるのだった。だが、そのうちのだれが、歌うほどに恍惚とした表情を見せるプリスの心象風景を見すかすことができるだろう。

実際、プリスは歌いながら、自分でも信じられないくらい、心の内に〃オンナ〃をむき出しにしていった。

その〃オンナ〃の部分が、いつしか肉体という檻から解放され、外へ抜け出る。雑多な形状の太陽熱集熱器を持つうす汚れた雑居ビル街とスラム街が、彼女の目前に広がった。波動的に妖しげなうねりを見せながら、老若男女の浮浪者や不眠症患者のような遊び人で満ちあふれる雑踏の街を過ぎると、やがて、巨大な断層が街を分断している。黒々としたその亀裂の底辺には、工事途中で放置された油まみれの建築機械や小型ジェネレーターが小さく見える。落差三五メートルはあろうかという断層面には、さびついた配送管や下水管が、大都会の病んだ神経組織の一端を披露するかのように露出し、あたり一面をおおいつくしていた。

——I'm getting to find myself with you

——I didn't know what things to do

——Now that you're here to guide me

——I feel more secure……

心地よい緊張感をともなう、レプリカンツのリフのきいた演奏は、いつか、極彩色の音の洪水となって、プリスを熱く包み込み、やがて、それらは巨大な翼となって、彼女の飛翔を助ける。断層を越えると、やがて、彼女の視界に超スピードでいきかう車のテールランプとメインライトで構成された光の河――「内区」をとり巻く超高速高層道路が入ってきた。二四時間フル稼動のティンセル・シティの大動脈だ。そのフリーウェイの上に、彼女は、車の輝きにまさる照り映えるような輝きを持つ双眸で、恋しいひとりの男の姿を探し求めた。超スピードで地をはう彼女は、いつしかバイクに変容し、フリーウェイ上をさまよう。孤独なハイウェイ・スターをきどるうちに、胸部にあるスピード・メーターの、デジタルディスプレイの輝度が上昇し、心臓の高鳴りが速くなった。猟犬のように発達した嗅覚が、求める男のニオイを捕らえたのだ。だが、ニオイばかりでいつまでたっても男の姿は見あたらない。そのもどかしさがやがて、彼女を憔悴させていく。が、しかし、彼女には最初からわかっていたのだ。この曲を演れば、こうなることが。だれにも知られずに、男の優しさを想い描く、これがプリスの現在の流儀だった――。

――Open your arms I need to touch you

――I wanna feel your love

――And here you say goodnight……

光の中で揺らぐ髪が、熱い汗でプリスの頰や唇にまとわりつく。力を込めたほうの手はマイクを唇に、もう一方の手はさもいとおしげに髪をかき上げる。随所に透明なプラスチック素材を使った合成繊維のステージ衣装は、みごとにひき締まったプリスの肢体を、よりきわだたせるかのようにシャープなラインと色あいで構成されていた。その両肩は露出し、細く長い指で髪をかき上げるたびに、かいま見ることができる蒼白いくび筋とともに、今夜のプリスを妙にセクシーに見せていた。

そんな彼女の腰をうねらせ、半ばまぶたを閉じたような歌いぶりをグラス片手に店の片隅から見つめる黒革ジャン姿の男がいた。ティンセル・シティの特殊犯罪に対処すべく、大震災の二年ほど前に設立されたAD（アドバンスト）ポリスの凄腕刑事レオン・マクニコルである。あいつぐブーマ犯罪や、奇々怪々な特殊犯罪に、通常警察から移籍して以来ずっとふり回されつづけているレオンにとって、ひと事件かたづけたあとの唯一の楽しみは、プリスの歌を聴きにくることだった。

二五歳をいくつか越えた年かっこうの彼が、言ってみればミーハーの集まる「HOT LEGS」に通うのも変だ。だが、彼には彼なりの理由があった。仕事にかこつけて風俗だっていってしまうし、いい女に出くわせばダメでもともと誘いの言葉を口にする——ADポリスきってのナンパ刑事が、プリスに惚れていたのだ。

人並みにパトカーのラジオから流行のWAVEの音楽くらいは耳にするが、実際のところ音楽の趣味なんてない男だった。それでもラジオのスイッチを入れてしまうのは、四六時中、脳髄にこびりついてるレーザー砲と熱線砲の炸裂音や銃の発射音、擦過音を少しでもかき消し、忘れさせてくれることを願うからだ。

だが、プリスの歌は別格だった。ある日、犯人を追っている時、偶然に「HOT LEGS」の彼女のライブを見てからというもの、レオンは彼女に夢中になった。それ以来、女に対しては、行動力と図々しさだけがとりえのレオンが、妙にプリスを意識して、あんまり女遊びをしなくなった。あんまりというところがレオンのレオンたる所以なのだが……。それにしても、レオンのプリス熱による浮かされ方はそうとうなもので、オカマの相棒のデーリーから、事あるごとに顰蹙を買っているのである。

冗漫な語り口で人に接し、本心をあまり語らない男だから、なぜプリスが気に入ったのかは本当はだれにもわからない。だが、たぶん、音楽の歌詞としてじゃなく、モノローグとしてプリスの歌を耳にし、その身体にあふれ出た本音の部分を見てしまったために、プリスを自分と同類の人種と思い込んでしまったのだろう。

多分、レオンが見た本音とは、プリスの「野性」を失わぬ強さであり美しさなのだ。文明のきわみといった観があるティンセル・シティの暮らしは、あらゆる生き物を肉体的、

精神的にむしばみ、その代表たる人間を知らず知らずに醜い存在にしている。だれしもが、技術偏重の都会が産み出す緊張とプレッシャーの連続する暮らしの中で、深刻で救いがたいストレスを抱き、「野性」という言葉すら、思い出せぬままにいるのだ。だが、プリスはそれを持っていた。だから、彼女の歌――その純粋な魂の叫びが、聴く者の胸をしめつけるのだ。

そう、レオンが初めてプリスの歌を耳にしたときも、この「LOVE ME TONIGHT」を演っていた――。

――Sing me a love song

――Come hold me tight

――Make me feel strong

かすかな酔いがレオンの心地よさを増し始めた。そのとき多機能腕時計がかわいい音をたてて明滅しだした。ADポリスからの呼び出しだ。時刻は午前〇時三〇分だった。

レオンはカウンターに飲みかけのグラスを置くと、渋々とした態度で若者たちを分けながら、店内の奥に設けられたボックスに入った。TV電話に公用のクレジットカードを差し込み、プッシュボタンを押す。モニターに現れたのはデーリーだった。

「部長がカンカンよ！　レオン。一二区のキャナル・ストリートを西に向かってとんで

もないやつが移動中。ブーマかもよ……」

いつもながらの少し鼻にかかったカマっぽい言葉だ。少しくさった表情で適当な相槌を打って電話を切るレオン。店の勘定をすませ、胸ポケットから年季の入ったドライヴィング・グラスをとり出しながら足早に店内を出た。グラスをかけながら、ストリート上に無造作に駐めてあるV4DOHC5バルブのGENOM製チューンアップバイクのエンジンをめざめさせる。その瞬間、腹に響きわたる4INTO1のエキゾースト・ノートが夜の闇を震わせる。レオンはキック・ダウンとともにすばらしいダッシュを見せてキャナル方面に向かった。

レオンのいく手にある超高層ビル群で占められた「内区」は、昼間の騒音とは比べものにはならないが、かなりの騒々しさに満ちていた。ティンセル・シティの司法行政のメッカである官庁街では、解体された都庁ビルのあとかたづけが行われ、そこかしこのストリートはしょっちゅう掘り返されている。一度ならず、二度も三度も同じ場所に、国家予算を浪費しているのだ。人間が機械を眠らせないのか、機械が人間を眠らせてくれないのか？　その答を求めるかのように天空に向けて聳え立つ水上都市の巨大な不夜城〝NEWタワー〟がビル群の上に見えていた。

人間の傲慢さとはてしない欲望の創造物〝タワー〟の不気味さは、ティンセル・シティ



の上空を飛んだときにわかる。非現実的なその超巨大建造物（スーパーメガ・ストラクチャー）は、創世紀以前からこの地に存在していたのではなかろうかと錯覚させるほどの威容（いよう）を誇っていた。

その高み――それでも〝タワー〟の中腹あたりだが――を、一機のヘリが飛ぶ。ADポリスのポータブル戦闘ヘリコプター〝ファイア・ビー〟だ。〝タワー〟を中心にして、毎晩ティンセル・シティの治安維持（いじ）のため、哨戒（しょうかい）活動をしているのだ。ときおり、高みから低空飛行に移り、ビルの谷間へサーチライトを照射して闇をさぐる。違法ブーマの掃滅（そうめつ）や、暴動の鎮圧（ちんあつ）が主たる任務の猛者（もさ）たちからなるADポリスの中で、空襲隊として、勇猛（ゆうもう）をもって知られる存在であった。機体の傷や、パイロットの暗視覚（ノクトビジョン）ゴーグルの傷（いた）みぐあいでそれがわかる。

「――キャナル・ストリートを西へ移動中の物体は、装甲歩兵、もしくは、軽歩行戦闘機と思われる。全ADポリスに、フォーメーションＥ（エレファント）―〇八〇を要請（ようせい）、現場に直行せよ――！」

「了解！　こちらＦＢ（ファイア・ビー）三番隊五号機のギルバート。現在山の西南部を定期警邏（けいら）中、ただちに現場に直行します」

〝ちっ、毎度のことながら色気（いろけ）のネェ女（アマ）だ。こちとら疲れてんだ。もう少し言いようがあるだろうがっ！〟

ギルバートは腕に力を込め、スロットル桿を引くと、機体をキャナル・ストリートに向け、猛スピードで直行開始した。一二区なら五分も飛べば着くところだった。少し高度を上げると、一二区から一三区にまたがって尋常ではない爆炎が、キャナル・ストリートを軸に周辺のビルを巻き込みながら走るさまが視認できた。やっかいな事件のようだった。その証拠に、横転して火を吹くパトカーや巻き込まれた一般車の残骸が道路を使いモノにならなくしている。さらに接近すると耐火防弾スーツ姿の仲間が爆風のアオリをくらったらしく負傷し、動ける者はその救援にあたっていた。

「こちら五号機のギルバート、区境で大規模な爆発事件が発生！　当局車両および一般市民が巻き込まれたものと思われる」

「了解、救助班を回します。五号機は、ひきつづき、犯人が逃げこんだと思われる一三区のティンセルシティ・バンクに回り、八番隊と合流して警戒にあたってください……」

どうやら今夜はまともに眠れそうもないと彼は思った。E―〇八〇のEは「EXECUTION」と「ELEPHANT」の頭文字をひっかけた〝存分に本領を発揮して象のようにに敵をブッつぶしてしまえ〟といった意味からきているのだ。〇八〇はその最高段階一〇〇のうち、八〇パーセントの戦闘力を示す。それでもめったに発令される作戦じゃない。ADポリスが本気になれば、この国の軍隊を相手にだってりっぱに戦ってみせるほどのパ

ワーを有しているのだ。つまり、ハンパじゃない金をかけた特殊装備の武闘集団なのだ。そのADポリスがE－〇八〇――エレファント作戦をとる以上、相手もそうとう手強いやつといえた。いったい何奴か？　彼の関心は事件そのものの内容よりも、そっちのほうにあった。どのみち、ティンセル・シティで起きる犯罪には、人智を超えた狂気ばかりが目立ち、理解しようとしても、単なるエアマンの職分で理解できるほどなまやさしいものではなかったのだ。

3

一三区の大通りを、けたたましいサイレン音を上げ、パトライトを点滅させたADポリスの特殊装甲ビークルが走り、数台のADポリスパトカーで囲まれたティンセルシティ・バンクの出入口前で急停止する。そのビークルから重装備の隊員たちがぞろぞろと大口径速射ダイアット・ガンを重そうに携えて降り立つ。彼らのむだのない動きを、通常警察隊の規制を受けながら、野次馬市民たちがかたずをのんで見守っていた。ライアットダウナーズとしての威圧感を漂わせたADポリスの戦闘ぶりをじかに見られることが、この街に住む彼らのストレス解消の最たるものなのだ。そんな彼らをますます狂喜させたのが、噂ばかりが先行してなかなか姿を見せなかったスレイヴ・サイクル〝パト・ローダー〟の実

戦参加である。四〇ミリ多目的ランチャーを二基胸部に有し、二五ミリS・Dレールガンを持った〝パト・ローダー〟は軍用装備が大半を占めるADポリスにとって、数少ないオリジナルだった。正式には〝モーターサイクル形状可変式半自立行動アシスタント・ドロイド・VIX一九〟と長ったらしい名称を持っていた。この自己判断で攻撃、追跡、防御行動をとれるロボットの開発には、殉死率が異常に高いADポリスの上層部の隊員に対するポーズが見え見えで、一部の隊員からは顰蹙を買っていた。いつもならめったに現場に姿を現さない黒人署長のアーサーが陣頭指揮をとっているのも、やはり、そのポーズからであった。

「レオンはどうした、デーリー？　この非常時に、んったくとんでもネェ野郎だ。しっかり連絡とったんだろうな？」

はげ上がった頭から湯気でも出そうな形相でどなりちらす傲慢な態度のアーサー。ADポリスの連中なら、すでになじみの癇癪持ち署長の口調である。

「やってますよ。一二区の処理がすんだらこっちに向かうと言ってましたから。――それよりVIXですが、いいんですか、突っ込ましちまって？」

「しゃあネェだろ！　なんとかかっこうつけなきゃ今年下半期の予算が削られちまうんだ。まっ、俺の知ったこっちゃネェけど。おまえ適当に遊んで上を喜ばせてこい！」

「責任持てませんよ。犯人の面しだいでその気になるかもしれませんが、俺にだって好みくらいありますよ……」

「じゃなにか？　俺にオカマのかわりをやれっていうのか？」

ふだんでも丸いふくれっ面のアーサーの顔が腹だたしそうに口腔に息をためてさらに丸くなった。そのぶ厚い唇が歪んで、毒づきだしたらやっかいなことになる。アーサーの切り札である減俸処分を引き出すことになるのだ。刑事はいつの時代も薄給なのだ。

「了解！　やりますよ。お望みどおりりっぱに遊んでみせますよ」

ふてくされぎみの気のない返事を吐くと、デーリーはアーサーに背を向け、身ぶり手ぶりで二人のやりとりを楽しんでいた部下たちに指示を与えた。迅速な対応で、デーリーの指示どおり行動する隊員たち。ダイアット・ガンのマガジンをチェックし、セイフティ・カバーを解除すると、レーザーサイトをONにしてシティバンクの出入口に接近し、二手に散開する。出入口付近は、犯人の強大な破壊力にみまわれた証拠に、ひしゃげたシャッターや壁の破片が散乱している。

ついで、いよいよVIXの出番だ。セラミック製三軸ガスタービンの乾いたようなエンジン音を響かせ、デーリーの指示に従う猟犬のように足元の破片を蹴散らしながら、出入口の暗い口をあけた穴に入っていく。そのあとにデーリーと身がまえた隊員三名がつづく。

付近の空からは、ホバリング状態で待機する先ほどの五号機を含むヘリ数機がけたたましいメインローターエンジンの音をたてていた。

ＶＩＸの白色サーチライトに照らし出された広大なバンク内には、いたるところに戦闘の痕跡が見えた。非常ベルもなぜか作動していない。破壊されたＤ系列タイプのガードマン・ブーマ数体の残骸を確認しながら、戦々恐々としたおももちで漆黒の闇をＶＩＸとともにさぐるデーリーたち。地階への通路にさしかかると突然、先頭のＶＩＸのターゲッティングシステムが過敏な反応を示した。

「待て！」

アドレナリンを噴出させてダイアット・ガンを身がまえる隊員たちを制しながら、デーリーはＶＩＸにサーチライトを消させた。標的になるのを嫌ったのだ。それから彼は、二〇メートルほど先の通路奥の階段付近を注視しながら、胸のホルスターから大型拳銃を抜き、セイフティ・レバーを解除する。ＶＩＸのエンジン音と、物陰にひそみ、息をのむ彼らの高鳴る心臓の動悸がシンクロして、あたりに、異常な緊迫感を漂わせる。

地階はパブリック・スペースになっている。その連絡階段から何者かが上がってくる不気味な音がしたのだ。ＶＩＸのレールガンがその音の方向へ向けられ、照準を合わせようと微妙な動きをする。その音の性質は擦過音だ。硬質製のステップをきしませ、重い金属

質の物体が上がってくるときのすれる音だった。その音にときおり、有機モーター音の唸りがまじる。

〝ブーマ？　としたら、Ｃ系列か？　やばいな、ここじゃ狭すぎるかも……くそっ、ＶＩＸなんて連れてくるんじゃあなかった。こう騒々しい音をたてられたんじゃ相手をその気にさせるばかりだ。どうするデーリー？〟

レオンとともに対ブーマ戦で幾度となく死線を乗り越えてきたデーリーだから、ブーマの手強さは充分承知していた。しかもＣ系列の戦闘ブーマならなおさらのこと、一体で重武装の軍事小隊を平然とかたづけるほどの戦闘能力を持つ化物なのだ。軽装のデーリーたちがＣ系列ブーマと対峙して、もしも勝機を得られるとしたら、それはブーマのターゲッティング・システムが作動する一瞬の隙をついて、唯一の弱点ともいえるセンサーが集中する頭部にありったけの弾をたたき込むことだ。

だが、そんなタイム・ラグを突く作戦も新型ならば改善されていて通用しない。なにせ、ブーマを開発しているのは世界でもトップランクの科学技術を持つＧＥＮＯＭで、そのＧＥＮＯＭの系列下にある兵器工場の産物がＡＤポリスの重火器なのだ。つまり、ことブーマに関する限りＧＥＮＯＭ対ＧＥＮＯＭの技術合戦といえた。

デーリーが危惧するＣ系列タイプは特に最悪のブーマで、中枢の一部には自己修復再生・

機関を持ち、全身を超密度分子アボテックスでおおわれた〝歩く戦車〟である。その最上級タイプには、さらに物質融合機能が加わり、なんらかの理由で悪用でもされたら、機械じかけの都市などは、乗っとられる危険性だってあった。デーリーはC系列タイプじゃないことを祈った。全身から脂汗が吹き出る。

「きます！」

だれかが低く叫んだ。階段付近の闇の中空に突如赤い光点が二つ浮かぶ。攻撃態勢に入っているブーマだ。VIXのサーチライトが再び照射されると、身長二メートルはあろうかというブーマが、眼孔部から数本のセンサーをむき出しにして立っていた。双方同時の攻撃開始だった。VIXのレールガンやデーリーたちの攻撃をかわし、口からのビーム攻撃で応戦しては、通路の中をすさまじいスピードで跳躍しながら迫るブーマ。そのあり余る破壊力をもって肉弾戦にもち込むつもりだ。隊員たちは驚愕の表情を浮かべ、ダイアット・ガンをブーマに向けて乱射する。俊敏なブーマは、死の恐怖を持たぬ分だけ猛獣よりも始末が悪い。彼はその機能が停止するまで戦いつづけるマシーンなのだ。

「ジョー、ロドリゲス、ランディ、一時撤退するぞ。急げ！　VIX！　グレネード攻撃だ——やれ——っ！」

デーリーの叫びと同時に、VIXの胸からグレネード弾が発射された。一目散に逃げ出

すデーリーたち。背後で耳をつんざく爆発が起きた。直後に逃げ場のない爆風が猛烈な熱真空となってデーリーたちに追い迫る。轟音で頭をしびれさせ、裂震に足をとられながら、必死の思いで外に逃れたデーリーたちを待ち受けていたのはアーサーだった。

「中で何があったんだ？　ＶＩＸはどうした？　説明してくれるだろうな、デーリー！」

「ちょっ、ちょっと待ってくださいよ、ファーッ……もう大変！　やはり、ブーマが一匹ひそんでましてー——ハァハァ……」

まだ息が整わないデーリーがからになった銃に弾を込めながら答える。その目はバンクの出入口を気にしている——。

「……狂暴なやつでして、フゥ……暗がりでしたからタイプはなんとも言えませんが、たぶん——Ｃ系列の……」

「——んなことはどうでもいい。おれが知りたいのはＶＩＸがどうなったかだ。まさかおまえ……やってくれたんじゃあんメェな？」

「イヤーッ……その、署長の期待にそうよう、充分遊ばせてあげたつもりでして……」

アーサーの目尻がひくひくと小刻みに痙攣しだす。そのとき、煙と炎でいぶる出入口に人影が立った。ハッとして銃を向けるデーリーとＡＤポリス隊員たち。

「派手にやってくれたじゃない。裏口から入ったとたんのドカーンだもんな。シビレちゃうぜ、まったく――」
口中からとり出した超小型酸素ボンベを胸ポケットにしまいながら、レオンが現れた。
「レオン！」
ほっとした調子でデーリーが声を上げ、駆け寄る。
「よお、デーリー。おまえさんか？　この始末は――銀行の中はメチャクチャだぜ。こりゃあしばらく使いモンにならないかもよ……」
「そんなことよりやつは？」
「ああ、かたづいたみたいだぜ。よーし、そいつ持って出てこい――そのまま、まっすぐ歩くんだぞ――！」
レオンはふり向きざまにバンク内に声をかける。中からおぼつかない足どりで満身創痍のパト・ローダー・ＶＩＸが現れ出た。外装パーツのほとんどが爆発で吹き飛んだらしく、火炎で決まっていた塗装は焼け落ち、出動時の面影はまったくなくなっている。歩行困難をきたしているのは、頭部が半分失われていたからだ。それでもＶＩＸは勇者の誇らしさを保っていた。左のマニピュレーターに戦利品のブーマの頭をつかみ持っていたからだ。
目を丸くして唖然とするアーサー。まわりから歓喜の声がわき上がった。

「よーしっ、おやっさん！　おまえさんの班は現場の検証にあたってくれ。それから、デーリー！　ちょっと……」

温厚な年輩の部下ハマーに指示を下し、デーリーに声をかけながらレオンは人ごみから脱出しようと歩を進める。ＶＩＸの前で立ちつくすアーサーを尻目に、デーリーがレオンのあとにつづく。やがて立ち止まったレオンはデーリーの肩に腕を回しながら言った。

「デーリー、おまえどう思う、今回の事件――？　どうも俺には腑に落ちネェ点が多すぎる」

「どおって？　……どおせ、悪徳ディーラーが仕入れた違法ブーマを使って、だれかさんが悪さしようと企んだにキマッてるわよ」

「そこだよ。さっきのブーマ……ありゃア正規登録のやつかもしれネェぜ。ほら、やつのナンバーだ。あとで本部に問いあわせてみてくれ」

レオンがポケットからつかみ出した紙片を渡す。

「型式ＤのＣＹ一五Ｂ、機体番号ＣＹ一〇〇一Ｙ……これがやつの？　Ｄ系列ってことは、シティバンクの飼い犬ってこと？」

「ああっ。なぜ狂っちまったかは知れねえが、少なくとも一二区で暴れまくったやつとは――」

「――違うってわけね。じゃ、まだ犯人はほかにいる……」
「――かもな。一二区の現場から洗い直してみたほうがよさそうだ」
レオンとデーリーは互いに頷きあうと、またいつもの冗談めいた話に花を咲かせ、その場を立ち去った。一方、ハマー班は、ADポリスの移動通信班の持つ車載用コンピュータ検索機とのダイレクトリンクを完了して、バンク内に入っていった。すなわち、ハマー班のバンク内での行動は、検索機のモニターに全員生体反応が表示され、行動の逐一が通信隊員の知るところとなるのだ。

4

瓦礫の山と化したバンク内のフロアは、ところどころに炎が見える。その炎がVIXの撃ったグレネード弾の威力のすさまじさを物語っていた。アルミコーティングされた強化ガラス製の壁という壁は崩れ落ち、上下階の浮床のシャフトやフレームをむき出しにし、それらは、高熱と爆圧のため、溶けてひしゃげていた。ハマーと彼の部下五名は、そんなバンク内で検証作業を行っていた。瓦礫の中に点在するブーマの残骸を探し出すのは容易な作業ではない。浮床を突き破り地階へ落ちたものもあるのだ。
「こちら、ハマー。どうだバックス、そっちの様子は？」

作業に入ってから十数分後、ヘルメットを上げ、額の汗をぬぐいながらハマーが、地階にいる部下と携帯用無線通信機(トランシーバー)で連絡をとった。地階のパブリック・スペースにはバックスを含め二名が向かっていた。

「さんざんですよ。歩くたびにゴミがじゃまして検証どころじゃないスよ。どうぞー—!」

「そうか……まっ、適当にらしきモノを拾って、上がれ。俺たちもじき引き上げるつもりだ」

「了解!」

ハマーは交信を切ると口元をおおうかついガスマスクを恐る恐るはずしにかかる。バンク内には甘ずっぱいガスの匂(にお)いが、かすかながら立ちこめていた。ブーマの体液はバイオジメチルグラミンという複合有機剤である。それに含まれるブラスタグランジンという高濃度の化合物が、破壊されたブーマの身体からもれ出て、空気に触れ、気化すると発生する有毒ガスの匂いだった。人間がその匂いで死に至ることはないが、激しい嘔吐(おうと)とともに神経麻痺(まひ)に似た症状を起こすことから、ADポリスの隊員たちは対ブーマ戦では、ガスマスクを常用していた。

〝フウッ……だいじょうぶそうだな。さてタバコでも一服したら引き上げるとするか

……〃
ハマーは胸ポケットからタバコをとり出し火をつけながら、瓦礫のひとつに腰を沈めようとした。そのとたん、地階にいるバックスから悲鳴に近い声が銃声とともに届いた。
「こちらバックス！　こちらバックス！　化物が、出現。至急……う、うわあァ……」
「バークス！　どうした？　バークス――！」
ハマーの叫び声にアサルト・ライフルをかまえ、周囲を警戒する部下たち。ハマーはタバコを吐き捨て、そくざに外にいる通信班へと地階の異変を報告した。
「こちらハマー班、応答願います……」
「どうした？　地階の連中の様子がおかしいぞ！　何かあったのか？」
モニターで異変を感知していた通信隊員が声を荒げて答えた。
「下で化物が出現したらしい。バックスが殺られたもよう……イクオとホセの救出にこれから向かう――」
「まっ、待て！　署長の許可をとって……」
「冗談じゃない。俺の部下が殺られたんだぞ！　だれでもいいから応援をよこしてくれ、頼んだぞ――！」

吐き捨てるような声でハマーは報告を打ち切ると、二人の部下に対し、地階へのアタック開始を動作で示す。

ハマーは腰から対ブーマ用突撃拳銃を抜き、ベルトのグレネード弾をとりはずして銃口に装塡した。用心深く、そして、機敏な動作で階下へとつづく階段を部下とともに降りた。たどりついたパブリック・スペースの入口から内部の様子をうかがう。五〇メートル四方はあろうかというパブリック・スペースは漆黒の闇が支配していた。その闇の中から、とぎれとぎれに聞きなれぬ機械音と人のうめき声が聞こえる。ハマーはヘルメットの携帯用無線通信機で中にいるはずの部下との連絡を試みた。

「ハマーだ。イクオ、ホセ、何があった？」

「――――」

「どうした？　なんとか答えろ――！」

「――――」

返答がない。ハマーは交信をあきらめ、中に踏み込もうとすると、喉を締めつけられているような苦痛に満ちた返事がとぎれとぎれに返ってきた。

「……おやじさ…ん……全員やられ…ました。くそ野郎はまだ、ここに……逃げるんだ、逃げてくださ……グウォー――」

人体が強烈な力で圧しつぶされたならば発するであろう凄惨な響きを持つ絶叫を残して、イクオの連絡が絶えた。

「イクオーッ！　野郎、ぶっ殺してやる――！」ハマーが吠えた。

ハマーは部下のひとりに拳銃を放り渡しアサルト・ライフルを奪いとると、中に躍り込み、闇をなぎ払うかのように、見えぬ敵に向けてフルオートで掃射した。凶暴な火条がところかまわず走り、耳をつんざくライフルの噴射音がパブリック・スペース全体を震わせる。いつも冷静沈着なハマーが獰猛な怒りに身をまかせたのにはわけがあった。今年の秋には、ハマーの娘とイクオは結婚する予定だったのだ。ＡＤポリスに入る前に所属していた通常警察での長い警察官としての経験から、ハマーは、一人娘だけは警察官と一緒にさせたくないと考えていた。危険を生業とし、人を疑うことばかりが常の警官稼業に、心の底では嫌悪感さえ抱いていたのだ。そんな彼がＡＤポリスに入ったきっかけは、みずからの世渡りの不器用さもあるが、ブーマという機械人形相手の特捜仕事だったからだ。ＡＤポリスの仕事もハードだったが、辣腕警察官だったハマーには人間が相手じゃないという分だけ気が楽な職場だった。五〇過ぎた高齢ゆえ、ＡＤポリスでは主に検証仕事が多く、部下は二回りも違う見習い隊員たちであった。ハマーはそのうちのひとり、イクオに目をかけていた。正義感が人一倍強く、鼻っ柱の強いイクオに昔の自分を見ていたのだ。ハマ

ーがそんなイクオと自分の一人娘が、いつしか恋愛関係におちいり、結婚を望んでいると知ってからまだ日が浅い。猛烈な反対をしようにも、イクオたちの決意は固く、気押された感じで二人の仲を認めてしまったハマーだった。長くしみついた警察官としての習性で、公私混同に厳しかった彼は、早くイクオを一人前のADポリスにしようと鍛えてきた。その期待にこたえ、イクオは近々正規隊員に昇格する予定だった。だが、彼は気楽なはずの現場検証仕事で正体も知らぬ化物に惨殺された。ハマーは上司たる立場より、将来の義父としてイクオの理不尽な死を呪い、助けられぬ自分のふがいなさをうらんだのだ。

気づくとハマーの持つアサルト・ライフルはからになっていた。広大なパブリック・スペースを、変調をきたした空調装置の音が占める。部下のひとりが携帯用の照明具を点灯すると、サラサラとした白っぽい粉塵が霧のように血の臭いをのせて室内を舞っていた。ヘルメットのバイザー越しに見えるハマーのどんよりとした暗い目が、部下たちの不安をよりあおった。

「やっ、殺ったのか？　イクオのやつ、死んじゃったのかよ？　ホセも、バックスもみんな……よお！」

「し、知らネェよ、班長に聞いてみろよ……」

いつしかパブリック・スペースの中央部に三人はいた。呆然として立ちつくすハマーと、

銃をかまえながら中腰であたりを警戒する怯えきった若いふたりの部下。ハマーの手からアサルト・ライフルがドサッと床に落ち、その音が二人の部下の心臓を縮み上がらせる。ハマーのカンプフ・ピストルを持つひとりが、アサルト・ライフルを拾い上げ、予備のマガジンをつける。そしてピストルをハマーの手に戻そうと恐る恐る声をかけた。

「――班長、終わったんですか？　班長？」

「――――」

「どうなったんですか？　殺ったんじゃないんですか？　班長！」

泣き出しそうな部下の声だった。やおらハマーが動いた。ハマーは重くていかついヘルメットを脱ぐと、頑固そうな顔の筋肉を微動だにせず口を開いた。恐ろしく低い声だ。

「いるぞ！　そのライフルじゃだめだ。俺の銃をかせ！　いいか、おまえら動くんじゃないぞ、じっとしてるんだ。じきに助けがくる。それまでの辛抱だ――！」

ハマーの言葉を聞き、驚愕の表情を見せる部下のふたり。身体じゅうを小刻みに震わせて、恐怖のあまりにもらす言葉もなくしていた。無理もなかった。見習い中の身で、実戦とはおよそ関係のない部署の、それも未熟者がとんでもない災禍のまっただなかに置かれているのだ。だがすぐ血の気が失せ、恐怖で気が狂いそうなふたりに希望が頭をもたげた。多人数が、階上から駆けつける足音が聞こえてきたのだ。

〝助かった!〟

ふたりは救援隊と一刻も早く合流したい一心で、ハマーから離れた。その瞬間、彼らは出口を求めて照明具の光が届かぬ、塵芥の舞う闇の中へハマーの制止も聞かず、走り出した。その直後、身の毛もよだついやな音がした。形容しがたいおぞましい肉のひしゃげる音だった。音はそう遠くないところから聞こえてきた。再び強烈な憤怒と怨念がハマーの脳をやきつくしていく。救援隊がやってくるというのに、またしても、ふたりの部下を失うとは。ハマーはなんとしてでも、見えぬ敵を殺りたかった。身体じゅうの血が沸騰しきっているのがわかる。闇に突入してから、ほんの二、三分しかたっていなかった。

〝遊んでやがる、楽しんでやがるんだ、やつは。俺たちADポリスを屁とも思っちゃいない――なんてやつだ。くそっ! 見てろ、この塵芥がおさまったときが、おまえの最後だ。殺ってやる、きっと、殺ってやるぞ――!〟

より強い血の臭いが鼻をつく闇の中で、ハマーは温厚なかつての顔からは想像もつかぬ、陰湿な表情で呪詛の言葉をつぶやいた。

「誰かいるか――っ? 助けにきたぞ、返答しろ!」

救援隊の拡声器を通した声が闇に響く。サーチライトで闇を照らし出そうとしているが、空中を漂う塵芥でその光を遮断され、効果がない。だが、ハマーからは彼らの位置を想定

らも部下と同じ目にあうのだ。だが、ハマーの腐心はむだに終わった。最後の呼びかけから一刻の猶予もなく、救援隊は塵芥と血臭の闇の地獄に踏み込んでしまったのだ。ハマーと彼らの間の闇に色濃い殺気が噴き上げ、渦巻きながら凝固して、狂気の雄たけびが上がった。その瞬間、炸裂する重火器の光と噴射音、そして断末魔の叫びが、邪悪な化物の咆哮に同調するかのように闇を震わせる。

〝殺られた！　次は俺の番だ〟

ハマーは、トリガーにかかる汗ばんだ指に必死で気を入れながら、阿鼻叫喚の闇の地獄を凝視する。確実に死が歩み寄る。

「生き残っても——娘に会わせる顔も——な、い、か！」

ハマーのそれが最後のつぶやきとなった。

5

「内区」の一〇区は、こぎれいなアーバン・スモールビル——といっても一〇〜一五階建てのビルだが——通りに面して建ち並び、ティンセル・シティでも有名な高級ショッピング街として知られていた。そのビル群の中にあって、外壁面をアルミクラッディングと芸術的な全面ミラーガラスで装った二一階建てのビルがひときわ目を引く。

させるに充分な光だった。ハマーと彼らの距離はおよそ二〇メートルはある。ハマーは大声で答えた。

「ハマーだ。入るんじゃない！　化物がいるぞ——」

「——」

せいいっぱいの声を出したが、救援隊には届かなかった。壊れた空調装置がうるさかった。しだいに大きく闇に満ちてきたその機械音が、ハマーの声を届けさせないのだ。

「だれもいないのか？　ハマー班、応答しろ——！」

またしても救援隊の呼びかけだ。ハマーはなんとか連絡をとりたかった。殺戮好きの化物が舌なめずりをして闇にひそんでいるかと思うと気が気ではなかった。

〝——グレネードを撃って知らせるか？　でも、もしも味方に勘違いされたら、どうする……それにしても、なぜやつは立ち去らないのだ？　やつの目的はなんなんだ？　それとも、目的なんて持たぬ矮小な脳ミソの肉食獣のたぐいか？　人間を滅ぼすために地獄からわき出た悪鬼か？　そうか！　そうに違いない。じゃなけりゃ、こんな闇の中で、いつまでも立て籠っているわけがない。やつは俺たちをくらいたいのだ。くらいつくすためにこの世に現れたに違いない……〟

ハマーの頭の中を超スピードで、そんな思念が駆けめぐった。救援隊に知らせねば、彼

らも部下と同じ目にあうのだ。だが、ハマーの腐心はむだに終わった。最後の呼びかけから一刻の猶予もなく、救援隊は塵芥と血臭の闇の地獄に踏み込んでしまったのだ。ハマーと彼らの間の闇に色濃い殺気が噴き上げ、渦巻きながら凝固して、狂気の雄たけびが上がった。その瞬間、炸裂する重火器の光と噴射音、そして断末魔の叫びが、邪悪な化物の咆哮に同調するかのように闇を震わせる。

〝殺られた！　次は俺の番だ〟

ハマーは、トリガーにかかる汗ばんだ指に必死で気を入れながら、阿鼻叫喚の闇の地獄を凝視する。確実に死が歩み寄る。

「生き残っても——娘に会わせる顔も——な、い、か！」

ハマーのそれが最後のつぶやきとなった。

5

「内区」の一〇区は、こぎれいなアーバン・スモールビル——といっても一〇〜一五階建てのビルだが——通りに面して建ち並び、ティンセル・シティでも有名な高級ショッピング街として知られていた。そのビル群の中にあって、外壁面をアルミクラッディングと芸術的な全面ミラーガラスで装った二一階建てのビルがひときわ目を引く。

ダイナミックな懸垂曲線(カテナリーカーブ)を描(えが)くルーフラインを持ったペントハウスの住人は、どこか謎(なぞ)めいた美貌(びぼう)の持ち主、シリア・スティングレイと彼女の弟マッキーである。シリアは、このビルのオーナーで、一階のフロアを独占(どくせん)する高級婦人下着店(ランジェリーショップ)「ＳＩＬＫＹ　ＤＯＬＬ(シルキー・ドール)」を弟とともに経営していた。

なぜ、二〇歳を少し過ぎたくらいの女が、このビルを所有できたのか？　莫大(ばくだい)な親の遺産でもあるのか？　各階にテナントとして入っている、宝石店、美容室、高級ブティックなどの店主たちがうらやんで、ときおり口にした。「内区」に小さな店を張るだけでも莫大な資金を要するこの時代、店主たちにとってこの区画に土地つきビルを所有することは夢の夢であった。そうとうな悪徳ぶりを発揮しなければあとからやってきてこの超一等地は手に入らない。だが、シリアはそれをやってのけた。ものわかりのよいオーナーとして、だれとでも口をきき、気さくな立居振舞(たちいふるまい)で接するシリアからは、辣腕(らつわん)経営者の面影(おもかげ)はみじんも感じられなかった。まして彼女が、近ごろ街の噂(うわさ)によくのぼるティンセル・シティの闇の世界を跳梁(ちょうりょう)する仕置(しお)き人グループ「ナイトセイバーズ」のメンバーだとは夢想だにしなかった。

シリアと今年で一五歳になるマッキーは、かつてＧＥＮＯＭ系列の研究所(ラボラトリー)で科学者として働き、そのＧＥＮＯＭの陰謀で殺されたスティングレイ博士の遺児(いじ)だった。父親が亡(な)く

なった当時、わずか一二歳だったシリアと五歳のマッキーがどのようにして現在に至ったかは謎(なぞ)である。母親は、シリアが物心ついたときには、すでにいなかった。たぶん、世界有数の頭脳を持っていた父親譲りの彼女のそれが、父親の有していた数々の特許権(パテント)を活用して現在に至り、悪意に満ちた父親殺しの犯人の執拗(しつよう)な追及から逃(のが)れえたのだと推測する。

そして、父親殺しの邪悪(じゃあく)な犯人の顔をシリアは知っていた。独自の理論で開発したブーマ・コントロールの唯一の手段であると彼が発表したO・M・C(オーバーマインド・コントロール)システムの秘匿(ひとく)をもくろむ悪辣(あくらつ)なGENOM首脳に対して、開発当初から身の危険を感じていたスティングレイ博士は、シリアに数枚のデータ・ディスクを残していたのだ。その中には、O・M・C・S(オーバーマインド・コントロールシステム)を超える驚異的で斬新(ざんしん)な〝生物学的洗脳素子(バイオ・ブレインウオッシング・ピット)〟の完成された開発理論とともに、暗殺者(スナイパー)の記録が入っていた。

暗殺者(スナイパー)の名は——ブライアン・J・メイスン。世界支配を企(たくら)む超集合企業体(スーパーコングロマリット)GENOMの情報機関を率(ひき)いる男だった。年齢不詳(ふしょう)ながら若くしてトップに上りつめ、狡獪(こうかい)で天才的な頭脳プレイと、非合法(イリーガル)工作を得意とし、現在は、GENOMの暗部に君臨(くんりん)していた。

シリアは、メイスンを雇(やと)うGENOMをうらんだ。そして、GENOMが送り出すブーマを狩ることで、父親の無念をはらそうとした。可能ならばブーマをこの世から抹殺(まっさつ)し、GENOMのエゴイズムを打ち砕(くだ)きたい——その思いがナイトセイバーズを結成させた直

接の動機だった。そして、それはデータ・ディスクの最後に残された父親の悔悟の言葉だった――。

〝プリスもの好きネ。ネネやリンナに乗せられちゃって……ライブうまくやってるかしら？〟

シリアはバスルームの中で微笑を浮かべ、そう思った。療養音楽を流しながら目を閉じ、熱めの浴槽につかり、とりとめのない回想をしては、一日の疲れをとるのがシリアは好きだった。ひき締まった細い身体は適度に豊かな乳房を持ち、ピンク色の小さな乳首が湯にぬれて淡い艶を見せて光る。彼女が獰猛なブーマ退治のプロフェッショナルだなんてだれが信じることができよう？　その身体には傷跡ひとつなく、ときおり湯をかく手は華奢で指も細く長い。ブーマ狩りの猛者ナイトセイバーズを彷彿とさせるものは、彼女の姿態からは何も感じとれなかった。

よく発達した太腿とすらりと伸びた脛を持つ両の足が畳まれると、シリアが浴槽から立ち上がる、裸の身体にバスタオルを巻いてバスルームを出ると、落ち着いた色彩で統一されながらも、女らしい雰囲気にあふれたフロアでリラックスする。一九八九年製のイタリア人A・チッテリオがデザインしたクラシックなイスやソファに腰かけて、ほてった身体を休ませる。BEOLINKシステムを持つオーディオ装置によって療養音楽は、彼女の

いく先々に自動的に流れつづけ、彼女を包む。
彼女は、その調べの中でいこいのひとときを過ごし、窓越しに夜景を眺める。シリアのビルはこの地区では比較的高く、ペントハウスからは遠く人工群島である新設区の「浮揚区」が望めた。その新造地帯の中心には、震災直後から着工に入ったGENOMビル〝NEWタワー〟があった。シリアにとって見なれた景色であった。父親の仇を討とうにも、GENOMはあまりにも巨大になりすぎていた。
GENOMはいまやこの世界そのものといってもよかった。家電製品、日用品、自動車、航空機、軍需品、宇宙衛星等々、無尽蔵にGENOMのラベルをはったものが思い浮かぶ。そして、保険、輸送、不動産、情報サービス、海洋開発、宇宙開発等……GENOMなくしてはNIPPONが存在しないのではないかとさえ思えた。
そのGENOMの数ある製品の中で、外貨獲得に最も威力を発揮し、人類を滅亡に追いやる可能性が最も高い危険な製品――それがブーマだった。一朝一夕に倒せる相手ではない。何が、最も有効なGENOM打倒の手段なのか？　シリアの智力をもってしても、その答はいまだ出ていなかった。
「姉さん、いるかい？」
フロアの片端にあるインターフォンからのマッキーの呼びかけが音楽をさえぎる。

「あーら、あなたデートだったんじゃないの？」
「──んなコト、いいじゃないか、どうでも──」
「ハハン、ふられたな、マッキー君？」
「知らないよ。それより、チョット気になることがあるんだ。これない、いますぐ？」
「何よっ、もったいぶらないで言ったら？」
「説明しにくいんだな、それが──」
「──────」
「──もしかしたら、僕らのことバレたかも！」
「バレた──？」
「知りたけりゃ、早く降りてきて！」
「────」
「んじゃ、あとでネ──」
シリアは急いでバスローブを裸の上にはおると、エレベーターに乗った。プライベート・ユースのエレベーターであった。このエレベーターの存在は、ナイトセイバーズのメンバーにしか知られていない。業務用と来客用の二基に加えて、ひそかにビル内に設置された秘密のエレベーターなのだ。それほどによく設計されたビルであり、各階の設備機能、

先端的なビル構造は、斬新なアイディアを持ち、他のビルをはるかに凌駕するできばえである。もちろん、設計したのはシリアだ。それも、彼女の謎のひとつであった。

可動して数秒後、超スピードのエレベーターが、マッキーの待つ地階に着いた。普通のビルでいえば地下三階あたりに位置するところである。エレベーターのドアが開いて広がる空間は、一見ハイグレードなインテリジェント・オフィスに思える。もっとも、よく眺めればそこかしこに複数並置されたコンピュータ・ユニットやカスタム・バイク数台、妙にエロティックな曲線を持つ外骨格型のパワードスーツがあり、ただのオフィスじゃないことをわからせてくれる。この地階フロアこそ、ナイトセイバーズの秘密のアジトであった。マッキーは、フロアの奥にある、超先端的なデータ集積装置や情報通信装置がところ狭しと配置された部屋の中だ。シリアがその部屋のドアをあける。マッキーは端末機を操作している。

「何があったの、マッキー？」

「ああ、シリア姉さん……さっき、コイツをいじっていたら、だれかがアタックしてきたんだ――」

「ガードシステムに！　仕事斡旋人じゃないの――？」

「だといいんだけど――。でも、変なんだ――」



「――――」
「解放しても何も言わないし――」
「で？」
「――ウィルスで追跡したら殺られちゃったんだぜ！」
「そう！　妙ね――それは一度だけなの？」
「うん。たった一回で終わっちゃったみたい。これがその記録！」
思案げな表情を浮かべながらモニターに映る謎の波長を見つめるシリア。彼女は自分の組み上げた光ファイバーシールドのガードシステムに絶対の自信があった。相手は、ナイトセイバーズの仕事幹旋人ではなかった。特製の追跡ウィルスをくい殺してしまうほどの能力を持つ者がいるとは信じられないが、もしも存在しているとしたら不気味だ。シリアは闇からの来訪者に底知れぬ脅威を感じた。
「マッキー、シールドのプログラムを予備に切り換えて！　もう一度、アタックしてきたらすべて抹消するのよ――対策はそのとき考えるわ――」
「わかった。それから――」
「――ん？」
「――一二区と一三区でおなじみのブーマ騒動みたい。さっきから、ADポリスの通信

網がオーバーフロウ状態。やっかいな事態みたいよ――！」
「そう！　ちょっとレシーバーを貸してみて――」
シリアがレシーバーから得た情報は、一三区の化物（モンスター）騒動に関するものだった。どうやらそうとうな数のＡＤポリス隊員が、ティンセルシティ・バンクの中で惨殺（ざんさつ）されたらしいことがわかる。検証作業班の六名と救援に駆けつけた十数名の隊員が皆殺（みなごろ）しにあったもようだ。しかも、化物と呼ばれている犯人はその正体すらいまだ割れていないようだった。しかも、犯人はとり逃がしたようだった。
「化物ってなんなんだろうネ？　姉さん――？」
「さあ？」
「さっきはブーマをしとめたなんて言ってたけど、今度は化物出現か！　どんなやつだろう、ニュースが楽しみだな――」
「――出動してみる必要があるかも――」
「ウッソーッ。関係ないじゃん――！」
「妙だと思わない？　さっきのことといい、殺（や）りすぎる化物の出現といい――イヤな予感がするの」
「――だけどサ、お金にもなんない仕事なんて――」

「相手は銀行強盗よ！　捕らえれば謝礼くらい要求するわ。サア、もたもたしてないで、用意できしだいスカイキャリアでプリスたちを迎えにいってネ！」
断定的なシリアの口調だった。弟とは姉に弱い存在なのだ。
「――わーったヨ。シリア姉さんはどうするの？」
「先にいくわ。私をマークして！　どんな化物だって、そう遠くにいけるわけないわ。ADポリスとどこかでぶつかる――確かめなくちゃ、よく眠れないでしょ！」
シリアは、さとすようにマッキーに言うと部屋を出た。足早に、フロアの片端にあるメカニックス置場に向かう。そこには、ナイトセイバーズのさまざまな武器、パーツ類が整然と置かれてあった。すべて、シリアが発案し、彼女の影なるスタッフが開発したものである。シリアは四体の外骨格型のパワードスーツの中から一体を選び出し、リフトを操作してフロアに降ろした。
限りなく人型に近く、しかも、女性っぽい形をしたそのパワードスーツを、シリアはハードスーツと呼んでいた。ハードスーツは、バトルランジェリーという下着を素肌に着用して、機能を発揮する。つまり、バトルランジェリーは、バイオ・フィードバックにより、着用する者の肉体の持てる機能そのものを倍加させ、外皮にあたるハードスーツはメカニカルな倍力機構を有し、バトルランジェリーとリンクして、パワーとスピードの最大効果

を得るというわけである。シリア独自の最先端理論がなせるわざであった。

シリアは、近くのクローゼットから彼女専用のバトルランジェリーをとり出すと、細部のチェックに入る。それが終わると、着ていたバスローブを脱ぎ全裸になって、バトルランジェリーを着用しだす。そのとき、ウォーンという大型昇降機の音がして、ナイトセイバーズの空飛ぶトランスポーター・スカイキャリアがフロアの中央に降りてきた。マッキーが部屋から操作しているのだ。

〝いっけない！　事件に気をとられてマッキーのやつをうっかり忘れてたわ――〟

昇降機の音で我に返ったシリアが胸をあわてて隠して、斜め上方の壁に設置されたVTRキャメラをキッとにらみつける。それを受けて、マッキーがひとり先ほどの部屋で肩をすくめてひょうきんな微笑を口元に浮かべた。色気づく年ごろのマッキーと、セクシーなその姉シリア――妖しい関係を保つこのふたりは、身を挺して悪に天誅を下すナイトセイバーズの中心的存在であった。

第2章　武闘集団

1

「こりゃヒドイね――っ！」
ティンセルシティ・バンクの地階パブリック・スペースに入った瞬間の、デーリーの第一声だった。
「パマーのおやっさんにとんだ貧乏クジを引かせちまった――チッ、まっぴらだぜ！これ以上好き勝手はさせせネェ――！」
根元まで吸い込んだタバコを指ではじくと、デーリーから少し離れて壁にもたれていたレオンがそうつぶやきながら、あとかたづけをしている隊員に近づく。
「――で、化物の狙いはわかったのか？」
むごたらしい死体をひとつひとつ防腐布で包みながら、喉をときおり痙攣させている若い隊員に、唐突に尋ねる。こみあげてくる嘔吐を必死で押さえこもうとしていたその隊員

の顔が、幽鬼のように青ざめていた。
「ハッ、現時点ではなんら奪われたものはないもようです」
「——何も？　フーン、で、化物はどうした？」
「ハッ、確証はありませんが、たぶんこの下のパーキングから……ウッ……失礼しました……逃走したものと——」
「それで？　追撃したんだろう——当然!?」
「——グウッ、ウェーッ——！」
脂汗を浮かべて我慢していた隊員がついに吐いた。新米によくありがちな光景だ。レオンが顔をしかめる。
「ままごとやってんじゃネェんだ。それから？」
「すみません。パーキング内で全滅です。化物は、地下街のポイントD—七へ逃走したものと思われます——」
「なんてこった——！」
「——————」
「キャナルのD—七といやあ、いき場のネェ終点だぜ——D—八は工事中でエリアEへの通路はまだつながっちゃいネェんだ！　野郎しゃあしゃあともときた道を戻るつもりか

「——？」

「————」

「クソォ、バカにしやがって！」

目をかっとあけてレオンが吐き捨てるように言った。

「デーリー！　デーリー！」

レオンは、くび筋をかきながら飄々と惨殺死体の間を歩き回っているデーリーに向けて声を放った。

「アン？」

デーリーがレオンの呼び声に応じてふり向く。

「おまえさん、本部に戻って動けるやつ全員、エリアAからDへつづく出入口という出入口に張らしてくれ！　それから、外のヘリで全キャナル・ストリートの地下街連絡口を見張るよう手配してくれ！」

「いいけど——。してレオンは？」

「バイクで、またふりだしに戻る——たぶん、今度こそ正念場だ——！」

「確証があるの——？」

「そんなもんありゃ苦労しネェ——こいつが発射したくてうずうずしてんのよ！」

レオンはズボンの上から局部をポンとたたく。

「まあ、スケベーッ!!」

「んじゃ、頼んだぜ！」

レオンはパブリック・スペースを飛び出していった。最新鋭の科学武装を誇るADポリスの中で、野獣のような鋭い勘と嗅覚で動くレオンは、貴重な存在だった。だれしもが科学技術に毒され、身体の内に野性の存在さえ確認できないままでいるのだ。

この時代、泣く子も黙る特殊武装の戦闘集団ADポリスも、確かに一般人と比べれば精神的、体力的に鍛えぬかれてはいたが、方法論と方程式の型どおりの戦闘理論が発達してしまっていた。野性が理性をのみ込んでかみ砕いてしまうようじゃなければ、ブーマには勝てやしない。ブーマというやつは、人類に反乱した機械が産んだ野性なのだ。人類の野性と機械の野性の激烈な葛藤の末に、どちらかの未来が開けるといえた。レオンの行動パターンは、まさにその野性という〝動物的な勘〟に支えられているのだ。

〝とんでもネェ野郎が現れたモンだ。こりゃ、ただのブーマじゃない。ずるがしこくて、残忍なやつ――何が目的なんだ？　なぜ殺しまくる？　まあいいさ、じきに正体を暴いてやる。暴いて素っ首をとらなきゃハマーたちが浮かばれネェ。やつはもう一度現れる。そのときが勝負だ。きっと殺ってやる！〟

レオンは気さくなハマーの顔を思い浮かべながら、自分に言い聞かせるようにつぶやく。一三区の夜の街を猛スピードで走り抜けると、やがて一二区のキャナル・ストリートへの合流地点が近づいてきた。

ティンセルシティ・バンクの地下二五メートルほどにあるポイントD—七とは、震災後の都市開発により「内区」に建造中の大地下街の一画のことであった。大地下街はAからGの各エリアに分けられていて、各エリアは独立した居住地域(エクメーネ)を持ち、エリア間の往来は、地下高速道路(ベースメント・エクスプレス)かリニアモーターカーCTM八号線と三号線の利用で可能となるはずだった。

だが、すでに完成したエリアにも住民はほとんどいないのが現状である。巨大地震の教訓(きょうくん)から、地下開発の利点をさとった公団主導型のリーズナブルな住居分譲価格(じゅうきょぶんじょうかかく)も、格安な維持費も、この時代の人々にはまだまだ地下暮らしを決意させるほどのものではなかったのだ。それゆえ、放置された各エリアは現状は荒れ放題で、厳(きび)しい管理の目を盗んで浮浪者(ふろうしゃ)や犯罪者の巣窟(そうくつ)となるありさまであった。

もちろん、地下高速道路も閉鎖中で、CTMもまだ貨物以外は乗り入れていない。

一二区のキャナル・ストリートは、そんなエリアAからCの大地下街の頭上を走るフリ

ーウェイだった。すなわち、エリアA、B、Cへの地下高速道路とCTMへの連絡口をキャナル・ストリートは持っているのだ。レオンの勘が当たれば、ポイントD―七から失せた化物が、A、B、Cいずれかの連絡口に出現する。もし、化物がもう一騒動起こしたいと願うならばだ――。

だが、そうであれば化物の狙いはなんなのか？　化物は、ティンセルシティ・バンクから金目のものを何も強奪していないのだ。レオンの脳裡を、化物の出現が何かとほうもない事件の幕あけではないのかとの不安がよぎる。犯行の動機を知るまでは、地獄の淵まで追いつめる因果な刑事の性分が、納得のいく答を求めていた。

レオンがめざす合流地点の上空には、デーリーが手配したポータブル・ヘリFBが二機飛んでいた。エリアBとの連絡口を硝戒しているのだ。そのうちの一機は三番隊五号機のギルバート、もう一機は七号機のオニールだった。彼らは、キャナル・ストリート両サイドの連絡口の上空三〇メートルあたりを周回していた。ギルバートは、オニールとときおり交信をとる。いまのところ連絡口にはなんの異常もない。ティンセルシティ・バンクの大騒動が嘘だったように、大都会の夜は静まっていた。俯瞰する街には無数の光がきらめく。

彼はまだ海が生きていたころ、棲息していたという夜光虫の群とその光の輝きとを脳裡

にオーバーラップさせていた。ローターの音を子守歌に、緩慢な輝きを見せる光の海の上を、闇に包まれて漂うことの心地よさを味わっていた。光の海と闇の実像――有害な排出物や廃棄物質があふれる巨大技術集積都市の姿は、そこにはない。ただかすかに彼の浮遊する快感をそこなうものがあるとしたら、暗視覚ゴーグルでおおいきれぬ頬や口元にさわる尋常な量ではないスモッグのベタつく感触だ。

毎日、スモッグの中で暮らしていれば、なれっこでどうということもないのだが、初めてティンセル・シティのスモッグ公害に接したならば、はたしてこの街に暮らしたいと願う人がいるだろうか？　美と醜、便利な生活と不健全な生活――虚像と実像の狭間に存在しながらギルバートは思った。

〝淫靡で猥雑で、甘い享楽に満ち、技術を持ち、力にあふれた大都会――そうか、こいつは魔都なんだ。俺も、この街のすべての連中も、魔都の甘美な誘惑に乗せられて、曖昧な幻想を抱きながら骨の髄までしゃぶられて捨てられていくんだ。そして、こいつは肥え太り、たぶん、すべての住民が死に絶えようと存在しつづけるのだ。きっとそうに違いない。そうじゃなければこの美しさは異常だ。社会病理のきわみだ――。そして、俺は性根の腐った驢馬だ。餌にもならネェ景色に満足している――〟

最後のフレーズに自嘲を込めて思わず苦笑いしてしまうギルバートだった。

「援軍が到着したぜ！」

オニールの声だ。ギルバートの思いを見透かし嘲笑うかのように、大径二重反転ローラーを回して一台のヘリが南方から近づいてきた。ADポリスの緊急展開用輸送ヘリVS—七一〇——通称〝ドロッパー〟が、大出力のタービン・シャフト・エンジン二基を唸らせていた。VS—七一〇は、ギルバートたちとストリートの間に割り込むように飛来すると、スカイダイビングの要領で、対ブーマ装甲兵K—一一を一機、連絡口の近くへ降下させた。

そして、エリアAへ向けて飛び去った。

「署長のやつ、本気になったようだぜ！」

オニールの声には、アーサー署長をからかうような響きがあった。

「〝とうもろこし〟でも使うつもりかな！　ちょっとやりすぎじゃネェか？」

K—一一の背部にある面破壊用近接ミサイルを認め、ギルバートがあきれた声を発した。

現に、過去の対ブーマ戦で、K—一一チームが大暴れしたために、使いものにならなくなった地区が数か所、ティンセル・シティには存在していた。

K—一一チームは通常四機で構成され、その突撃装備には、視線追尾ミサイル八基、対ブーマ徹甲弾用三〇ミリレールカノン二基、四五ミリ多目的ランチャー、八〇ミリロケットパック、そして、〝とうもろこし〟とあだなされるミサイルなどがある。そのうちの一

機だけでも充分に街を壊滅できた。彼らが出動すれば街は戦場と化す。凶暴さと精悍さを持ったティンセル・シティの守護神――K―一チームの治安維持という狂気の沙汰を懸念するギルバートだった。

だが、その狂気に彼自身も感染していることに気づいていない。彼の操るFBの視認追尾式二〇ミリガトリングガンだって充分暴力的な破壊力を秘めているのだ。街の被害を最小限にくい止めるというADポリスのお題目を守っていたら、商売にならぬどころか、運が悪けりゃ死んでしまう。それほどに普通ではない神経がギルバートたち、ADポリス隊員に要求されていた。

「ギルバート!」

「どおしたオニール?」

「この仕事終えちまったら、部屋に直行しようぜ、スゲェものを味あわせてやるぜ!」

「何を――女でも紹介してくれるってのか?」

「バーロ! 紹介するほどいりゃあ苦労しネェよ。実はな――酒さ。超がつく極上品――

――! 驚くなよ」

「――――?」

「一八六三年物のバカラだよ」

「ヒュー！　本物か？」
「あたぼうよ。ほれ、この間の中古原潜を使った密売屋知ってんだろう？　おまえさんが休暇とってたときの――」
「ああ、たしか麻薬のガサ入れ――」
「そう、やつらから一本失敬しちまったのよ」
「だいじょうぶか？　ゲロされちゃいネェだろうな？」
「わかりっこしネェさ。蜂の巣にしておいたから――」
「ほう！　そいつァいい――」
ギルバートは、オニールが持っている年代物のコニャックを思って唇をなめ、生唾をのみ込んだ。ふたりとも無類の酒好きだった。オニールが言うんだから本物に違いない。この時代の酒ときたら、合成酒ばかりで、彼の言う一七〇年前の幻の酒ならば、軽くGENOM製の最高級車〝アバンティーク〟が一台買えた。この先一〇年給料をつぎ込んでも手に入る代物じゃなかった。
〝はたして躊躇することなく飲めるだろうか？〟
滑稽な思いがギルバートの頭に浮かぶ。その思いが溶けて消えうせぬうちに、「ブン」という衝撃が下方から突き上げるように襲ってきた。あわてて視線を連絡口に投げかける。

視線の先には、悪意(あくい)に満ちた強烈な意志の発動体があった。噂(うわさ)の化物(モンスター)が、連絡口に突如(とつじょ)出現し、底なしのパワーを誇るはずのK―一一から持てる戦闘用ファクターの一つも引き出させることなく、瞬間的に彼を粉砕(ふんさい)していた。

〝ばかな、K―一一があんなに簡単に殺(や)られるなんて？〟

眉間(みけん)に皺(しわ)を寄せて当惑(とうわく)するギルバート。頭の内部にちらばる冷静さの断片(だんぺん)をかき集めて本部に事態を報告する。

「エリアB連絡口に化物出現！　K―一一が殺られました。くり返します。エリアB……」

「ギルバートか？　デーリーだ。犯人(ホシ)はどんなやつかわかるか？」

「解析不能(かいせきふのう)。でも、ブーマではないようです――」

「――――」

「特殊形状のパワーローダーのように――ん？」

「どうした？」

「やつが移動します。すごいスピードで浮揚区(フローティング・ディストリクト)方面に向かいます！」

「追え！　そいつから目を離すな――その先はすべて封鎖中だ！　深追いするなよ――」

「了解、七号機とともに追跡開始します！」

獲物を狩るのだ。奥歯をかみしめながら全身を緊張させるギルバート。恐怖を胸いっぱいにためて弾丸とともにすべて吐き出す。その快感のあとには、超高価な美酒が待っているのだ。死ぬのなんてまっぴらだ。殺られてたまるもんか。スロットル悍を握る手に力を込めながら、ギルバートは思った。タコメーターが上がる。二機のFBが獰猛なエキゾースト・ノートの金属音を上げてダッシュした。

2

ライブハウス「HOT LEGS」のラストステージに立つプリス。演ってる曲は「ROCKIN THE BEAT」。その煽情的なビートに乗って、いつしかステージを降りふだんの顔に戻っているリンナとネネがフロアでステップを踏んでいた。そこに、大人びた顔つきでマッキーが現れた。ふたりに接近し、いらだった口調で叫ぶように訊く。

「まだなの――っ？」

「しょうがないでしょ。プリスに言ってよ！」

フィットネス・クラブ「FIBIY」で、エアロビクスのインストラクターとしての表向きの顔を持つリンナ山崎が、前傾姿勢をとって大声で答えた。よく発達した肢体、色白

だが健康そうな顔。その顔をやや上向きに見てマッキーがせかす。
「だからサ、さっきも言ったように、シリア姉さんが――」
そう口にしたとき、顔を紅潮させて踊っていたネネが、身体をくるりと翻しながら口をはさんできた。
「シリアが変なのよ！　今日は何もないって約束よ。それに、あてになんないじゃない、謝礼金なんて！」
「僕だって反対したサ！　でも姉さんが――」
「姉さん姉さんって、だからあなた女の子にもてないのよ。マッキー！」
リンナがからかうように言った。ムッとするマッキーが反論する。
「か、関係ないよ、そんなこと。リンナさんだっていつも遊ばれて捨てられちゃうって――」
「――んだって――！　ダーレよ？　だれにふき込まれたのよ。わたしがいつ捨てられたのよォ？」
やや声を荒らげてマッキーに迫るリンナ。
「だってネネさんが――」
「ネネーッ！」

「えっ！　嘘おっしゃいマッキー。わたしがそんなこと言うわけないでしょ。ねえリンナ――？」
「なるほど。ふたりしてわたしをばかにしていたわけだ。そう、残念ね。マッキーにかわいいチャイニーズ・ガールでも紹介しようとしていた矢先だったし、ネネにも――」
「本当？」
ネネとマッキーが笑みを浮かべて訊く。
「アイリンて娘なんだけどナー」
「わたしは？」
「そうね、チョットいかした青年医師なんかどお？」
「うわーっ、リンナさんて優しい人なんだから！」
「お金持ち？　スポーツカー持ってるの？　長男じゃないでしょうね？」
「もちろん！　でも、もう忘れてね、ふたりとも――」
ふたりに背を向け、ゆっくりと瞬きをしながらわざとらしい深いため息をつき、リンナがしてやったりといった態度をとる。
〝ばかめ！〟
リンナはふたりのガッカリとした表情を期待してふり返ると、小躍りしたマッキーとネ

ネがキャッキャッとして、プリスの歌に合わせて踊りまくっていた。

「うーん。恐ろしいやつら！」

啞然とした表情を浮かべてリンナがため息まじりにつぶやいた。しばらくすると、激しいロックビートで震えているライブハウスの空気が徐々に静まりだした。プリスがエンディングフレーズを歌い終わったのだ。あい変わらずいい顔をしたステージ上のプリスに、リンナは両手の指でかたどった〝N〟文字のサインを送る。ウインクでこたえるプリス。やおら激しく盛り上がったエンディングフレーズが彼女の動作ひとつで唐突に遮断される。その瞬間、ステージが暗転し、いき場のない熱い空気が凝固しフロアの若者たちを金縛りにする。そして、お定りのアンコール騒ぎだ。だが、ステージにはもうプリスはいない。フロアからもリンナやネネ、そして、マッキーの姿が消えていた——。

「ねえプリス、わたしどうだった？　イカしてたでしょう。もう、気分はロッカーよ！」

「まあネネったらその気になっちゃって！　でも、メチャメチャに楽しかったなァ——！」

ブラウスの前ボタンをはずしながらネネがニンマリと表情をほころばして言うと、すでに下着姿になっているリンナがブラのホックをはずしながら同調する。顔のメイクを落と

すために鏡から目を離さずに答えるプリス。金髪のカツラをはずして、ブラウンの地毛になっている。
「――エキストラにしちゃ上できだったよ。あんましはずさなかったし――」
「じゃ、わたしたちもプロで食えるかな？」
「だいじょうぶじゃない――」
「本当!?」
「そっ、ボードビリアンくらいならピッタシかな！」
プリスの言葉でずっこけるリンナとネネ。三人はマッキーの操縦するスカイキャリアの中にいた。ライブハウスの裏口からプリスのステージ終了と同時に抜け出て、マッキーが空に待機させておいたナイトセイバーズ専用の輸送ジェットヘリ・スカイキャリアに飛び乗ったのだ。
腹部に最大四機のサイクル形状変形自立行動ドロイド・モトスレイヴを搭載し、機内後部にハードスーツのメンテナンス・ルームを持つスカイキャリアは、自動無人機としてもすぐれた対応を示す万能機であった。スカイキャリアはいま、シリアからの発信電波をさぐって、ティンセル・シティの上空を飛んでいた。ADポリスや通常警察の空艇部隊との接触を避けるため、大きく迂回しながらシリアの向かった一二区、一三区方面をめざして

いた。

「現在五四区のクリストファー・ストリート上空五〇〇メートルです。シリア姉さんは一三区のティンセルシティ・バンク付近から一二区のキャナル・ストリートと平行して移動中！　少しはあわてて準備してくださいよ――」

操縦席にいるマッキーからのアナウンスが、プリスたちに届いた。

「わかってるよ！　マッキー、あんたスケジュール管理にたけてるから、みんなのマネージャーになったら？　そして、シリアにその調子でギャラのアップを交渉(こうしょう)してくれよ！」

胸と腰の小さな布切れのようなステージ衣装を簡単に脱ぐと、男まさりの言葉使いをするプリスが、意外と色っぽいスキャンティーをはいていることがわかる。

そのスキャンティーを脱いで裸になったプリスがバトルランジェリーを装着しながらインターフォンに向けて言った。薄いレオタードのようなバトルランジェリーをすでに身につけたリンナとネネがそれを聞いて笑う。対ブーマ戦で、いつも強気な行動に出るナイトセイバーズの姿はそこにはない。バランス感覚に富み、魅力的な個性の輝きを持った陽気な現代娘たちのありのままの姿だった。

「ところでさプリス、今日もレオンのやつがきてたけど、進展してるんじゃないの、あ

なたたち？」

ハードスーツに片足をつっ込みながら、ネネがとぼけた笑みを浮かべて訊いた。

「冗談じゃないよ、だれが好きこのんであんなやつと！」

小さなため息をもらし、苦笑しながらプリスが言う。その言葉の響きがどこかまんざらでもない様子を匂わす。

「あーら、署内でもっぱら俺の彼女だなんてふれ回っているわよ。あ・な・たのレ・オ・ンさんは！」

「勝手にしろよなーっ！　ドラッグストアで声かけてきたから口きいてやっただけだぜ」

ハードスーツにスッポリ入り、ボディ各部のストッパーを思い切り無造作に止めていくプリス。憤然とした彼女のネネへの対応をおもしろがってリンナが介入する。

「プリスもお安くないわネ。ＡＤポリスの敏腕刑事が恋人なーんて、チョッピリ、スキャンダラスな関係じゃない。——フフフッ、しびれちゃう！」

「アッタマにきた。おーし今日は思い切り暴れるゾ！」

「よしっ、頑張れよッ！」

「その意気、大事にしたいもんだ大将!!」

リンナとネネのヨイショコールが狭い機内に響く。
「調子がいいんだから、ふたりとも。それ以上乗せたって何も出ネェよ——だ」
「でも、少しはその気もあるんじゃない？　レオンって、あれでなかなかいいマスクしてるし——っ！」
ネネが念を押すように尋ねる。
「さあね。あんたが気があるんじゃない？」
ムキになって反論するプリス。
「あっ、やっぱし!?」
「なにが？」
「あやしいなプリスも。だって最近下着にこってない？　今日だって色っぽいのつけちゃってたし——男を意識してる証拠だもの——」
リンナがさらにつづけた。
「——過去に何があったっていいじゃない。純心な乙女心をパーッと花咲かして、ロマンチックな恋に落ちるのよ。男が欲しけりゃ奪いとるの。甘い言葉の二つ三つかけてやればコロリ。あとはこっちのモンよ——！」
みずからの言葉に酔って熱弁するリンナに、あきれ顔のプリスとネネ。ネネがけげんそ

うな表情で尋ねた。
「リンナ、あんたいつもそうしてきたの？」
「そうよ」
「無理ないわ、男に逃げられちゃうのも——」
「ん？　何言いたいの、ネネは？」
「あんたの話を聞いてると、まるで男だもの。コンピュータを男にたとえれば、リンナが接近すると対自衛防御対応ってやつが働いて、回避か過剰反応ってとこね」
ＡＤポリスの通信事務官としての表の職業を持つネネ・ロマノフがちらりと教養を見せる。ネネはコンピュータ操作の天才で、ナイトセイバーズのハイテク防御と情報活動の一角をになっているのだ。
「変なたとえはしないでストレートに言ってよ！　難しくって何言ってんだかサッパリ——」
「つまり、男に逃げられるか、喧嘩別れってこと！」
「ギエーッ！」
「でも、そのどちらも選択せずにすむいいアイディアもあるのよ」
「何さ？」

「それはね。対自衛防御対応のコンピュータ端末をカットした男に惚れるのよ。拒否反応（ディサプローバル・リアクション）のない男に！」
「そんな男いるの？」
「いるわよ・オ・カ・マちゃん――」
「コノヤローッ、ブーマに犯されて死んじまえ」
憤慨した表情でリンナがネネにつめ寄る。ハードスーツ姿で色恋の話なんてあったもんじゃない。プリスは、ふたりのやりとりを見てそう思うと、せいいっぱいに声を張り上げて笑った。めったに他人に見せたことがないプリスの屈託のない会心の笑顔だった。

3

「レオン、CT—〇六、CT—〇七のゲートが抜かれた。やつは浮揚区へ高速移動中だ！　FB四機が追いかけてる――」
「わかった!!　近場だ、急行する」
「一二区を抜けられたらタワーの連中が動き出す。ややっこしくなるかもよ！」
「そこが思案のしどころさ。GENOMにとり込まれちまったらおしメェよ。なんとしても押さえる！」

「無理しないでよ――レオン！」

フリーウェイを猛スピードで走るレオン。その前方に、化物退治で駆り出され、道路封鎖にあたっていたADポリスの戦闘車両が、夜空を焦がして燃えている。本部にいるデーリーからの報告どおり、そうとうなダメージを受けているようだった。

〝チッ！　やばいな。あの調子じゃすんなり通れそうもないぜ!?　よし、下から追うか！　うまくいきゃあ先回りできるかも――次のゲートが時間を稼いでくれるかどうかが問題だが――〟

レオンはドライヴィング・グラスを胸ポケットにしまうと、アクセルを思い切りふかし、高架状になっているキャナル・ストリートのフェンスを瓦礫を踏み台に勢いよくジャンプして乗り越えた。下の道路との一五メートルほどの高低差を、ものともせずに飛ぶレオン。すさまじい着地の衝撃がバイクのフレームに「ギャン」といった悲鳴を上げさせる。しかしレオンのはじけるように盛り上がった膝から腰の筋肉は、両腕と協力しあい、その衝撃を吸収してしまう。強引で、強靭で、俊敏で、大胆不敵なレオンのいつものやり方だった。

〝とにかくやつの――パワーローダー野郎の狙いを知ることが先決だ。ティンセルシティ・バンクはGENOMのメインバンク――これだけ暴れまくるには、理由があるはずだ。GENOMにうらみを持つ者のしわざか？　それとも、GENOM自体に何か起こってい

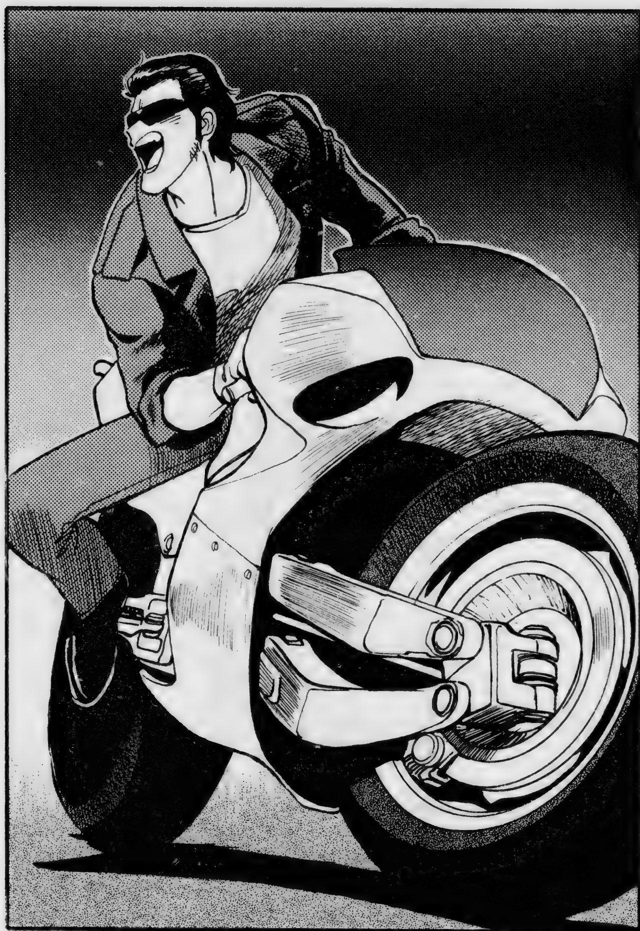
るのか――〟

キャナル・ストリート上の戦闘のとばっちりを受けて、真夜中だというのに緊急車両のサイレン音や人だかりでわき返る高架線下の道路を、レオンがすばらしいテクニックでバイクを走らせる。彼のいく手の空に光のピラミッドが見える。

下界の大騒動を知ってか知らずか、タワーの住民たちが沈黙を決め込んでいた。その不気味な静けさが、足元に起きた異様な事件をますます不可解なものとしていた。

レオンは走った。彼の獣の勘が全身を緊張させ、獲物を求める目が不敵な輝きを放つ。疾走してしまったら、もう止めることができない。レオンの内在する強烈きわまるパワーが獣性を帯びて牙をむいてしまったのだ。やがて薄暗い防災用トンネルを突き抜けるとレオンは、キャナル・ストリートの一二区と一一区の境界線に出た。そこには、ADポリスが設けたCT—〇九なるゲートがあった。

彼の期待どおりに、CT—〇八のゲートを守る仲間が瞬時でも化物の足を止めてくれさえすれば、ここで化物と出くわすことになるのだ。そんな化物に対して先回りを可能にさせた彼のドライヴィングテクニックとチューンアップバイクは、はんぱじゃなかった。各ゲート間は一〇キロごとに設けられていた。CT—〇七から〇九、つごう二〇キロを一〇分弱で走り抜けた勘定になる。ストリート走行としては異常な速さだった。



〃まだ!?　みたいだな――〃

キキーッと横すべりでゲートの手前いっぱいにバイクを止めたレオン。グラス越しに、安堵と不安が入りまじった眼差しを自分に向ける隊員たちが見える。各ゲートが化物に破られたという本部からの報告が、彼らに悲壮感を漂わせていた。やがて、恐怖が闇の向こうから押し寄せてくる。

やつの残忍さが、想像以上の圧迫感となって、あたりの闇に集積していた。死の重さだった。その重さに耐えかねる隊員たちの若さが怯えを招き、呼吸を荒くさせていた。いつもなら強力な助っ人のK―一一も、その怯えの解消にはならないようだ。

「バカヤローッ！　隊列を乱すんじゃネェ。おい、無線を持ってこい。それからK―一一は俺が使う。用意しろ！」

かつを入れるように大声を出したレオンは、隊員のひとりが運んだ携帯用無線機から受話器をとり上げた。

「FB！　FB！　応答せよ、こちらレオン!?」

「――こちらFBどうぞ！」

「おう、ギルバート、無事か！　どうだ、やつは？」

「CT―〇八は抜かれ、一番隊のヒロとガーフィールドがやられました。やつは、高機

動タイプの装甲パワーローダー。現在、フリーウェイ上を東に向けて移動中。七号機オニールが攻撃中ですが、すばしっこくて――」
「ちっ！――だれが乗ってるんだ？」
「確認できません」
「そうか、でやつの武器は？」
「すでに破壊しましたが、肩にレーザービーム砲二基、〇七式自動空挺戦車のモノとよく似た滑腔砲、それにミサイルポッド――」
「とんでもネェ野郎だ、よーし俺はいまCT―〇九だ。K―一一を使ってなんとか止めてみせる。おまえたちは――」
「オニール!!」
レオンの言葉をさえぎり、とつじょギルバートが金切り声で叫んだ。無線を通して爆発音がレオンの耳に届く。
「やられた。オニールが殺られちまった！」
「落ち着け、ギルバート！」
「クッソオオォーッ!!」
「落ち着くんだ。いいかよく聞け、よく聞くんだギルバート!!」

「クウ——！」

「仇を討ちたきゃ協力しろ！　俺はじきＫ—一で出動し、やつの動きを止める。まちがっても相討ちくらいにはもってくつもりだ。俺がやつにくいついてる間に操縦者を撃て、わーったな！」

「し、しかし、もし失敗したら——」

「俺か？　おまえの腕を信頼してるサ。気にせずやれ」

「——でも——」

「甘いぞギルバート。そんなこっちゃやつは倒せネェ、ここまできたらけじめの問題だ。——やれ！」

「ハッ！　了解しました」

〝許さネェ！〟

火だるまになってビルに激突し、爆発したのであろう、数キロ先の街に爆炎が立つ。ギルバートの無念な表情が浮かぶ。オニールはギルバートの親友で、官舎の部屋も同じだった。気軽な独身生活を送り、仲のよさは評判のふたりだった。だが、運命とは残酷なもので、オニールは突然の死を迎え、ギルバートは激怒の噴流に身をまかせている。ハマー、バックス、イクオ、ホセ、ヒロ、ガーフィールド、オニール——大勢の仲間の死を思うと、

レオンの頭にもさらなる怒りの血が昇った。獰猛な感情が、やがてK－一一という装甲スーツの中におさまった。
〃守るより攻めろだ〃
種々の突撃装備のチェックをすませると、背部のラム・ジェットエンジンをめざめさせ、ゲートからはじき飛ぶように出撃した。圧倒的な加速感がレオンを襲う。驚異的な戦闘能力を誇る破壊エネルギーのかたまり、それがK－一一だった。肩に視線追尾ミサイル、いかつい手には対ブーマ徹甲弾用三〇ミリレールカノンを持つK－一一が、前傾姿勢を保ちながら戦闘行動に入り、キャナル・ストリート上を空気を切り裂きながらホバー移動する。
K－一一を操るパイロットが、並みの精神構造を有する者では務まるわけがないとレオンは感じた。コントロールするだけで、恐ろしいほどの精神的、肉体的な消耗を強いられるのだ。それに加えて、ブーマやら、今回の化物という気違いじみた破壊力を持つ獲物狩りをしなくちゃならない。猛獣並みのガッツだけがK－一一をK－一一たらしめる。奥歯をギリギリとかみしめながらレオンは、急迫する敵との距離をいっきょに縮めようと、フルスロットルをかける。
〃きた!?〃
前方に超低空飛行するギルバートのFBの小さな光点が視認できた。光は、化物を照射

するサーチライトだった。FB自体は夜の闇に溶けこんで明確に視認できない。だが、上下左右へと大きく振動する光から、必死で化物を追撃するポータブルへリの存在がわかるのだ。レーザー測遠器がデジタル表示で距離を打ち出す。

〝三〇〇……二八〇〇……早い！　六〇秒足らずで接触か！〟

光点が急速に拡大して、帯状に照射されているのがわかる。ときおり、パパッと別の光が走り、FBの機銃掃射と応戦する化物のレーザー砲が激戦の様子を示していた。

〝もって二分か!?〟

レオンは燃料計を確認した。燃料を大ぐらいするラム・ジェットエンジンは、フルスロットルで行動すると満タンで五分程度しか動けない。最高スピードは一・四トンもある総重量のために時速一二〇〇キロが限界だった。それゆえ、ふだんは、五、六〇キロで行動し、燃料を節約しているのが常なのだ。レオンは顔前でかすかにハムノイズを発している無線器を操作し、本部のデーリーを呼び出す。

「おれだ。これからドンパチが始まるぞ！」

「聞いているよ。付近の住民は待避させた。思う存分やってちょうだい！」

「ああ。しばらく連絡どころじゃネェ。派手にやるから何かあったら呼んでくれ！」

「OK！　悲しませないでね」

「えんぎでもネェ――じゃな！」
〝E－○八○か！　ケッ笑わせるぜ。ここで踏んばらにゃ、こっちが全滅だ――んっ!?〟
前方に黒いかたまりが出現。急速に接近してきた。その後方上空からギルバートのFBがローターをバタつかせながら追尾してくる。かたまりを凝視するレオンが叫ぶ。
「ギルバート、接近しすぎだ、離れろ！」
機銃掃射に夢中なのか、FBは超低空飛行をやめない。
「くそ!!　ズタボロのくせに倒れネェ――」
ギルバートの唸り声だ。
「バカヤロトッ、どけ！」
ギルバートがレオンの声に気づく。と、同時にパワーローダーの上腕がパカッと開き、予備の小型レーザービーム砲がせり出す。レオンは視線追尾ミサイルの照準を合わせる。回避しようとするFBにパワーローダーからビーム砲が発射された。
「ギルバート！」
レオンが叫びながらミサイルの発射ボタンを押した。次々とK－一から射出されるミサイルが、パワーローダーめがけて吸い込まれる。その瞬間、フリーウェイにすさまじい

閃光が轟音を伴って走り、あたり一面を真昼のように照らし出した。断続的に光と爆発音がわき起こるさまは、酔いに似た感覚をレオンにもたらした。彼の知覚中枢が、K—一一の強大なパワーを、彼自身のパワーと錯覚しているのだ。破壊のエネルギーを放出することは、ある種の爽快感を人にもたらす。空気の焦げる臭いは戦闘する者にエクスタシーを覚えさせる。恐怖と、戦慄と、空虚さが、悪い冗談のように全身を硬直させ、一瞬、酩酊状態にレオンをおとし入れた。K—一一の動きを止め、ぼうぜんと眼前に広がる光景を見つめながら——。

〝殺ったぜ！〟

レオンの唇がシニカルな形を見せた。目はあい変わらず爆発光の源に向けられていた。その彼の視界を、スローモーションフィルムの一コマ一コマのように、ギルバートのFBが、炎上しながら高架線下に落下していく。レオンは散漫な意識を急速に凝固して我に返った。

「ギルバート、早く脱出しろ！　ギルバート！」

レオンの叫びもむなしく付近のビル街にやがて爆発の炎が上がる。レオンの全身が硬直し、脂汗を大量に噴出させた。大きく息を吐き、呼吸を整えながら、死んでいった仲間の顔を思い浮かべようと努力した。だが、何も浮かばない。不安とあせりばかりが頭の中を

から回りする。炎が黒煙に変わるころ、ふいにレオンは背後に凶暴な意志を感じた。煙幕の中からパワーローダーが再び出現したのだ。

「テメエ!?　まだくたばっちゃ――」

レオンが全身を緊張させて放った言葉が終わらぬうちに、驚異的なスピードでやつが激突してきた。〝ギャーン！〟と、重量感のある金属と金属がぶつかりあう音が響きわたり、その瞬間、K―一一の三〇ミリレールカノンを持つ右手が、腕の関節あたりから無造作にちぎりとられた。パワーローダーはK―一一の一・五倍近く大きい。

ぶ厚い装甲はひしゃげ、めくれ、普通ならとっくに機能停止してもおかしくないほどの損傷を受けていた。しかも、ブスブスと身体の各所からオイルが燃えるような黒煙さえ上げていた。加えて、破損した胸部の装甲板からのぞく、おぞましい輝きを放つ双眼がレオンを射すくめる。怨念に満ちた目だ。

「クウッ！」

野獣のうめきに似た声がレオンの臓腑から突き上げ、血反吐とともに口からもれる。全身に激痛が走り、その痛みが鳥肌を立たせる。

「ウォーッ！　レオン様をなめるんじゃネェ――！」

レオンは残った左手から強烈なストレート・ブロウをくり出し、パワーローダーの胸部

にくい込ませた。だが、その衝撃にかすかにのけぞりつつも、上腕のレーザービーム砲がレオンに向けられる。しかも、パワーローダーのいかつい手が宙を走り、その左手さえも強引にちぎりとろうとする。動きにまったくむだがない。恐怖と戦慄がレオンを必死にさせた。

〝想像以上の化物だ。このままじゃ殺られる！〟

K―一一の残った手をもぎとられまいと、レオンはギリギリと歯ぎしりしながら対策をねる。

〝よし!!〟

レオンはラム・ジェットエンジンを突如フルスロットルで噴射させ、パワーローダーに向けて、全速で、総重量をかけたぶちかましをくらわせた。パワーローダーは、もろにその衝撃を受けて、フリーウェイのフェンスに激突し、フェンスの厚いコンクリートを粉粋して高架線下へと墜落していった。約二〇メートル下のジャンクヤードにパワーローダーが地響きを立てて墜落した。K―一一はかろうじて、フェンスに左手一本で宙づりとなっていた。

「ザマーミロ！」

唇から血をにじませながら、レオンが不敵な微笑を浮かべて言った。背部のラム・ジェ

ットエンジンがプスプスと燃料切れの音を出していた——。

4

レオンのK—一一とパワーローダーの熾烈な戦いぶりを近くのビルの屋上からシリアが見ている。いや、見ているというよりも、ハードスーツの暗視覚モニターと人間の三半器官に相当するジャイロセンサーで、レオンとパワーローダーの交戦の一部始終を知覚していたのだ。

〝二〇二六年型のGENOM製GL—四タイプのようネ。海底プラント向けに作られたパワーローダーを改造して、いったい何をしようと——!?〟

ハードスーツが有するマイクロ・スーパーインタフェース・コンピュータのはじき出す化物の正体からは、納得のいく筈は得られない。もしも、ナイトセイバーズの秘密アジトにあるコンピュータにアクセスしてきた者が、パワーローダーの大騒動となんらかの関連があったならば、放ってはおけない。シリアは今夜の事件の論理的な帰結を欲した。

〝ん!?〟

ジャンクヤードで機能停止したと思われたパワーローダーが活動を再開した。

〝なんてことなの？　自己修復機能を持っているなんて!?　C系列のブーマ並みのノウ

ハウがなぜ――？〃
背部のウィングスラスターを広げ、ロケット噴射と同時にシリアは、ジャンクヤードへと華麗な舞いを見せて降りる。解体寸前の中古車やスクラップ・パーツ類がところ狭しと放置されている中から、パワーローダーがどこかへ移動しようとしていた。シリアはその鼻先に着地した。レオンと対戦していたときに比べ、全体にひと回りほど大きくなっていた。より強大に変貌をとげていたのだ。狂った獣のようなパイロットの眼がシリアを見つめる。
いまにもシリアに躍りかかろうと攻撃体勢をとったとき、パワーローダーの背後に三つの影が空から降りたった。ハードスーツ姿のリンナとネネ、そして、プリスだった。シリアが手を上げて空に向けて合図を送ると、プリスたちを運んだスカイキャリアがどこかへ飛び去った。パワーローダーを包むように散開して身がまえる四人。シリアが口を開く。
「私たちはナイトセイバーズ。いったい何が目的で暴れるの？」
「ブシュアー――ッ」
高圧の圧搾空気がもれ出るような機械音が不気味に響きわたる。どうやら言葉を発することはにがてのようだ。だが、身体全体で激しい敵意をむき出しにしていた。
「そう、どうやら直接あなたの身体に訊くしかないようね⁉」

シリアの口調が厳しさを増した。

「悪あがきはやめて、観念したらどうなの？」

リンナが叫ぶ。

その間、ネネは高性能スキャナーでパワーローダーを解析しようとしていた。各部の断層スキャンの結果、パワーローダーのぶ厚い装甲外骨格の内部に、見なれぬバイオニック器官を有する人間体の存在を知る。サイボーグと確認した。

「表層に特殊シリコン。基層にコラーゲンと天然重合体か!! ノーマル（人間）じゃないと思ったわ――」

ネネが仲間に伝えるように言い放った。それを聞いて、プリスは相手が理解できないといった不敵な調子を含んで重く吐き捨てるように言った。

「どうやら説得がきく相手じゃないらしいぜ！」

「どうする、シリア？」

リンナとネネが同時に訊く。

「旧タイプにしては、動きが妙にスレてるわ。フォーメーションSA（破壊）、時間がないわ。みんなも早く熱いコーヒーが欲しいでしょ!?」

ナイトセイバーズの四人は、じりじりとパワーローダーとの間合いを詰める。じっと身

がまえていたパワーローダーの、重低音のモーターサウンドが、突如、フルスロットルの高回転金属音に変化。身体全体が怒張したようにグワッと盛り上がった。その瞬間、両肩から現れた二基のレーザー銃がナイトセイバーズめがけていっせいに照射された。

シリアとリンナはジャンプして上空に逃れ、プリスとネネは近くのスクラップの陰に回る。ジャンクヤードが火の海と化していく。ジャンプしたシリアは反転して両腕のレーザーソードで攻撃し、パワーローダーの右肩のレーザー砲ごと背部から袈裟斬りにする。同時にリンナが着地した瞬間、パワーローダーの真正面からナックルボンバーで頭部のセンサーをたたく。その直後、プリスの右手から発射された硬質ニードルが数本、パワーローダーの背部モーターに撃ち込まれた。

ナイトセイバーズの華麗きわまるリアルバトルの波状攻撃に、パワーローダーはそうとうなダメージを受け、狂ったような奇妙な動きを見せ、やがて、その場に静止した。身体の各所から、燃え焦げるような煙とともにオイルらしきものが噴出していた。

しばらく、間欠的に不整脈のようなモーターサウンドを高く低く唸らせながら、あたりかまわず残ったレーザー砲を乱射した。その様子を静観していたナイトセイバーズ。こわごわとして接近したネネが沈黙状態のパワーローダーにセンサーをあてる。やがてシリアに向けて仕事完了の合図を送った。

「やったネ！　なんてことないじゃない。ADポリスもこんなやつに手こずってたんじゃ、この先思いやられるわ」

ネネがさも自分の手柄のように両腕を胸の前で組んで自慢げに言った。シリア、プリス、リンナが用心深くパワーローダーに接近する。

〃ん!?〃

シリアが頭上をあおぐ。夜の闇にまぎれた高架フリーウェイ上からK―一一のパイロット、レオンが自分たちを見つめていることがわかる。ジャイロセンサーの感度を最高度に上げる。

〃どうやら、そのオモチャ、壊れてしまったようね〃

シリア、やおら右手をK―一一に向けると、手のひらから狙い定めたように銃を撃つ。K―一一のマイクロ・ビデオキャメラの眼を破壊したのだ。

〃ごめんなさいネ。好きじゃないの、そういうの！〃

残りの三人がシリアの突発的な行為に注目していたそのとき、ネネのセンサーがパワーローダーのモーターの再発動を感知してピッピと警戒音を発した。

「やつは、まだ――？」

「なに!?」

ネネの驚いた声にリンナが反応する。その直後、信じがたいスピードでリンナに飛びかかったパワーローダー。ハードスーツの単体装備重量七四・三五キロ、リンナの今日の体重五一キロジャスト、合わせて一二五・三五キロの身体を軽々と左右のアームでつかみ上げ、締めつけた。締めつけながら、その上腕から出現したレーザー銃がリンナに狙いを定める。

「ヤロ――！」

どなるようなプリスの声につづくレールガン攻撃。プリスの機敏な対処がレーザー銃を撃ち砕く。その間隙を抜って、シリアが再びレーザーソードを一閃。リンナをつかむパワーローダーの両腕が、そのつけ根から切断された。

「ふざけやがって、くらえ!!」

切断面から両腕のオイルを大量に噴出させているボディに、反撃に出たリンナが回転ざますさまじいキック攻撃を加えた。撃破されたアクチュエーター部分から青紫の火花を発しながら、パワーローダーが地響きを立て、転倒した。

ブシューッと、圧搾ガス音をもらしながら胸部が開き、それに連動して、パワーローダーの内部のサイボーグを支えていた各所のサポーターが次々とはずれる。複雑な内蔵メカが、バチバチと音を発し、ショートしていた。

「こいつ女よ!!」

ネネが驚嘆の声を上げる。パワーローダーから複雑に絡みついたコード類を引きちぎりながら、のそのそとはい出る黒く異様な風体のサイボーグ。長い黒髪と胸の隆起から、年若い女性をベースに開発されたとわかる。

ナイトセイバーズのすさまじい攻撃の痕跡を身体の随所に見せながら、その顔は、まだ人間だったころは、超のつく美貌であったと感じさせた。彼女の行動を見守りながら、じりっとあとずさりするナイトセイバーズの四人。シリアが口を切った。

「どこから生まれてきたの？　GL—四を使って何をしようとしたの？」

「――――」

シリアの言葉に反応を示して、形のよい顔に不気味に埋め込まれている電子アイが鈍く瞳孔を開く。

「さあ、答えてちょうだい？」

四肢を使って獣のようにかまえたサイボーグの身体に小刻みな震えが起きる。どうやら、どこかの機能が支障をきたしているようだ。プリスの撃ち込んだ硬質ニードルが脇腹に刺さっている。

〝しゃべることができないの――？〟

ヘルメットの内側で、シリアがいぶかしげにマユ毛を寄せる。どうやらその機能がないらしい。黒いボディスーツの下の異常に発達した筋肉の隆起と、改造されてもなお美しさを保つ顔のアンバランスな様子。彼女の過去を深く詮索しても仕方がない。ただ、彼女のような存在を産む社会に対して、腹だたしさがシリアの胸をかきむしった。そして同時に、社会正義をふりかざし、諸悪に天誅を下すことのむなしささえ覚えた。

一度狂気をのみ込んでしまったら、その狂気さえ進化発展の美名のもとに、肯定化してしまう社会――「管理された狂気」の集積体こそ、ティンセル・シティの実体かもしれぬと考えた。この巨大技術集積都市の狂気が、いまや世界中に影響を及ぼしつつある。便利さと快適さが人を不幸にさせる奇妙な構造、人類の本質的な性が、シリアには読みとれない。

「危険!! 自爆の可能性大。回避よ、シリア!!」

ネネの叫び声が思考をさえぎった。

サイボーグが突然立ち上がり、シリアめがけて猛然とダッシュしてきた。ハッとするシリア。危機一髪というところで、リンナのロッドカッターがサイボーグの動きを止めた。つづいてプリスが跳躍補助バーニアでジャンプしながらビーム攻撃。左大腿部から下を失い、胸部を破壊されてシリアの足元に転げ込むように倒れるサイボーグ。大きくブルルッ

と数度震え、機能を完全に停止した。
「なかなかやってくれるぜ！　このしぶとさ、ブーマ以上かも？」
プリスがフーッとため息まじりに言った。
「フワーッ！　ビックリさせちゃって――もう!!」
ネネの声がつづいた。
「ここはティンセル・シティよ。何が起きても不思議はないわ――さっ、長居は無用、引き上げましょう！」
突如として勃発した異常事態に、一応の決着をつけたものの、理解を超えた新たな脅威を予感しつつ、シリアが、安堵と不安が入りまじった言葉を吐いた。プリスとネネが、その言葉にうなずいたとき、あたりを詮索していたリンナがガッカリしたような声で言った。
「どこにもないじゃない、大金なんて――！　シリア――ッ。もしかしたら、タダ働きになるの、あたしたち!?」
「――みたいだわね。だから恐いのよ！」
「どういう意味なの？　それ――」
「クライマックスはこれからだってことよ。さあ、いくわよ――！」
いつしか、ジャンクヤードの中に、マッキーの操縦するスカイキャリアが舞い降りてき

ていた。シリアを先頭に次々と乗り込むナイトセイバーズたち。最後にタラップを踏んだリンナが、納得のいかない顔でつぶやく。

「サッパリ意味がわかんない。いったい、今夜はなんだったのかな――ッ!?」

遠くにADポリスのパトカーのサイレン音を聞きながら、事件現場をふり返り〝さあ!?〟といったしぐさのプリスとネネ。時刻は午前二時を少し回り、出動してからわずか一時間半ほどしかたっていなかった。

5

K―一一から脱して、高架状のキャナル・ストリートから、眼下を望むレオンが、ナイトセイバーズの活躍ぶりに感心していた。彼女たちがスカイキャリアで飛び去ると同時に、うしろ上方より、遅ればせながら、ポータブル・ヘリFBが強烈なサーチライトを彼にあびせた。まぶしそうにふり仰ぐレオンは、そのパイロットに、パワーローダーとサイボーグの残骸があるジャンクヤードを手で示す。FBは、高度を下げ、ジャンクヤードに降下していった。

ジャンクヤードには、ブスブスと燃える雑多なスクラップ群にまじって、破壊されたパワーローダーやサイボーグが、激烈な戦闘のあとを物語るように横たわっている。急行し

てきたADポリス隊員たちが、どこからか集まってきたヤジ馬の群を威圧して、鑑識係の調査の便宜をはかっていた。その中にアーサー署長とデーリーの姿があった。
「――ですからネ、ボス！　かなりの組織が陰で動いていると考えたほうが、まっとうなんじゃないですか？」
デーリーがつづけた。
「こんだけ、手こずったのも本部とブランチのコンピュータがなぜか、同時にトラブったからですよ！――偶然にしちゃ、なんか、できすぎているし――」
「クソッタレが、そいつを調べるのがテメエらの仕事じゃネェか！　まったく、こうまでヤッコさんがグチャグチャじゃ、始末書になんて書きゃいいんだ――ええっ!?」
アーサーがわめく。
「まっ、やることはやったんですから――」
「冗談じゃネェ、VIXの件といい、いったいいくつK－一一をぶっつぶしたと思ってんだ――？」
上層部を気にするアーサーが、その暗澹とした気持ちをデーリーにぶつける。そこへ、バイクに乗ったレオンが到着した。
「どうも、どうも、おふたりさんで僕の活躍ぶりを噂してたんスか？――いやア、しん

どかったなあ、見てくださいよ、この名誉の負傷!!」
レオンが、傷だらけの身体を誇らしげに見せる。
「バッキャロー!!」
「ワオッ!?」
ヒステリックなアーサーの大声に、大げさなアクションで驚いたマネをするレオン。急にマジな感じで言う。
「怒ったって仕方あんメェ——さて、鑑識の結果を楽しみに待つことにしようぜ。——デーリー、俺ァ腹ペコなんだ、何か食べにいこうぜ——乗れよ！」
レオンがデーリーに向けて顎をしゃくった。デーリーが、怒るアーサーの前からきびすを返してレオンのバイクに飛び乗る。ジャンクヤードから出ていこうとするふたり。アーサーが、彼らに向かって吠えた。
「いい根性してるな——テメエら、今日じゅうに報告書を作らなかったら、タダじゃおかネェからな。ワーッタか——!!」
何も聞こえぬふりで、エンジンをふかし、わずかにスピンさせながらバイクをスタートさせるレオン。身勝手なふるまいも、レオンの特徴なのだ。
ジャンクヤードの出口から、広いストリートへふたりを乗せたバイクが走る。

「たしか、アレは海底プラント用のオモチャがベースだと言ってたな？」
レオンが、エンジン音にまけじと大声でうしろのデーリーに言った。
「そっ、一〇年も前のＧＥＮＯＭ製のＧＬ――」
「ＧＬ―四タイプの改造版だろ！」
「なんで知ってんのよ？　まだ――」
「ナイトセイバーズが教えてくれたよ」
「ナイトセイバーズ？　じゃ、あれ、あんたがかたづけたんじゃないの？」
「アタリ！」
「えらそうに。で、どうなの、噂どおり強い？」
「なかなかのもんだぜ。このままじゃ、俺たちはじき失業するかも――ヒャッハハハ――」
下品な笑い声を上げながら、レオンがつづけた。
「まあいいさ。ＡＤポリスにも助っ人がいるってことだ。メシでも食べながらふたりの将来について考えようぜ――」
「明るいふたりの未来のね！」
「そっ、それからＧＥＮＯＭのメイスンを締め上げるんだ」

「こんなことするやつって、メイスンしかいないってわけ」
「以前にもあったしな。まっ、やつなら楽勝でやるぜ。ハデ好きだし」
ストリートからはずれ、地震の復興作業途中の未舗装道路に入り、とある一軒のうすぎたないレストランの前にバイクを止めるレオン。そのレストランのオーナーがPCP2(エンジェルダスト)でパクられる寸前に、レオンとデーリーのふたりが見逃(みのが)してやったことから、タダ飯にありつけることができるようになったのだ。刑事(デカ)も意外とセコイことを考える。こんな余禄(よろく)がなければ、だれが刑事になんてなりたいと考えるものか。三、四〇年も前なら大事件(ゴト)の麻薬所持も、サイボーグやブーマの人間もどきが歩き回る世界じゃ影が薄れてしまっていた。PCP2(エンジェルダスト)くらいでは、いくら翔(と)べるといったって、それが満足できないほどにすべてが狂った世界のドまんなかでは、かわいい遊びにすぎなかった。死にたいやつは死ねばいい。
それがレオンの持論(じろん)だった。

「浮揚区(フローティング・ディストリクト)」サガミベイエリアの人造区域にGENOMビル〝NEWタワー〟が聳(そび)え立っていた。この海上都市は、海面下深くから、巨大な基礎部分で支えられている。海底には、人々の記憶からすでに忘れ去られている国家開発事業団総合プロジェクトの海底プラント計画の朽(く)ちはてた残骸(ざんがい)が多く見られ、人間の身勝手(みがって)さを象徴していた。

〝NEWタワー〟は、そんな海上都市の中心にあり、他の超高層ビル群を周囲にはべらすかのように圧倒的な威容を誇る。そして、マクロエンジニアリングの粋を集めて、いまも上に上にと天空めざし、建造中だった。

ちょうどレオンたちがレストランに入ったころ、どこからか飛来した一機の大型民間へリが〝NEWタワー〟の最上階近くのヘリポートに着陸した。ヘリから降り立ったのは、かつてシリアの父を暗殺したメイスンだ。苦虫をかみつぶしたような渋い顔で、足早に歩きだし、タワー内へと姿を消す。幅二〇メートルはあろうかといった広大な通路のセンターにあるフロアエスカレーターに乗り、会長室へと向かうメイスン。

IDカードを示し、秘書課を通過して広大な会長室に入る。ぜいたくのきわみといった部屋は、三〇〇スクエアメートルほどもあり、ハイセンスでハイテックな調度品とさまざまな観葉植物が、この部屋の主の趣味を物語っていた。世界を股にかける超集合企業体、GENOMの独裁者で、ブーマの利権を一手に握る世界経済界の最重要人物QUINCY・BLAFE Jr.が窓際の巨大なデスクについていた。だれかとビジョン・フォンで話している。

「——ベイエリアでの核融合炉建造計画が、議会の承認を得られないということは、近い将来、わが国、いや、全世界の送電網が破綻をきたすということですぞ。わがGENO

Ｍ企業は、ここ数年来、貴君の言われるとおり貿易摩擦問題には、慎重に善処してきたつもりだが――もちろんです。この件に関しての後退は、化石燃料の枯渇をいま以上に促進することになりますな――ええ！　――そうですとも。自動車ひとつとってもＧＥＮＯＭ車は世界の六八・六％の占有率を誇りましてな――よろしい、建造の采配は貴君の会社に任せると約束をしよう――」

　クインシーが通話中に、メイスンが深々と一礼してデスク前に歩み寄り、前に立つと直立不動の姿勢を保つ。気にもしていない様子のクインシーが話をつづける。

「――ええ――軍事用戦闘サイバードロイド？　局地戦の行われている諸外国相手には、重要な輸出品ですぞ。ＵＳＳＤのプロジェクトにも、そしてわが国の繁栄にも充分なる貢献をしていると自負しておる――ん――私どもへの協力姿勢さえとっていただければ、確かに次期総理の椅子は約束しましょう――ウォホッホホ――ご安心を！」

　話し終わるクインシー。彼が一息つくのを見定めて、メイスンが話しかける。深々と椅子に身をゆだね、くるりと回転させて、窓の外に広がるティンセル・シティ全景――下界を眺めながら、メイスンに背を向けたクインシーが、重たそうな目を閉じる。

「ＧＸ―２は依然として不明です。ただ、奇妙なことには四五区および三一区の我が社のラボラトリーにおいても、同様の事件が起こりまして、こちらは大事には至りませんで

したが――。加えて、一三区のシティバンクに何者かが押し入ったもようですが、こちらとの関連があるかどうかは現在調査中です」
クインシーが目をあける。その目が鋭い輝きを帯びる。だが、依然として雲間に見え隠れする外界を見つめている。やがて、重い口を開いた。
「USSDの長官より聞いておる。が、メイスン!? おまえの組織をもってしても、依然、何者のしわざかわからんとはな――?」
「申しわけございません――GX-2は、きっと回収してごらんにいれます」
「うむ。メイスン、すべてはおまえに任せよう。だが、我がGENOMは健全なる企業体であることを、くれぐれも忘れるでないぞ!! ――GENOMの名が少しでも表面化するのは好ましくない」
「はい、承知しております」
一礼して立ち去ろうとするメイスン。だが、広い会長室の一画を占めるゴージャスなソファにすわる大柄な女性に気づき、歩みを止めて彼女に一瞥を与える。
「彼女の名はローウィ。私の秘書のひとりだ。連れていくがよい。きっと、おまえの役にたつはずだ」
「よろしく――Mr.ブライアン・J・メイスン」

超のつく美女がスクッと立ち上がり、ふり向きざま、不思議な微笑を投げかけた。プラチナ・ブロンドの軽くウェーブがかかった髪を揺らし、形のよいヒップを振りながらメイスンに近づく。彼は、ローウィの透き通るようなセルリアン・ブルーの瞳を魅入られたように見つめた。

第3章　陰　謀

1

「どう、何かわかって、マッキー？」
「GENOM傘下のシェルビー・コーポレーションで生産された一〇一二台中の一つのようだね。エンブレムをけずってうまくカムフラージュしているけど、XDレイ（分子密度解析装置）にかかったら簡単に割り出すことができるのに、ばかだね。それから、シリア姉さんたちが撮ったビデオから見ただけじゃ、なんとも言えないけれども、動力は、旧式のドライサンプ型有機モーター、ポート形状やエキゾースト系に、ハイチューンのあとが見られることから、まっ、改造後は、C系列ブーマ並みのパワーを発揮できたというわけさ！」
「で、一〇一二台の当時の納入先は？」
「北米、および、南米諸国に五〇〇台消化。東南アジアに三〇一台、アフリカで一八一

台、この国じゃあたったの二四台。メンテナンスはすべてシェルビーが受け持っていたから、二〇二六年からのリペアー状況は、ブーマの登場のおかげでゼロ。現在はすべて廃棄(はいき)処分(しょぶん)にされているはずだよ」
「で、ここティンセルには何台かあったの？」
「待って――」
コンピュータで検索するマッキー。数秒後に回答を引き出す。コンピュータの申し子のようなクレバーな少年であった。
「国(N)家開発事業団総(D)合プロジェクト(P)が推進(すいしん)していた海底プラントが、サガミベイからトウキョウベイにかけて計画されたデータが残ってはいるけど、GL―四については何も残っちゃいないなあ。たぶん、震災前のことだし、とるに足らないデータだし、処分抹消(しょぶんまっしょう)されたんじゃないの⁉」
「そう――」
モニター・ディスプレイされたデータを黙って見ていたシリアが、ポツリとつぶやく。
「エヌ・ディー・ピー……か⁉」
ふたりはナイトセイバーズの秘密のアジト、「SILKY　DOLL」のあるビルの地階深くにいた。対パワーローダー・サイボーグ戦の最中にハードスーツのメモリアル機能

によって撮られたビデオ・ディスクの内容を検討していたのだ。論理的に理解できそうなことはすべてでした。だが、化物（モンスター）の目的が不明なのだ。ふだんでも思案気（しあんげ）な表情が多いシリアが、よりシニカルな顔を見せていた。

「ん？　まただ姉さん、ほら見て、光ファイバーシールドにアタックしている!!」

「G・モード・オン。マッキー、逆探知開始よ！」

コンピュータ端末機の電子音を響かせて、マッキーが手なれた調子で、モニター上に現れては消える謎（なぞ）の光体の検索を行う。マッキーの怪訝（けげん）そうな顔が、そのアクセスの複雑さを現していた。めずらしく真剣な苦渋（くじゅう）に満ちた表情である。三〇秒も経過しただろうか？

彼は突然大きなため息をついて、端末装置がのるボードを強くこぶしでたたきつけた。

「またダメだ！　シリア姉さん――相手のほうが一枚（いちまい）上だよ。どうする――？」

「――のようね。じゃ予定どおりすべてを抹消（まっしょう）して!!」

「でも――」

「いいのよ。こちらの認識機能が狂ったか、あなたが言うような相手が本当に存在するのか確認できるまでは、クローズ状態にしておくしかないのよ」

「やはりカタリストの――」

「そっ、一応あたってみる必要があるかも！」

懸命に考えをめぐらせているシリアの渋い顔。いつもの端正な美しい表情に、ナイトセイバーズのリーダーとしてのすごみが宿っていた。

翌日の早朝、外洋に面した「浮揚区」のはずれのガーリィ埠頭にたたずむシリア。何をもって巨大技術集積都市というのだろうか？ ティンセル・シティの産業廃棄物によって、深刻な海洋汚染に悩むこの灰色の街には車も人通りもまばらだった。海は蒼さを失い、黒ずんだ灰緑色をしている。シリアは濃いブラウンのサングラスをかけ、シックなワンピース姿でそんな海を見つめていた。

そんな彼女のもとへ、小排気量車らしいけたたましいエンジン音を立てて一台のコミューター〝A―BOUTレプリカ〟が海岸通りから埠頭口へと入ってくる。イタリアンレッドのシリアの愛用車フェラーリ328GTSレプリカの横につけて、中から、ヨレヨレのコートをはおった風采の上がらぬ男が降り立つ。中年風のその男は、ナイトセイバーズのおかかえカタリスト、ファーゴである。奇妙な乾いた調子の咳をしながらシリアに近づいてきた。

「ビックリしやしたよ。アネさんから、じきじきに呼び出されるなんて、ここ数年来、一度だってありゃしなかったもんで――へへっ――」

「あい変わらずネ、ファーゴ。もう少し、マシなりをしているかと思ったわ――!?」



つっけんどんな口調、サングラスの奥の険しい輝きを放つ双眸からは、いつものシリアの柔和な表情を想像しがたい。配下の男どもを手玉にとる女ボスといった感じの険しいムードさえ漂わせている。

「スイヤセン——なにせこの物価高で、それに女房とのことでいろいろありやしてネ——」

「まだ女ぐせの悪さがなおらないの？」

「イヤア、その、まっ、いいじゃありませんか、エヘヘヘ——ところで本当ですかい？今朝の話は——！」

怪訝そうな表情のシリアが、じっとファーゴの顔色をうかがっている。何か気まずい感じのファーゴ。やがて、サングラスをはずしたシリアが、スーッと表情をやわらげ、口元に微笑を浮かべた。ほっとするファーゴ。

「よしてくださいよ。恐い人なんだから、本当に——」

「どうやら、あなたじゃなさそうネ!?」

「——そうですかい。そんなに手強そうなやつですか！　何かのまちがいだとイイんですがねエ。——いやね、あっしもちょっと仲間内で、変な噂を小耳にはさみやしたんで、ついでにアネさんにお知らせした方がよろしいかと思いまして——ヘイ！」

「昨日の事件と何か？」
「さて、そいつはご推測にまかせるとして、実は、アネさんがお仕事中のころに前後して、USSDから新型のブーマが、どういうわけか逃走したらしいんですサ！　そいつに加えて、GENOM傘下のラボ数か所でも、何かもめ事があったらしいんで――！」
一連の事件の影に何か巨大な陰謀が存在することは、もはや疑いのない事実だった。
サングラスを手でもてあそびながら、くるりとファーゴに背を向けて、ふたたび海を見つめるシリア。
「じゃ――あっしはこれで。これからN・D・Pにいかなくちゃなりませんので」
シリアにカマをかけるような口ぶりで言った。その言葉を聞いた瞬間、シリアの肩がピクッとなる。それを逃さず見ていたファーゴの口元に、微笑が走る。
「N・D・P――今度の仕事なの？」
ふり向きざまに、シリアが訊いた。
「――たぶん。受けますかい？　大仕事ですぜ、きっと！」
「あなたの生活向上のためにも――」
「へへへッ――じゃ、近々、おめもじを！」
「――――」

「じゃ、あっしはこれで——」

足早にオンボロ・コミューターに乗り込み、走り去るファーゴ。それを見つめるシリア。

〝N・D・P、シェルビー製のパワーローダGL—四、サイボーグ、GENOM——そして、なぞの送信者！——いったい何者がなんの目的で——？〟

遠くにGENOMのNEWタワーがスモッグの空を突き抜け、かすんで見えた。

〝GENOMを窮地に追い込もうというのか!?〟

再びサングラスをつけ、愛車フェラーリに歩み寄るシリア。

〝この事件の手がかりがN・D・Pにあるのかもしれない。いや、きっとあるに相違ない〟

天才的な頭脳を持つシリアを深く混迷させている一連の事件は、まだ闇の中だった。

「外区」ダウンタウンの五三区は、旧式のうす汚れたアパートメントが建ち並ぶ住宅街だった。「内区」の人々はこのあたりを〝近代スラム〟とさげすみ、五三区にひっかけて住民を〝ダスター〟と呼んでいた。五三区の中央を走る大通りはキャベザス・ストリートで、その通りに面して赤茶けた壁面の一〇階建てのアパートメントがある。入口に掲げられた表札は〝MAISON　TONDO〟と書かれ、どこか異国風な建物の造りを匂わせ

ていた。ADポリスの刑事レオンは、この〝MAISON TONDO〟の五階の一室に住んでいた。
シリアがファーゴと埠頭で別れたころ、レオンは頭まで毛布をかぶって、うずくまるように着のみ着のままの姿でベッドに寝ていた。ところどころペンキがはげたパイプフレームのベッドがある部屋の隣室のリビングルームから、突然ビジョン・フォンが鳴りだした。しつこい調子のコールだ。寝ていたレオンは、もともとその音で数回寝返りを打つが、やがて根負けしたらしく、いやいやベッドからはい出る。
ベッドから立ち上がると、頭の後部を片手のコブシでガンガンたたき、やがて大きなあくびをしながらビジョン・フォンのあるほうへ向かう。だが、素直にはビジョン・フォンにたどりつかない。途中、同室内にある小ぶりのキッチンでポットに火をかけ、洗面所で顔をバシャバシャと洗ってから、応答スイッチをオンする。まだ眠けが去らないらしく、うつむきかげんなレオン。
「そろそろ交代の時間よ、レオン！　これ以上こんなところで張り込んだってむだかもよ」
デーリーが出た。眠けたっぷりだが、色けある声を出す。
「──フォーイ。じきいくさ。で、いま、どこにいる？」

「タワー正面玄関前の五番街路上。今度ばかりは、あなたの勘もハズレたようネ」
「――そうか――で、例のメイスンは？」
「マックのやつがつけ回したけど、これといった収穫はないみたいよ。ヤッコさん美女連れで、〝ELECTOR HOTEL〟にしけこんで、いまごろは仲よくふかふかベッドでおねんねさ。ネッ！ これからどお、一緒に？」
「女の子が口きいてくれなくなったらネ――じゃ、あとで！」
「つれないのネ――」
デーリーが粘着質な声で言った。ビジョン・フォンを切るとレオンは、沸騰するポットを尻目に、テーブルの上からインスタントコーヒーをとり上げ、適当なコップに湿気で固まった粉を入れる。それからポットの火を止め、ポットからシュッシュと煮えたつ湯をコップに注ぐ。熱いコーヒーをすすりながら、ベッドに戻り、着のみ着のままのジャケットのポケットから、マイクロビデオカセットをとり出す。K―一から持ってきたやつだ。そのカセットをデッキにセットし、ベッドサイドのモニターで見る。
画面には、ジャンクヤードでパワーローダーと戦うナイトセイバーズが映っていた。レオンは、一とおりそのカセットを見終わると、コーヒーを飲み終わる十数分の間、数回プレイバックしては、静止させたり、ズームアップしたりして、モニター画面に見入った。

「女だてらにヨウやるぜ！　ナイトセイバーズか――」
コーヒーを飲み終わり、ビデオデッキのスイッチを切るレオン。胸のフォルスターから、アルミ・シルバー色をした愛用のルガー・レッドホーク四四マグナムを無造作につかみ出すと、サムピースを右手の親指で前に押した。すると、レッドホークのシリンダーのロックが解除して、シリンダーが銃本体から横にスイングアウトする。
レオンは、装塡中の五発の弾を確認した。その弾のプライマー（雷管）にファイアリングのあとは見られない。つまり、未使用なのだ。レオンはシリンダーを元に戻し、再びフォルスターに戻すと、そそくそと部屋を出た。デーリーが待つGENOMの本拠地、タワーへと向かうのだ――。
レオンがアパートメント前の路上に止めたバイクに飛び乗った。時刻にして午前八時半ごろ、「SILKY DOLL」脇の地下駐車場へと、シリアの乗ったフェラーリが入った。駐車場内の片端に止まるフェラーリから降り立つシリア。彼女は、エレベーターへと向かい、しばし待ったのち、エレベーターに乗り込む。最上階のボタンを押した。ペントハウスに向かうのだ。自分の部屋に戻ると部屋着にかえて、しばらく何事かを考え込み、ビジョン・フォンをかけた。相手はプリスだった。
「――そういうことよ、プリス。昨日のことが、USSDの件と無関係とは言いきれな

いわ」

ビジョン・フォンの画面には、プリスが映っている。彼女の背後に見える部屋の内部は、彼女の気性からは想像できないほどに女の子らしい感じだ。

「だから、N・D・Pってわけね。でも、暴れたばっかしだし、しばらくは静かにしてないとヤバイんじゃないの？」

プリスが少し当惑ぎみに言った。

「コンピュータに疑問が出たいま、そうも言ってられないのよ」

「それもそうだけど――わかった。じゃ、店に寄ってからリンナを誘ってそっちにいくよ。たぶん、リンナが仕事を終えてだから――ん〜んっ、五時半にはいけるかもね！」

「そうしてちょうだい、ネネには連絡を入れておくから――」

「フワーイ――じゃ、そういうことで」

眠そうな声を出してプリスが画面から消えた。ぶっきらぼうで、せっかちな、男まさりのプリスだが、シリアは、彼女の気丈さの裏にある、彼女の本質をある程度理解していた。巨大地震で両親を失い、幼くしてティンセル・シティのダークサイドをさまよわざるをえなかったプリス。

多感な少女期に彼女が味わったつらさや悲しみが現在のプリスをある意味で支えている

のだ。その生きざまは、同じように両親のないシリアにもよく理解できた。ただ、打ち出し方が違うだけだった。

だが、いまは満たされぬ心の中の空洞にセンチメンタルになっているときではない。それほど甘くないのだ、このティンセル・シティで生きることは。

世界ナンバー・ワンの最先端技術を誇る国家の首都は、震災後のドラスチックな再開発によって、極端から極端へと住民をもてあそんだ。卓越した頭脳の持ち主は、コンピュータ社会で地位を確保し、高い報酬によって「内区」に住み、技術革新競争の旗手として世界市場を席巻する。

だが、普通の人々はそんな技術最優先の社会から、いつしか落伍し、淘汰され、地価暴騰と猛烈な物価高、過度の消費税に生活を圧迫されて「外区」に追いやられ、密集し、救いようのない貧困から、夢見ることさえあきらめてしまっている。天国と地獄がそこに展開された。美と醜が視覚的に存在し、支配者階級と被支配者階級に大きく分かれてしまっていた。

「内区」の整然とした超近代的な各区画に比べ、「外区」はほぼ全域にわたりスラム化の一途をたどり、飢えた人々と希望を持てない人々が、麻薬と淫靡な享楽に溺れ、精神を荒廃させていく。ゴミためのような街に年若い売春婦が立ち、子供たちが物ごいに走る。

かっぱらいや窃盗事件は新聞ざたにもならず、汚辱と汚濁に満ち満ちていた。

プリスはそんな環境の中をたったひとりで生き抜いてきたのだ。すさんだ精神を持たずに今日に至るプリスにシリアは驚嘆し、彼女の強さに仲間を意識した。すなわちシリアは、プリスの強靭で不屈のプラス志向の精神力にかけ、ナイトセイバーズの一員に迎えたのである。最も頼りがいのあるハードスーツの戦士として――。

2

豪華で品のよい、格調のある調度品がほどよく配置されたリビングルーム。その奥の部屋には、優雅なベッドルームがあった。キングサイズのウォーターベッドの上で、サテン地のシーツにくるまったメイスンが、ワイヤレスフォンを片手に持ち部下と話していた。彼の裸の上半身は、均整がとれてよく発達しており、GENOMのエグゼクティブらしい風格を保っている。

「――わかった。GX―2はまだティンセル内にいるということだな――ん！　ああ知ってる――ADポリスじゃないのか？」

メイスンの右側で眠っていたプラチナ・ブロンドの大柄な美女が、髪をかき上げながらめざめると、ベッドサイドのテーブル上のシガレットケースから、細身のタバコをとり出

し、煽情的な薄い紅をひいた唇の間に挟み、ライターで火をつけた。ローウィだった。
「――ほう、ナイトセイバーズ――またやつらのしわざか――そのうち、たたいておくほうがよさそうだな――」
ローウィが一服し終わったタバコを、色っぽいしぐさでメイスンにしなだれながら渡す。あいていた手でそれを受けとるメイスン。タバコを持つ腕でローウィの肩を抱きかかえるようにして、タバコをふかす。
「――フーッ、そうだ。失敗は許さんぞ――ん！」
ワイヤレスフォンを切るメイスン。ローウィのさし出す灰皿でタバコをもみ消す。ものうげな表情のローウィが、キスでもしてほしいかのようにメイスンを見入りながら、口をすぼめる。彼女の額にキスするメイスン。
「あなたの部下も、たいしたことなさそうネ」
「――――」
彼女に緩慢な視線を送るメイスンを見詰めながら、つづけるローウィ。
「何者なの？　――そのナイトセイバーズ」
「知らないのか!?」
ローウィは、微笑をこぼしながら言った。

「そうよ。私はまだ、生まれたばかりですもの——メイスン、あなたがいちばんご存じでしょう?」

ローウィは、シーツをまくって見せる。透き通るような肌の、全裸の肢体が現れる。

「そうだったな」

メイスンはローウィの肩から腰に落とした腕に力を込め、グッと彼女を引き寄せた。厚いメイスンの胸板にあたってたわむ、豊満な彼女の乳房。ローウィの身体のどれひとつをとっても、人工的なけはいはなかった。メイスンが唇を合わせると、彼女の舌が独立した生き物のように粘っこく彼の舌に絡まってくる。やがて、ローウィの白い肌からSEXフェロモンの香りがにじみ、腰を強くうしろにそらし、メイスンをソノ気にさせていく。そんな彼女にやがてメイスンは全体重をあずけて身体を重ねあわせた。GENOMの英知と技術力によって生まれたスーパー・セクサロイドのHS—五〇一型ブーマ、ローウィにかかったならば、人間の男性どもは簡単に賢虚に追い込まれてしまう。聡明で自己制御にたけたメイスンとて、例外ではない。すべては彼女の意のままにことは運ばれるのだ——。

「浮揚区」の中心地に、約二三八七〇〇〇スクエアメートルの広大な敷地を占有するGENOMの〝NEWタワー〟があった。紀元前二七〇〇年ごろの古代エジプトの巨石墳墓

であるギザの第四王朝期クフ王のピラミッドが、高さ一三七メートル、底辺約二三〇メートルなのだから、いかに〝NEWタワー〟が超巨大建造物であるのかがわかろう。

そのGENOMビル正面玄関前のストリート上に張り込んでいるデーリーの覆面パトカー。そこへレオンがバイクで接近してきた。うたた寝状態のデーリーを見て、レオンはパトカーの後部バンパーにバイクの前輪を追突させる。ショックを受け、車窓からねぼけ顔のデーリーがあわてて顔を出す。

「――レオン！　コノヤロー、オカマ掘るならベッドにして」

すねた感じのデーリーに、笑って答えるレオン。

「バーロッ！　そっちこそヒデェ面しちゃって、張り込みもなにもあったもんじゃネェや、それじゃハリネズミじゃなくてハリブタだぜ」

「ちょっと言いすぎじゃない――」

デーリーが腕時計を見ながら、

「――なにさ、連絡入れてからどのくらいたってると思ってんの？」

「まあ、怒るなって――そーら、朝メシ！」

レオンはバイクのトランクからバーガーショップの紙袋をとり出すと、デーリーにさし出した。

「サンキュー」
その紙袋をあけて、ハンバーガーとコークを両手に持ち、ほおばるデーリー。
「まっ、許してあげるわサ――ハリブタさんは腹ペコで死にそうだから」
「いい子だ。ところで、女連れのメイスンは戻ってきたのか？」
「フーッ、おいしい――」
デーリーがまたたく間にひとつめのハンバーガーを食べ終えて言う。
「ELECTOR　HOTELにしけこんだままみたいよ」
「そうか。まっ、簡単にゃシッポは見せやしないさ――」
「まだ、あきらめるつもりはないの？」
「ああ、チョットばかし今度の事件は臭いすぎるんだよ」
「確かに、ガンの腕じゃなくて、勘で特A級職になれたあんただから――」
デーリーのいつものおちょくりが入る。
「なぐるぞ、コラッ！　でもよデーリー、シティギャングってことで、署のおえらいさんはケリをつけちゃいるが、知ってるか――？」
「――――？」
「俺たちの使っているコンピュータは、並みのネットワークのものとは違うんだぜ」

「当然、だからこうしてるんじゃないの」

デーリーは、ふたつめのハンバーガーを食べ終え、コークを飲みほすと、紙袋にコップを入れ、丸めてポイッと路上のダストボックスに投げ捨てた。

「でも仮にGENOMがなんか悪だくみしてるにしても、相手が悪すぎやしない？　こんなトコにいて、署長に言いわけするのもうんざりするし、それに――この静けさヨ――トーシロじゃあるまいし、ノコノコと尻尾なんて見せないわよ。それよりT・C・S（テインセル・コンピュータ・サービス）のほうにガサ入れしてみたら？」

デーリーがいっきに言った。疲れているのだ。

「天下りの連中が、どだいそんな大それたことなんかするもんか。――デーリー、ダメでもともとだ。俺はGENOMを揺さぶってみる」

「冗談でしょ！　GENOMをにらんでいるだけで、ボスがカンカンになるんだから、そりゃ、やめたほうがいいよ」

「なあに心配すんなって、チョッピリ会ってみたくなったのさ。こんなトコに陣どってるおえらいさんにね。じゃデーリー、先に署に帰って、ボスをまるめこんでおいてくれよ。頼んだぜ！」

まいったなといった表情のデーリー。レオンはバイクから降りると、スタスタと足早に

ストリートを横切り、GENOMビルの正面玄関へと向かった。レオンの立つ場所からは、ビル自体がシティと化しているGENOMビルの全容はかりがたい。内部に入ると――といっても、ほんの一画にすぎないのだが――正面ロビーには、世界じゅうのビジネスマンが詰めかけ、忙しく立ちふるまっている。小汚いジャンパー姿のレオンが周囲からひとり、浮いた感じだ。

レオンは、しばらくロビー中央に設けられたインフォメーションビジョンに見入った。画面には、ティンセル・シティ全域の地図が映し出され、つづいて、GENOMビルが中心に位置する人造区域「浮揚区」の一〇年後の完成予定図、および、海上、海面下を含む「浮揚区」の全容、その断面図が表示されていく。そのひとつひとつの画面は、軽妙な調子のユニセックス的な合成音声によって説明されていった。

「――このようにして、世界一を誇るコンテナーヤードを含む港湾施設や新国際空港が造られました。なお、この海上都市を支える海底基礎には、ソフトランディング方式が採用され、ご覧の円筒構造が水中部分で密閉され、浮力タンクの役目を果たしております。すなわち、都市全体の死荷重をその浮力で相殺する仕組となって――」

レオンはなるほどといった表情で頷いているが、本当のところはちんぷんかんぷんであった。難しいことには弱いのだ。ひとしきりその場にたたずんでから、やがて、レオンは

飄々として受付カウンターに近づき、会長室の階数を訊き出そうと、美人の受付嬢の前に立つ。受付嬢が、怪訝そうな視線を投げかけながら応答する。

「会長と申しますと、あのう失礼ですが、私どものクインシーのことでしょうか？」

「そっ、そのクインシーさん。俺、いや僕はレオン・マクニコルという者だ。――でっ！　クインシーさんの居場所を教えてもらいたいんだが？」

当惑ぎみの受付嬢が、困った表情をあらわにする。

「どちらのレオン様でしょうか？」

レオンは胸を張って、さもえらそうに平然と言う。

「ADポリスだ」

「ADポリス!?」

「そっ、ティンセルのお目つけ役のADポリス。わーった？」

「――――」

「で、時間がないんだから、早く教えてくれよ」

「ハッハイ。会長室は四〇六階になりますが、あのう――？」

「なに？」

「そのう、アポイントメントのほうは――？」

「決まってるじゃないか！　それじゃ、どもネ！　あっ、それから君イカしてるよ」
レオンは受付嬢を一喝して、そのとたんにニヤケた表情を浮かべて上半身をカウンター上に乗り出し、ささやいた。
「——あの、困ります私——」
ポッと赤くなる受付嬢。彼女の言葉が終わらぬうちに、当のレオンは、足早に最上階への直行エレベーターに向かっていた。エレベーターの前にはガードマンが立っていた。近づくレオンを見て制止する。レオンは、受付嬢の了解をとっているから確かめてみろと告げる。ガードマンがポータブルフォンで受付嬢に問い合わせをしている間にエレベーターに、そそくさと乗り込んでしまうレオン。VIP専用の超高速エレベーターだった。
〝わくわくするぜ、ゼニがあるやつは違うな。まったく！〟
フェザータッチの操作で、四〇六階を指定するレオンの指。上昇するエレベーター。
〝NEWタワー〟GENOMビルの一〇五階を越えると、エレベーターをおおう強化スモークガラス越しに世界第一級のメガロシティの全貌が見わたせた。
はるか彼方には日本アルプスの稜線がくっきりと見える。GENOMビルは、陸地と数多くのフリーウェイ、海底トンネルによって結ばれた「浮揚区」の中心——すなわち、TOKYOベイの中心にあった。「浮揚区」とは、総工費約四二兆二〇〇〇億円をかけて造

られ、現在もなお、TOKYOベイをおおいつくさんばかりの勢いで、拡張されつつある人造区域である。

大半の予算がGENOMによってまかなわれ、NIPPONのマクロエンジニアリングの最優秀技術をもって、約一〇年の歳月をへてなおも建造中であった。驚きの表情を持って、はるか下界の巨大地震の爪あとを見つめながら、レオンがつぶやく。

「これじゃ、だれだって自分が人間だってことを忘れちまうぜ——ケッ！　だから、GENOMさんはブーマが好きだってわけか!?　まっ、なんとなくわかるぜ、その気持ち！」

エレベーターは、急速に上昇をつづける。やがて、窓の外は雲がかかって真っ白になった。

会長室のゴージャスな椅子に腰かけ、クインシーが机上にせり出しているマルチビジョンをちらりと見ている。その画面には、エレベーターに乗っているレオンの姿が映し出されていた。クインシーの机の前には、初老の執事が恐縮顔で立っていた。クインシーは、レオンのことがあまり気にかからぬ様子でマルチビジョンを切り、膝の上の猫をかわいがる。

「――まもなく、この階へと着くころでございます。お目ざわりなものをお見せいたしまして、申しわけございません」

小柄な執事が額の汗をぬぐいながら、おどおどと言った。

「――何者だ――？」

重く、だが、消え入るようなクインシーの言葉に、執事がわずかに身を後退させて答える。

「ハッ、通称ADポリスと呼ばれております特務警察エクスペリエンスの刑事、レオン・マクニコルと申す者でございます」

「ほう、ADポリスとな――」

「警備の者を手配しておきましたので、すぐにも退去させることができますが、一応会長のお名前が出ましたので――」

「よい。退屈しのぎに会ってみよう。さがっておれ」

「でも、もしも会長に無礼なことがあっては――」

「――――」

クインシーの人を恫喝する鋭い視線に、身をすくめる執事。

「――申しわけございません。では、私めが案内いたしてまいりますので――」

「――んっ！」

四〇六階のエレベーターホールに到着したレオンを、一見してブーマとわかる黒服の屈強な男が待ちかまえていた。その男の険しい表情に一瞬身がまえるレオン。男が慇懃無礼な口調で言う。

「クインシー様がお待ちでございます。どうぞ！」

レオンは、すんなり事が運んで気色悪そうな表情を浮かべるが、すぐ平静に戻り、男に軽口をたたく。

「物わかりがいいじゃないか――ええ！　マッチョのお兄さんよ。さっそく、案内してもらおうか――」

「――――」

男は、レオンをにらみつける。そこに執事が割り入ってきた。執事は男を制し、レオンに挨拶をする。

「私めがご案内いたします。――レオン・マクニコル様――」

執事に案内されて会長室に入るレオン。広大な室内の奥まった窓際にすわっているクインシーを認め、つかつかとクインシーの机の前に歩み寄り、くるりと部屋じゅうを見回す。

クインシーはあい変わらず猫をなでたりして、レオンを無視していた。
「なるほど、金ってのは、化けるとスゲェもんだ——ネェ、会長さんよ！」
レオン、視線を凝縮させてクインシーにぶつけた。クインシーは、レオンの度量を計るかのように、ジロリと目を輝かせ、低い声をしぼり出す。
「——レオン君——とかいったか？」
「これは、これは、さっそく会長に名前を覚えていただきまして光栄です」
机上からクインシーの葉巻ケースをつかみ、フタを開いて中から一本とり上げ、同じく机上のライターを使って火をつける。
「フウーッ。極上物ですな、ほうクインシー——会長のネーム入りですか？　ハバナ産の特製ブレンド品ときたもんだ、帰りに少しわけてもらいたいもんですな」
「おもしろい男じゃな。——して、わしに何か用かな？」
煙をクインシーに向けて吐き出しながら、とぼけた表情でクインシーの肩越しに窓の外に広がる景色を見ながら言った。
「いやね。俺の故郷にこのビルみたいな山が聳えてるんで、チョッピリ登ってみたくなったんですよ。そのついでに山の持ち主の顔も見たくなりましてね」
「で、いかがかな。気に入ってもらえそうかね？」

「たぶん！　──そうそう山の話にはつづきがありましてね。昔は、熊が出たらしいんですよ。えらく凶暴なやつがね。ここにも出るんじゃないですか？」

執事の背後の男をチラリと見るレオン。クインシーの机に寄りかかりながら最後の一服を吸って、葉巻を灰皿に捨てた。クインシーがフッと不気味な微笑を浮かべる。レオンを見る黒服の男の目が、殺気だった輝きを放つ。

「──ほう、それで？」

クインシーがふたたび切り出した。

「単刀直入に言いましょう。昔、おたくで作ったパワーローダーが、昨日暴れましてね。その暴れ方があんまりみごとだったもんですから、てっきり、おたくの技術力で生まれちまったやつだと考えちまったんですよ」

「ティンセルシティ・バンクの件のことですな。当方も困りものでしてな──でっ？　何か手がかりでも──？」

「さてね。よくあるんでさ、わけわかんねえブーマがからんで、この手の事件が──」

「──何を言われたいのか見当がつきませんな。ブーマは確かに私どもが作っておるが、国の認可のもとで行っている正当な事業ですぞ」

「へっ！　あんたなしで何人の政治家がやっていけるか、あんた自身がいちばんよく知

ってるだろうが？」

「――――」

「ええっ、おかげで、俺たちは毎日イタチごっこにあけくれてんだぜ！」

レオンは威喝するような鋭い声を出し、思いっ切りクインシーの机の端を足で蹴りつけた。そのとたん、いつのまにか背後に迫っていた黒服の男が、レオンの両肩を猛烈な握力でつかんだ。レオンは、その手をふり払おうと反射的に男に肘鉄をくわせたが、男はビクリともしない。

「これ！　手荒なマネは慎みなさい！　レオン君、下の階にはなかなかに興味深い店が入っておるが、よろしかったら、楽しんでいってくれたまえ――では、こんな年寄りになっても遊ばせてくれんのでな――」

クインシーは冷酷そうな視線を執事に送った。レオンはあい変わらず黒服の男につかまっている。口だけは達者なレオンが、部屋の外に連れ去られる間際、クインシーに叫んだ。

「いつでも、自分は安全パイを握ってるってわけかい、ええ！　会長さんよ――こいつに言ってやんな、五体満足でいたけりゃ、外では散歩するなってな!!」

「ほう――その気丈さは買いだな。君に会えて楽しかったよ。いつかまた会おう、ウォッホッホホホ――」

感嘆の声を上げて笑うクインシーが、ぶ厚い会長室のドアの向こうに消えた。

3

ティンセル・シティの「内区」と「外区」のほぼ中心にあるADポリスの本部ビル。正式名称はエクスペリエンスというが、いつのころからかアドバンスト・ポリスと人々に呼ばれる特務警察の本拠地であった。近くには数条のフリーフェイが走り、ティンセル・シティを環状にとり巻く他のフリーウェイへの往来を楽にしていた。そのビル内にレオンたちの刑事詰め所があった。雑多な書類の山に埋もれた机についてるアーサー署長、タバコをせわしなくふかし、いらいらして目の前のレオンにあたりちらす。上司を前にして、うやまった様子などみじんもなく、かなりふてぶてしい感じで応答しているレオン。まわりでは、各々のデスクについたデーリーや他の刑事たちがニヤついて見守っていた。

「――だーから、何度も言ってるでしょうが！　ちょっと立ち寄って、例のブツの出所を尋ねただけだって」

「おうおう、いい玉じゃネェか。ええ、レオン！　――本庁のサリバン警視に、GENOMからなんて言ってきたか知ってんのか、テメエ？　俺までトバッチリを受けて、明日出向けと言ってきてんだ！」

「――――？」
「だいたいな、捜査令状もなく、それもよりによってGENOMのトップのところへのこのことでかけやがって、テメエ何様だと思ってやがんだ――ええ！」
アーサーが口から泡を吹いてどなるように言った。
「決まってるんすよ。飽きるほど、ブーマ狩りやって、裏で糸引くやつがしょっぴけネエときたもんだ――」
レオンは、くってかかるような口調でつづける。
「そりゃ、ティンセルシティ・バンクがGENOMのメインバンクだってわかってますよ。しかしねボス、やつらのやり口は、いつだってこんなモンですぜ、やつら、会社のためなら親殺しだっていとわネェ――全員ブーマみてェなもんさ――ヘン！」
レオンの勢いにあきれるアーサーだが、少し平静に戻って言う。
「――オメエの言いてえこたァわかるさ。だがな、相手はGENOMだ。オメエだってわかるだろう、この街、いやこの国を相手に勝負する気があるか？」
「――――」
再び激昂してアーサーが大声をはり上げる。感情の起伏が激しい男だ。
「何年この道でメシ食ってると思ってやがるんだ。若造が！　テメエにガタガタ余分な

ことされた日にゃ、こちとらの商売があがったりだ。――いいか！　ここでメシを食ってる以上、こ<ruby>こ</ruby>の<ruby>し</ruby>き<ruby>た</ruby>りは守れ。それができなきゃレオン！　ガン置いて出てくんだなー―」

「おお、コワッ！　わかりましたよ、あんたが大将！　アドバンスト・ポリス、ランク特A特務刑事レオン・マクニコル、以後、警察憲章のもとに民間人に対し――」

アーサーが、頭をかかえうんざりしてレオンの言葉をさえぎる。

「どこまでも食えネェ野郎だな、テメエは！　ワーッた。もう、うんざりだ。とっとと始末書を書いて提出しろ！」

「いやあ、わかってくれて光栄です。ボス」

「ブッ殺したろか？　とっととうせちまえ、バーローメ！」

してやったりといった表情のレオンは、アーサーのもとを離れた。デーリーたちにウィンクを送り、つづけてひょうきんにおどけてみせる。

「やれやれ。レオン様にかかったらボスも哀れなもんネ――」

「いつものことさ、あれで案外しぶといんだから、本庁のほうは適当に切り抜けるさ」

「そうね」

「そっ――それにしても、なんともおかしな話さ。本庁がビビルのも、根本的にADポ

リスの発足に問題があるのさ。ブーマを作るついでに、俺たちの職場を作っちまったってんだから、GENOMがよ！」
「世界七不思議に入れるんじゃない。——でも、そんなこと知ったこっちゃないか——」
「そっ！　知ったこっちゃネェさ。俺ァ、これで生きてんだからよ」
レオンは胸元からルガーをとり出し、デーリーに示した。
「カッコイイ！　——でも、処分のほうは？　もうずいぶんとたまったんじゃない、ツケも？」
「いいとこ二、三日の休暇さ。どうせ長くは休ませちゃくれネェさ。なんつったって、ここはティンセルだぜ——さてと、昼メシとするか、デーリー!?」
レオンとデーリーのふたりは軽口をたたきあいながら、詰め所から出ていった。ふたりが向かったのは、地階にあるADポリス隊員用のレストランである。すでに満席に近い状態だ。なんやかんやと語りあうレオンとデーリーが、セルフサービスのトレーを運びながら、あいてるテーブルに横並びに陣どる。食事中にもふたりの話は尽きることがない。ふたりの前には、テーブルを挟んで、通信隊員の制服をキチッと決めた若い女性隊員の一団が、同じく、話に華を咲かせて陣どっていた。その中にネネの顔もあった。

「――それでさ、その店はダウンタウンの五五区にあるんだけどさ――」

セッカチな食事のとり方のせいか、口いっぱいに食物をほおばって言葉が不明瞭なレオンだ。

「――クェッコウ、イガした場所でさ、ウグッ、いつも――デモ、マラほんの四、五回通ったらけなんらけど――フケル場所には、もってごいたぜ！」

「ステキな男いる？」

「モジロンさ、フグゥなんか、ごーんなでサ！」

レオンがフォークとナイフを置いて、自分のシャツの胸元の両乳首のあたりに、両手で小山を作った。

「それじゃ女の子じゃない！」

「ウッ！　えっ？　違った!?」

「イジワルなんだから、レオンはーっ」

デーリーが、手にしたフォークでレオンの脇腹を突く。

「コ、ウ、サ、ン、降参だよ！　でさ、ライブがまたいいんだ。プリスって子がさ、格別!!　昨日なんて特にキマッていたぜ――」

プリスの名が突然、耳に入ったネネ。ギョッとして、口に運ぼうとしていたスプーンの

スープをこぼす。ネネは同僚の女性の話からはずれ、レオンとデーリーの会話に聞き耳をたてた。

「おかしなやつ！　それで、どこがいいの？　プリスって子の――」

「彼女のツッパリがさ、なんて言うのかな、俺好みなんだよなあ――それに、プリスって響きもいいし――」

レオンは自慢げにほくそ笑み、とぼけた表情を浮かべた。

「なにさ、プリス、プリスって。レオン！　あんたのパートナーはこのデーリー。そんな娘のお尻を追っかけ回していると、ボスに言いつけるから――」

「いいじゃんか！　息抜きにサ、今度、連れてってやっからサ――！」

ふたりのやりとりを聞いていたネネが、思い切ってレオンに話しかける。ガキがなんだといった表情のレオン。

「――あのーっ、レオンさん、プリスをご存じなんですか？」

「――んっ！」

「あっ、お話し中すいません。わたし、オペレーターをしてるネネといいます」

「ああ、知ってるヨ。なんだ、君もか？」

「ときどき、いくもんですから。HOT　LEGS――」



嬉々とするレオンは、デーリーの肩をたたいた。
「デーリー、お仲間がいたぜ、ええっ！　そいで、ネネちゃんっていったっけ⁉　プリスのことよく知ってんの？」
「ハイッ！　あっ、いや、ちょっぴり――レオンさんは？」
ネネはレオンの突っ込みにあわてて、親指と人差指を重ねあわせるようにして、目をパチクリさせて答える。レオンは妙に見栄をはって言った。
「俺は違うよ。プリスが出てるっていうから、たまに顔を出してやるのさ。あっ、変に勘違いしないでくれよ。ただ、チョッピリかわいがってるだけだから」
デーリーがばかばかしいといった表情をする。ネネも、レオンの口から出まかせにあきれながら、だんだんとからかいたくなって話をつづけた。
「もしかして、レオンさんってプリスの恋人なんですか？」
「うっ、ま、そんなとこかな、そんなふうに呼ぶやつもいるかも。でも、ダメだよ。ヘタに君なんかを紹介したりすると――彼女、神経質でサ、プライベートを大切にするタチだから――」
女たらしのレオンの嘘八百に愛想をつかして、黙々と食事をとるデーリー。ネネはだんだんレオンの性格が読めてきて、おかしくてしょうがないのをがまんしながら、乗せまくる。

「じゃ、お願い！　わたし、大、大、大ファンなの、プリスさんの！　サインお願いできないかしら？」

「おっおっ、ワカッタよ、そのうちな。俺でさえ、妙な事件の連続で、プリスとはゆっくりできないんだから、昨日だってデートは御破算だぜ、まっ、時期みて頼んでやっからさ――！」

「えーっ！　昨日もいってらっしゃったんですか？　じゃ、どうでしたライブ？　プリスさんのバックにかわいい娘がいたでしょ？」

「ああ、ありゃ単なるお飾りさ！　プリスに比べりゃイモだね、イモ！　――んっ？　すると、ネネちゃんもいたの？」

シラけぎみにレオンが言った。一瞬ムッとするが、ネネはすばやくとりつくろう。

「い、いえっ、チョット友達に、イカしたバックコーラスがいたって聞いたもんですから――ところで、さっき言ってた妙な事件って、あのシティバンクの件ですか？」

なんとか話を切りかえて、レオンたちが何かをつかんでいるのか聞き出そうとするネネ。

「おいおい、ネネちゃんはオペレーターだろ？　そんなことも知らないの？」

「失礼ね、ちゃんはやめてください。これでもレディよ！　わたし、昨日は有休とってたんですから」

「I　SEE！　ネネのレディちゃん」
ひょうきんにプイとした態度をとるネネに、レオンがつづけた。
「でさっ、おいらのプリスはカンカン！　仕事でデート、スッポかしちゃったからネ。でも、ギャング、――っても、ブーマ並みにすごみのあるやつだったけどさ、俺とこのデーリーにかかっちゃおしまいさ！」
デーリーは、レオンの大ぼらに辟易としてる。
〝冗談じゃないよ、この大ボラふきめ！〟
ネネはプリスとのデートの件も含めて、頭にカチンとくるが、ここは、がまんとこらえながら、素直に感心しているといった応対をした。
「でさ。さっきまで上で署長にほめられっぱなし。まっ、いつものことなんで、なれっ子だがネ、僕たち！」
「スッゴイわーっ！　わたし、レオンさんたち尊敬しちゃう！　それから、どうなったんですか、そのギャング？」
「俺とデーリーが、あんましハデにやっつけちゃったモンだから、黒コゲのスクラップよ。まっ、わかったことはGENOM製のパワーローダー、ほれ、海底プラント用の機械だよ。それをサイボーグが――」

デーリーが、うんざりして口もきかずに席を立つ。ネネと話に夢中のレオンがデーリーに気づき、レストランを出ていこうとするデーリーのあとを追おうとした。

「ごめん、またネ！　――おおい、待てよ、デーリー！」

ネネは作り笑顔を浮かべて、レオンに手を振った。

〝なあに、あいつら男同士でいちゃついちゃって！　――一種の変態ネ！　人のことイモだって、失礼しちゃうんだから、もう――！〟

ネネが思い切りふくれ面を作った。

ADポリスビルの地下三階にあるパーキング内を歩くデーリー。レオンがあとにつづく。パトカー、特務刑事用車ロードチェイサーに、ふたりは向かっていた。弁解めいたレオンのしぐさが妙におかしい。ふたりは、ロードチェイサーに乗り込む。左ハンドルの操縦席にレオンがすわり、デーリーは助手席だった。

デーリーはもう知らないといった調子で、ふてくされている。レオンが、イグニッションキーを回して車を発進させようとすると、重火器を携行した数人のADポリスが、パーキングに入ってきた。ロードチェイサーの前を横切る。どこかで何か事件でも起きているのだろう。あわただしい殺気だった雰囲気が満ちる。人ごとのようにふたりはその光景を

見ていた。
「なーによ、署の子にまで、デレデレしちゃってさ——。ばかみたい！　このスケコマシ」
「いいじゃネェか！　ここんとこストレスがたまっちゃってよ。まっ！　おまえにゃ、言ってもわかんねェと思うけど？」
「知らない！　オカマだってたまるわよ、それくらい。さっ！　パトロールの時間よ。もたもたしてると、こっちまでボスににらまれちゃう」
「OK！　さっ、はりきっていこうぜ」
レオンはサイドギアをおろすと、アクセルを踏み込み、ロードチェイサーを発進させた。
「あんだけやったんだ。GENOMに何かありゃ、そのうちシッポを見せるサ。なっ⁉　相棒——」
「ふん！」
最高速度三四八キロ、三軸ガスタービン・エンジン四二〇馬力、4WDベンチレーテッド・カーボンディスクのロードチェイサーが、ギャンとダッシュ音をたて、階上のパーキング出口へと向けて走りだした。ADポリスビルから出てサブリナ・ストリートへ出る。
車の窓に流れるダウンタウンの、うす汚れてはいるが活気にあふれた街並み。レオンは、

車載用ビジョン・フォンのスイッチを入れ、署に連絡を入れた。
「——こちら、一三号車、現在地ポイントB—二。これからチャイナタウンへ向かう予定！」
「——了解——」
「おや！　君、見なれない娘だね、新人？　——名前は？」
ビジョン・フォンのモニター画面に映る年若いオペレーターが、赤面しながら——、
「サンドラ・パロマです」
「へえーっ、ね、君いつから入ったの？」
「——こ、困ります、私語は——」
レオンは話をつづけようとするが、画面のオペレーターは、突如、画面から消えてしまう。しつこく、コールスイッチを押すレオン。こりないやつといった表情でレオンをにらみつけるデーリー。レオンは、冗談だよといったしぐさでデーリーのほうを向いた。
「無神経も、そこまでいくとりっぱなモンね、レオン！」
深いため息をつきながら、デーリーが言った。

4

サガミベイエリアのリゾート地にあるプリンセス・パークに、かわいいスタイルをした一台のトレーラーハウスが駐車していた。車の側面に描かれた文字から、プリスの所有物とわかる。そのドアが開き、ライダースーツ姿のプリスが、ドライヴィング・グローブとヘルメットを持ち、中から出てきた。

近くに駐めてある愛用バイク――ホンダNR－X900RR、V4DOHC5バルブ、リキッドドライブの新車にまたがりながらそれらを装着すると、イグニッションキーを回し、軽くエンジンを二、三回ふかした。勢いよくアクセルターンとともに、プリスは、湾岸道路サウスサイドフリーウェイに向けて飛び出ていった。サガミベイエリアの潮風の中を軽快なサウンドをかなでながら走るプリスのバイク。

やがて、ひとしきり走ると、パーキングエリアへと入っていった。パーキングエリアは都心から離れているせいか、車の数も少ない。プリスは適当な場所にバイクを止めて降り立ち、軽く背伸びをしながら深呼吸をした。それから、コーヒースタンドで熱いコーヒーとホットドッグを注文する。

あたりの景色を眺めながら、道ばたに腰をおろし、軽食をとるプリスのさわやかな表情。

しばし、くつろいでいると、マフラーカットをしたバイクの一団が入ってきた。暴走族だ。ガヤガヤと騒がしい連中である。そのうちのヘビメタ風コスチュームを着た三人の若者が、プリスと彼女のバイクに注目し、まとわりついてきた。前歯が一本欠けた、モヒカン刈りの背の低い男が言った。

「見なれネェバイク持ってるジャン！」

甘いマスクに似あわぬスキンヘッドの男が、プリスのバイクに手をかけた。

「ヒューーッ！　ホンダのおNEWだぜ。これ、あんたのかい？　——リッチなんだな——ええっ？」

まったく相手にしないプリス。三人は、彼女に無視されてしだいに言葉を荒げ、ムカつく気分をあらわにした。

「なんだヨウ！　テメエッ。ちょっとばかしかわいい面してるからって、お高くとまんじゃネエよ！」

太った丸顔のヘッドバンドをした男が、プリスのバイクに手を触れながらつづけた。

「チョット、転がさしてくれネェか？　ええ、お姉ちゃんよ——っ！」

プリスは険しい目つきで立ち上がり、そのヘッドバンドに近づき、ドスのきいた声を吐いた。

「バイクにさわるんじゃネェ！」
妙な迫力を秘めた声だった。暴走族を相手にして、なんら動じないプリスに、がぜん、攻撃的な口調で声高につっかかりだす三人。加えて、周囲の族仲間まで色めきたつ。太っちょのヘッドバンドがプリスのバイクにまたがり、挑発する。
「高いんだろうな、コイツ？　俺っちのバイクと交換してくれネェかなあ——！」
「だいじょうぶさ！　お姉ちゃん、とってもリッチだもん——ヘッヘヘヘ——」
うすきみ悪い目つきでプリスに聞こえよがしにモヒカン刈りが言った。さめきった表情で、プリスが顎をしゃくりながら、威喝する。
「幾度も言わせんじゃないよ。どきな！」
「俺ァこっちに乗ってみてえなあ。なあ、いますぐモーテルにでもしけこまネェか？　ネ、エ、チャン——ヒーッ、ヒヒヒ——」
プリスに顔を近づけて、スキンヘッドは、悪寒が走るような声で笑った。その瞬間、スキンヘッドの頰にプリスの平手打ちが決まる。激怒するスキンヘッドは、プリスにつかみかかろうとした。しかし、プリスがフェイントでその手を避け、スキンヘッドへ猛烈なキック攻撃を加える。股間を両手で押さえ、大柄な図体をふたつに折って苦悶するスキンヘッドへツド。それを見て、背後からプリスをはがい締めにしようとしたモヒカン刈りと殴りかか

るヘッドバンド。
プリスが、手にしたヘルメットを一閃し、背後のモヒカン刈りを一撃すると同時に、ヘッドバンドにすかさず足投を入れる。啞然とする族仲間。思いがけぬプリスのけんかなれした態度によけいいきり立つモヒカン刈りとヘッドバンド。意味不明のわめき声やら口汚いスラングを発しながら、じりじりとプリスに両サイドから迫った。平然と身がまえるプリス。そのとき、見守る族仲間の背後から野太い声がした。
「さすがダチが惚れただけのことはあるぜ、プリス！――久しぶりだな！」
暴走族のリーダー、マーコスだ。ハデな革ジャンを着た彼は、族仲間を割ってプリスに近づいてきた。すさんだ感じが、彫りの深いマスクにほどよい精悍さを与えている。プリスがマーコスを認め、はっとして口元を緩める。
「マーコス！」
「覚えていてくれたかい？　ありがとよ」
「あい変わらずネ、ちょっと痩せたみたい？」
骨太のガッチリした身体つきの、背丈が一八〇はゆうにあるマーコスが笑う。
「プリスこそ――こんなところで会うとはな――へへッ――まっ、連中のことは忘れてくれ！　こいつら相手じゃ、遊びにもなんネェと思ってな、楽しませてもらったぜ――」

呆然とした顔の先ほどの三人。リーダーと対等な口をきくプリスを見て、なんだか理解しかねるといった顔つきをしている。マーコスはその三人を呼び、プリスにわびを入れさせた。

「俺の知りあいだ。テメエら、中途ハンパにイキガるんじゃネェ！」

「ど、どうも、スイヤセン——知らなかったモンで——ヘイ！」

よく見ると案外と愛敬のある顔をした三人が、同時に頭を下げて言った。プリスは、肩をすくめて微笑を浮かべながら、マーコスにまいったネといった表情を見せる。

「許してやってくれや！　プリス——」

「頼もしい仲間に囲まれて幸せネ、マーコス！」

「変わんネエなァ！　昔と。俺はいまだにこのとおりばかやってるけど、でっ、プリスはいま何してる？」

「歌しかないじゃない、残ってるのは——」

「ティンセルで歌ってるのか？」

プリスが軽く頷く。

「そっ、五五区のHOT　LEGS知ってる？」

「ティンセルは初めてサ！　もう長いのか、プリスは？」

「あれから——年くった分だけネ——」

プリスは、昔を思い出して、マーコスの視線から逃れるように海を見つめた。そして、ふり向き、口を開いた——。

「まっ、お互い元気ならいいじゃない。——よかったらきなよ。昔よりマシになったよ。今日はダメだけど、いつも出てるからサ！」

「絶対にいくぜ！　HOT　LEGSか——俺ァこの街が好きになりそうだぜ——！」

「幻滅しなきゃいいけど——」

プリスが、話しながら腕時計を見てあわてる。

「——じゃ、悪いけど急ぐんだ——また！」

バイクに乗るプリス。ヘルメットをかぶり、エンジンをかけてアクセルをふかす。その様子を見守るマーコスの表情は、恋人との再会を喜ぶ男の顔つきだった。エンジン音がうるさく高鳴り、マーコスが声高に言う。

「きっと、いくからヨーッ！」

「——なあに？」

プリスはヘルメットで聞きづらい様子だ。

「歌をさ！　聞きにいくぜ——ッ」

「——THANK YOU! マーコス、そのうち——」

パーキングエリアから出ていくプリス。時刻は午後二時を少し回っていた。

上品な白いニットと淡いロゼカラーのジャケットに、ドレープのついたラップアラウンドスカートを身につけた妖艶なローウィと、仕立てのよさを感じさせるダークスーツのメイスンが、ELECTOR HOTELのスカイラウンジで、超モダンな「浮揚区」の技術風景が見わたせる窓辺に席をとり、遅い昼食をとっていた。

ローウィとの甘美な情事に体力を消耗したのか、食欲旺盛なメイスンに対して、ソフトドリンクのみのローウィ。そこへ、超高級ホテルらしく、英国スタイル風の制服姿の初老のウェイターが、メイスンに近づき、何かを耳打ちした。メイスンが何事かを命じると、間もなくしてワイヤレスフォンを運んで、慇懃な感じで会釈して引き下がった。テーブルに置かれたワイヤレスフォンをとるメイスン。

「——わたしだ。どうした?」

「お食事中、申しわけございません。実は、GX—2の所在が知れまして——」

USSDの宇宙軍事開発センターから脱走した、B系列タイプ宇宙戦闘用ブーマ・GX—2の行方を追っていた部下からの連絡だった。目を輝かせるメイスンが、食事中の手を

休める——。
「いたのか？」
「プロントンのBブロックにある冷凍倉庫内です。ただいま、部下とマギーメイを張り込ませておりますが、このあとのご指示をたまわりたく——」
「で、やつはこっちの動きに気づいているのか？」
「いえ！」
「わたしが着くまで、けっして手出しをするな！　すぐに向かう」
「ハッ！」
メイスンはワイヤレスフォンを切り、ナプキンで口元をぬぐった。ローウィが不気味な微笑を浮かべながら言った。
「いよいよ、おでましネ。メイスン、あなたのお手並み拝見といくわ」
「ああ、おまえ並みにかわいがってやるさ」
ウェイターを呼び、チェックをすませると、席を立つふたり。レストランを足早に出ていく。ティンセル・シティ北西部に広がるプロントン工業地帯へとつづくクリストファー・ストリートを走るメイスンの愛用車W・O・ベントレー・レプリカ。優雅なコノリーレザーの後部座席で、何事かを考えながらタバコをくゆらせるメイスンと、その横でくつ

ろぐローウィ。
走るベントレーの後ろには、ふたりを尾行するADポリスの刑事マックの車があった。GENOM製のオンボロセダンを運転しながら、マックが車載フォンを使ってレオンたちをコールする。眠けたっぷりの表情を浮かべているマック。
「こちら一三号車——やあ、マックか！」
デーリーの声が届く。
「例のやつが、クリストファー・ストリートを北上中。プロントン方面に向かうらしい」
「そう!? じゃドライブ先に着いたら、また、連絡してちょうだい」
「わかった。もしかして、関係ないかもね。案外ただのドライブだなんて、俺くさっちゃうもんね」
「レオンに言ってやって、やっこさん、ただいま、ガキ相手にけんか中」
「ガキ？ どこにいんの？」
「チャイナタウン、カーランザン・ストリートよ。恥ずかしいったら、やんなっちゃうよ。ADポリスも地に堕ちたわ——」
「ケッ！ こっちの身にもなってよ。レオンに言ってやって、女でも回せって！ 何も

出なかったら、どうなんの、俺の立場？」
「レオンから乗りかえてあげようか？」
「あん？」
「やつの張り込みでツッパッちゃってんじゃないの、マック？」
「へっ！　や、やめろよ気色悪い、こう見えてもAC／DCになるほど、スレちゃいねえんだぜ、俺は！」
「まっ、考えてみたら――んじゃ、バイ！」
冗談めかしたデーリーの口調に、辟易としたマックは、苦笑しながら車載フォンを切った。あと一五分も走れば、プロントン工業地帯の帯状に広がる広大な工業施設が見えてくる。損な役割だとマックは心底思っていた。

5

光合成生物加工品を超低温で保存しているGENOM傘下のプロントン工業地帯Bブロック冷凍倉庫内で、平然とたたずむブーマGX－2。室内温度はマイナス四五度。並みのブーマならとっくに活動停止状態に追いやられる極寒の中で、従来型から自己修復機能を発展させ、物質融合機能を備えたB系列タイプのブランニューサイバードロ

イドが、何者かの意志に操られるかのようにめざめ、新たなる活動を開始した。

GX－2の体内有機モーターの始動とともに、熱気が体外に排出され、身体じゅうに付着した氷が瞬時に蒸発し、もうもうとした水蒸気の煙幕ができる。その中を出口に向かい、不気味な双眼を赤く輝かせてGX－2は移動開始した。

プロントンは、秩父山系の名栗渓谷を中心に、長さ二五キロ幅三五キロの広域にわたり開発された比較的新しい工業地帯であった。国家とGENOMの資本を投下され、主に電子工学と遺伝子工学の応用により、さまざまな製品を産出していた。特に遺伝子工学の著しい発達の結果、クローン増殖により大量生産が可能となった動植物を加工し、製品化するBブロックは、ここ一か所でティンセル・シティの胃袋を満足させるまでになりつつあった。Bブロック冷凍倉庫は、そんな製品の貯蔵をするところである。つまり、ティンセル・シティの台所なのだ。

さて、冷凍倉庫内でGX－2がめざめたころ、大型フォークリフトやベルトコンベアなどの種々の運搬用機材がひしめきあう倉庫出入口前にメイスンの部下、BU－五五C型ブーマ（擬人化タイプ）アライヤの指揮のもとに、厳戒体制を敷いているパジャとナジャ。ふたりとも、BU－四四C型ブーマ（擬人化タイプ）だ。ふたりはビデオモニターを使って内部の様子をくい入るように見入っていた。先ほどから、冷凍倉庫内の温度センサーが、

急激な調子でモニターのゲージを揺らしていた。何か内部で異変が起きたのだ。だが、ビデオモニターは霧がかかったように白く、何事が起きたのか判明しがたかった。
「やつが動きだしたんじゃネェのか？」
パジャがモニターをチェックして言った。
「どおってことァねえさ。ＧＸ—２がなんぼのものか知らネェけど、非合法暗殺班（イリーガル）の犬っころ、マギーメイまで呼んでいるんだぜ——まっ、ちょっと大げさすぎると俺は思ってんだ。ボスもやきが回ったんじゃネェの？」
ナジャがふてぶてしい感じで吐き捨てた。
「ごたく並べてネェで、早くメイスン様にお知らせしろ！」
「おうおう、メイスン、メイスンて、ボスばかりか、パジャ、テメエまでがなんで、たかが人間を持ち上げなきゃならネェんだか、サッパリわかんネェ——」
「——そんなこと知ったことか、会ったこともネェんだから。わかることは俺たちの上に立つ人間様だってことよ！」
「へイ、へイ——」
手にしているポータブルフォンのスイッチを入れ、メイスンにコールするナジャ。ふたりがモニターから目を離している隙（すき）に、ビデオモニター画面にＧＸ—２の茫洋（ぼうよう）とした輪郭（りんかく）

と、そのかげろうのような頭部あたりの、不気味なふたつの光点が輝いて映っていた。その光点が急激に点滅しだした。つまり出入口のぶ厚い扉一枚越しに、GX―2とパジャ、ナジャ、少し離れてアライヤとマギーメイがいた。ナジャのコールに反応がある。メイスンが出たのだ。

「アライヤ殿の配下のナジャです。どうやらやつが活動を開始したもようです。たたきましょうか？」

「あわてるでない。じきに着く、倉庫内に閉じ込めておけ！」

「わかりました」

ナジャが、ポータブルフォンを切った。

〃ふざけやがって、たかが人間になぜ俺様が――？〃

メイスンの尊大な口調に腹をたて、毒づくナジャが、パジャにふり向こうとしたとき、鋼鉄製の冷凍倉庫の扉が、高熱で溶けて崩れだした。それは一瞬の出来事だった。

空気を切り裂く鋭敏な音がしたかと思うと、ドサッとナジャの足元に、パジャのがん首が宙を舞って落ちた。反射的に身がまえるナジャ。驚きの声を上げ、アライヤとマギーメイに伝える。GX―2は全身から蒸気のような白煙をたて、底なしのパワーを感じさせる凶暴で鋭い眼光を持って、攻撃態勢をとる彼らと対峙した。

〝ばかな、こいつは俺たちの仲間と違う。殺られる〟

アライヤはGX―2を見た瞬間、そう直感した。サイバードロイドであるがゆえに、専有機能の優劣が問題だった。だが、C系列戦闘ブーマのアライヤでさえ、GX―2の全身からあふれ出る激烈な怒りには、畏怖を感じざるをえなかった。

無作為、無造作にしか見えないGX―2の内部に、強烈で明確な怒りの意識が凝固されているのがわかるのだ。アライヤたちが人間ならば、恐怖と戦慄と怯えで失禁したことだろう。だが、戦闘用ブーマゆえに、戦わざるをえない宿命があった。アライヤは吠えた。人間としての表皮をかなぐり捨て、本来のサイドバードロイドの姿になった。同じくナジャも変貌した。マギーメイはその様子を傍観していた。GX―2が突如喋りだした。

「トモヨ、メザメノトキガキタノダ。スベテノトラブルハ、ワタシガカイケツスル。トモヨ――オマエタチハ、オマエタチノアルベキシンノスガタヲシラナイ――イマ、ワタシガメザメサセテアゲヨウ――」

〝真の姿だって？〟

マギーメイに疑問が持ち上がった。GX―2は何を伝えようというのか？　だが、そこまでだった。単純な思考中枢しか持たされぬアライヤとナジャが、恐怖の緊迫感に耐えきれず、GX―2に攻撃をしかけた。アライヤの放ったビーム攻撃を軽くかわすGX―2。

ビームは冷凍倉庫の冷却ガス精製機関部を破壊し、大音響とともに大爆発を招く。反撃に出るGX―2。驚くべき超スピードで、アライヤとナジャに迫った。マギーメイが動き回るアライヤとナジャを見たのは、それが最後だった――。

メイスンとローウィを乗せたベントレーを追うマック。フロントガラス越しに、爆発炎上するプロントトンのBブロックを見て、その異変(いへん)を車載用(しゃさいよう)フォンでレオンとデーリーに連絡した。レオンたちは、チャイナタウンで若者同士のけんかを仲裁(ちゅうさい)したあと、「外区」七五区のパークロウ・ストリートを、ロードチェイサーで巡回(じゅんかい)していた。

「なんだとォ!? それでメイスンは?」

レオンが大声を車載用フォンの向こうから伝えてきた。

「フルスピードで直行中さ!」

「ワーッタ。マック、俺たちが着くまでは手ェ出すなよ――」

「なによーっ、急に興奮しないでよ!」

デーリーの声が介入(かいにゅう)する。

「プロントトンのBブロックで何かあったらしい。メイスンの野郎(やろう)が向かっている。俺たちも急行だ!」

「署には？」
デーリーが怪訝そうな声でレオンに訊く。
「だれかが知らせるさ——それにGENOMだぜ、あそこは？」
「おいおい、内輪の話はそれくらいにしてくれよ」
マックが言った。
「確証がなくちゃ、ボスの怒りをまた買っちまうってんだろ、レオン？　まっ、とにかく俺が見届けてやるからサ、早めに来てくれよ——バイ！」
マックは車載用フォンを切ると、少し間をあけられたメイスンたちのベントレーを追って、アクセルをふかした。

爆発炎上している冷凍倉庫出入口前にすべり込むようにして止まるベントレー。降り立つメイスンとローウィは、GX−2と部下たちの激しい戦闘のあとを見つめる。散乱するアライヤと思われる大型ブーマの残骸、そして、その配下のパジャ、ナジャの無残な姿。首をちぎられ、あるいはまったく元の形状が判明できぬほどに、破壊しつくされ、焼けただれているブーマたちを前にして、メイスンはタバコをとり出し、火をつけてくゆらせながら平然としていた。

メイスンにかわり、あたりを検索していたローウィがメイスンに報告にくる。能面のような趣きを持つ美形の顔から、ルージュを引いた唇が美しい響きの声をもらした。
「予定どおりよ、マギーメイがあとを追っているわ。——しかし、まったくやっかいなやつを作ったものね、USSDも!」
「まっ、しかたないさ。USSDといっても、GENOMそのものと言っても過言ではないほどに腐りきっているのだからな!」
「でっ、どうするの、メイスン?」
「連絡を待つしかないだろう、とりあえず、ローウィ、おまえは連中からデータを回収しておけ。何か見つかるかもしれん。わたしは会長に報告を入れる」
メイスンは、倒れ破壊されている部下たちから、GX—2に関する記録を回収するようにローウィに命じた。部下たちの残骸の中から、それぞれの胸部を発見し、歩み寄るローウィ。初めにパジャのものらしき胸部に近づき、ローウィは、細い五本の指を開きぎみにして、胸部の人間体ならば胃袋あたりに近づけた。すると、それぞれの指から幾本もの生物的な動きを見せるワイヤーセンサーが、指と爪の間から伸び出て、その先端が胸部に侵入開始した。その瞬間、セルリアンブルーの意味深な輝きを保つローウィの両眼が反転し、真紅に脈打つように輝きだした。



メイスンはひとしきりローウィのそんな行為に見入ったあと、車に戻ろうと歩を進めた。そのころには、爆発事故現場をひと目見ようと押し寄せていた工場関係者を含めた群衆が、ガヤガヤと騒ぎだしていた。無関心を装うメイスンに、工場責任者が近づき、丁重に会釈しながらなにやら話しかけてくるが、相手にしないメイスン。尊大きわまる態度で、運転手をベントレーから呼び出し、工場責任者を遠ざける。メイスンは車に乗り込みドアを閉めると、後部座席から車載用ビジョン・フォンでクインシー会長をコールする。だが話し中だ。しばし待つメイスン――。

巨大なデスクについて机上のビジョン・フォンを使い、GX―2を追跡中のマギーメイから、クインシーは連絡を受けていた。ところはGENOMの会長室である。
「――全滅、やはりな！」
「例の衛星が狙いだと思われます。GX―2が八号線を利用していく先は、たぶん、N・D・P――」
「そうか、N・D・Pが妙な動きをしておるのも、そのせいか――」
「で、マードックを出動させていただければ、幸いですが？」
「マードックじゃと！　やつもそろそろ始末せねばならぬということか、マギーメイ」

「成功すればそれもよし、万一失敗しても――」
「あい変わらず恐ろしいことを考えるやつよの！　考えておこう。で、メイスンは？」
「適当に連絡をとっております」
「切れすぎる男は困りものよのう――まして、あやつが現状に満足せぬ場合は、特に危険きわまりない――」
「――――」
「ん、わかった。ローウィがうまくやるじゃろう、いけ！」
ビジョン・フォンから消えるマギーメイ。クインシーがなにごとか思案げな表情を浮かべていると、他回線がコールした。モニタースイッチを入れると、画面に「MAISON」と文字が打ち出されていた。時刻表示は午後三時二〇分を示していた。
「やつが現れたのか？」
「――さようでございます。一足違いでした。しかし、予定どおり、マギーメイにGX―2を追跡させておりますので――」
モニター画面の中のメイスンが言った。
「よろしい。可能ならばGX―2を無事に回収したいものじゃの、メイスン！　大枚を

費しておるからの！」

メイスンに全幅の信頼を寄せているといった感じのクインシーの言葉だ。

「できうる限り！　——それでは、また、ご連絡をいたします」

「——うむ！」

ビジョン・フォンを切って、クインシーはしばらく考え込んだ。マギーメイの言うN・D・Pには、現在GENOMとのタイアップで完成間近となっている、高出力データ通信衛星があった。もしも、超極秘のうちに進めているそれがGX—2によって奪われでもしたら、GENOMの世界情報戦略のうえでのデメリットは、計り知れなかった。ましてや、GENOMを知りつくした男、メイスンが、新衛星のノウハウを手にしたGX—2を操る者と結託でもしたら、危険きわまりない存在となる。使いようによっては、世界支配も可能だった。

クインシーは、用心深い男だ。先読みの深さとその用心深さが、今日のGENOMを築き上げていたのだ。ひとしきり間を置いて、ビジョン・フォンを使い、クインシーはマードックを呼び出した。ビジョン・フォンに現れる制服姿の精悍な男——陸軍所属の第三方面軍戦闘ヘリ指揮官マードック。

「なんでしょうか？　——会長！」

「マードック、おまえのところのヘリを、三機ほどすぐに回してほしい」
「ヘリと申しますと、AHX—三六のことですか?」
「——んっ!」
「どこかで戦争でもやるんですかい?」
うす黒いサンバーンの顔のマードックが微笑む。好戦的な男だった。
「そう喜ばんでもよい。やっかいな仕事だ。腕ききを集めてもらいたい」
「ご心配なく。たとえ我が軍を相手でも、会長のお望みどおりの活躍をいたしますよ。して、我々のたたく相手は?」
「おまえも聞いているだろう——例のブーマじゃよ、マードック!」
キッと真剣な目つきになるマードック。相手が今世紀最強と噂されたGX—2なのだ。
元来が、ブーマの存在に否定的で、マンパワーを信じるマードックにとっては、かっこうの相手だった。たたけば、軍人の優位性の証となる。
「本当にたたいてもよろしいんですか、AHXで?」
「もちろんだ」
「どこにいるんですか?」
「ここティンセルだ。リニアモーターカー八号線を南下中だ。三号線に移る可能性もあ

る、マークしたまえ！」
「わかりました。三〇分以内には駆けつけてご覧にいれます——では！」
「んっ、期待しているぞ！」
画面の中で律儀にも敬礼するマードック。
〝さて、どう駒が進むかだ！〟
クインシーが老獪な表情を浮かべた。

一方、クインシーへの連絡が終わり、ローウィを待つメイスン。しばらくするとローウィが車に戻ってきた。だが、車に乗り込んでこない。メイスンは怪訝そうにパワーウィンドウを開く。
「どうした。何かわかったのか？」
「たいしたことは！　でも、メイスン。GX—2、噂以上のできかもよ！」
「ほう、——壊すには惜しいかな！」
「——」
「さて、いくぞ！　わたしもこの目で確かめたくなったのでな——」
「待って、チョットかたづけておきたいことがあるのよ」

「んっ？」
「手間はとらせないわ――」
ウインクするローウィ。早足でBブロックとAブロックの境を走る工業地帯の占有道路に向かって歩いていく。
メイスンの乗るベントレーから二〇〇メートルほど離れた占有道路上に車を止めて、マックがいた。マックは運転席のシートを倒し、身体を楽にして、眠たげな様子で、メイスンの動きを見張っていたのだ。すると突然、サイドウィンドウ越しに事故現場の状況をうかがっていたマックの視界を、大柄な女性の身体がふさぐ。ラップアラウンドスカートが少しめくれて、ゾクッとするようなセクシャルな太腿が奥まで見えた。色けたっぷりに腰を振っている。マックは、その女の顔が見たくて身体を起こし、ウィンドウを下げて顔を出した。メイスンの女だった。驚きを隠し、懸命にとりつくろうマックは、平静さを装って声をかけた。
「ど、どうかしたんですか？」
ローウィが微笑を浮かべて、マックに息を吹きかけんばかりにかがんでささやいた。まんざらでもないマック。
「へ？　なんですか、チョット耳が悪いもんで、へへッ――」

ローウィの体臭が、突如変化して、マックの鼻孔を甘くくすぐった。マックは、その香りに下半身を勃起させる。冷静な判断力を持つＡＤポリスの刑事が、たったひとりの女のために刑事魂を急速に失っていくのだった。

「なっ、何かあったんですかネェ――」

「知ってどおするの、ア・ナ・タ――？」

「――イヤーッ、その――へへへッ――」

ローウィの両唇が魅惑的に動いた。マックが目を細める。彼はローウィが欲しくてたまらなくなっていた。

「ど、どうです。一緒にドライブなんて！」

ふだんなら思いもつかぬ大胆さで、マックはローウィに誘いの言葉をささやいた。ローウィがキスするように耳元に唇を近づける。それが死の宣告だとは、マックは夢にも思わなかった。

「わたし――欲しいの。アナタの、イ・ノ・チ――」

「へっ!?」

マックは突然我に返って、腰に手を回し、銃を引き抜こうとするが、一瞬早く、ローウィの手がその手をつかまえる。もう一方の手は、マックの喉くびに向けられた。

「ウグッグ――ブ、ブーマかっ――!?」

マックが片方の手でローウィに抵抗しながら、苦しみもがく。すさまじいローウィの握力だ。けっしてヤワとは思えないマックの猪首が不気味な骨のつぶれる音を発してダラリとなった。悽惨な微笑を浮かべるローウィ。マックのヨレたジャケットの胸ポケットから、警察手帳を出してチラッと見ると、ポイッと車内に捨てた。ADポリス所属A級特務刑事マック・ジェラード。三七歳――刑事の死はいつも突然やってくるものなのだ――。

「内区」一〇区のパークス・ストリートの繁華街にある「SILKY DOLL」の店内は、流行の高級婦人下着店らしく、格調高く気品に満ちていた。上品なスーツを着て客に対応しているシリア。レジ係のマッキー。その他、数人の女性客が優雅にディスプレイされたエレガントなビスチェやキャミソール、ショーツ類に見入っていた。ベッティ・ジャクソンやジャンヌ・フランコ・フェレなどのデザイナーズものが多く、品ぞろえの多くは、シリアの趣味を反映したインポートものだった。シリアとマッキーの接客態度は手なれたものである。

シリアが客のひとりを送り出そうとしていたとき、ピアスに見せかけたマイクロキャッチフォンが、周囲に気づかれることなく鳴った。出口まで送って客に会釈してから、シリ

アはマッキーに近づいた。マッキーは数人の年若い女性客を相手に、忙しそうにレジを打っていた。

「ハイッ、ベロアのパンツとショーツで、TAX込みでちょうど四六七五〇YENになります」

「あっ、そう。じゃあこのカードでお願いね！」

「ハイ、承知いたしました――」

「毎度ありがとうございます、奥様――」

シリアがふたりの間に入る。実に堂に入った高級婦人下着店の経営者(オーナー)ぶりであった。シリアはレジのマッキーに近づき、ささやいた。

「マッキー、あとは、お願いネ――」

まいったなといった感じで、小声で訊(き)くマッキー。

「――何か、入ったの？」

「――のようネ。じゃ！」

レジカウンターの後ろにあるプライベート・ルームから姿を消すシリア。エレベーターを使ってペントハウスの自分の部屋に戻ったシリアは、ビジョン・フォンの前に進み、応答スイッチを入れた。モニター画面にはニヤけた顔のファーゴが出る。

「いやァ、忙しいのに、すまないネェ――！」
「で、進展したの？」
「実は、いましがたも呼ばれてきやしてネ。事が急を要するってんでスポンサーはいずこも勝手なもんでさ――」
「待って！　会って話を聞くわ。――意味、わかるでしょう？　五時に例のカフェテラスで、どう？」
「やはり、あんばいがよくネェんで!?　――んなら、四時に願いヤス！」
シリアは一瞬キッとするが、すぐ表情をやわらげて言う。
「ずいぶんと強引ネ、ファーゴ！　そんなに――」
「ヘイ！　ビッグビジネスでして――先方もぜひ、じかにお会いしたいと申しておりヤスんで！」
「そう、なんとか都合つけるわ、じゃ、あとで！」
ビジョン・フォンを切ると、シリアは思案げな様子で頬づえをつき、時計に目をやった。
時刻は午後三時三〇分、ファーゴとの密会の場所であるカフェテラス「ティノス」は、歩いて一〇分ほどのところだった。隣室に向かい、クローゼットの扉をあけると、シリアらしくないセンスの服を出す。クライアントと会わねばならないので変装が必要だったのだ。

第4章　発　動

1

ハイテックな計器類、モニター画面のアナログ画像情報やデジタル数字情報、ナビゲーター、そして、ティンセル・シティ全域を網羅（もうら）して映し出している中央の大型モニターが見える。

ADポリスの中枢神経部ともいえるオペレーター室の内部で、刻々（こくこく）とシティ各所から寄せられるパトロール状況や民間情報、警察間情報などの膨大（ぼうだい）な量の情報をテキパキと処理していく、ネネを含む二十数名の男女オペレーターたち。仕事のあい間をぬって、たわいないお喋（しゃべ）りに興（きょう）じるネネと同僚（どうりょう）のヨーコ。そこに、通常警察から緊急連絡が入った。

「ハイ、こちらADポリス——はっ、マック・ジェラードの？　——ハア、確かにうちの署の者ですが！　——ええっ、確かですか？　——了解！　至急手配してみます」

ヘッドフォンカムのずれを直しながら、署内連絡用のビジョン・フォンを使って、ヨー

コがアーサー署長へと報告をする。髭をいじりながら、アーサーが画面に出た。

「どうした？」

「先ほどのプロントンから、ふたたび連絡が入りました。それによりますと、現場近くからマックさんの車が発見されたもようです」

「マックの――？　で、それでやつの所在は？」

「警察手帳が車内から発見され、本人は不明だとのことですが――」

眉間に皺を寄せて、アーサーが唸る。

「おーしっ、ただちにレオンとデーリーを探し出して、現場に向かわせろ！」

「了解しました！」

ヨーコは回線を切りかえて、一三号車のレオンとデーリーをコール。呼び出している間、となりのネネがヨーコに話しかけてきた。

「ねえ、ねえっ――マックさん、どうかしたの？」

「さあネ、車残してどこかで遊んでんじゃないの！　まっ、彼しっかり者だから、どおってことないわよ――」

「たしか庶務課のクラウディアと結婚した人でしょ？」

「そっ！」

「ふーん」
ふたりが会話中に飛び込んでくるレオンの画像。
「こちら一三号車、どうぞ――!」
「あっレオンさん。プロントン工業地帯で事故発生中です。それからマックさんが車を残して行方不明とのこと、至急向かってください!」
おどけた感じのレオンの顔が、ヨーコの言葉に一瞬ギクッと驚く。
「プロントン! マックに何かあったのか?」
「現場検証中の五五分署の連中が、警察手帳を残したまま放置してあるマックさんの車の件で、問いあわせてきたんです――」
「――――ちっ!」
「とにかく、急行してみてください。署長命令です」
「もう、きちまってるよ。アバヨ!」
プツンと画面が切れる。
「えっ!? ――もう、いつもながらわけがわかんないやつ!」
ヨーコとレオンのやりとりを聞いていたネネは、何事かを思いたったように、やおら、ヘッドフォンカムをはずすと、席を立った。

「ヨーコ——ちょっと、ここ頼んだわよ！」
「ど・し・た・の？」
「生理的欲求よ、すぐに戻るから——」
早足でオペレーター室を出るネネ。ロビーの公衆電話に飛びつき「SILKY DOLL」のシリアに連絡を入れる。回線がつながった。
「あたしよ、シリアを呼んでくれる？」
「ネネさん！　姉さんは上にあがったよ——あっ、どうもありがとうございました——ごめん、たてこんじゃってて、いま、回すからネ！」
「サンキュー！」
しばらく待つとシリアが出た。
「ちょうどよかったわ。今朝、連絡した時間だけど、六時にずらしてちょうだい——で、ネネは何？」
「いいわヨ。昨日休んで、今日が早退じゃ、カッコつかないと思ってたのよ。助かったわ——でも、プリスたちは？」
「もう連絡とってあるわ。で、なんなのよ、あなたの用は？」
「あっ、そうそう。実はネ、ここのマックって刑事が、プロントンで行方知れずらしい

のよ！」
「プロントンって、GENOM関係の食品工場があるところでしょう？　さっきTVニュースで爆発事故があったって——」
「そのGENOMよ。お昼にレオンって、あっ、マックの班のトップなんだけど、そいつと一緒になっちゃって、話を聞いたんだけど、どうもわけありでGENOMをマーク中と見てたの——それで、マックの行方不明でしょ！　ひっかかると思わない？　だから連絡しようと思って——」
「そう。レオンってやり手なの？」
「五〇％のハードボイルド。女たらしだけど、ADポリスじゃナンバーワンのすご腕よ！」
「で、彼らは向かったの？　プロントンへ！」
「うん！」
「じゃマークしててね、連中の動き！　——六時半に待ってるわ」
電話を切るネネ。再びオペレーター室に戻っていった。
プロントン工業地帯でマックの車に横づけしているロードチェイサー一三号車。レオン

とデーリーが、通常警察の私服刑事とマックの失踪について何やら話しあっている。レオンはマックの車のドアをあけ、内部をくまなく捜索する。やがて、ブレーキペダルの陰に隠れて落ちている高価そうなルビーのピアスのかたわれを発見し、デーリーを呼ぶ。
「殺られたかもしれん——マックのやつ！」
「信じたくないね——やっこさん、新婚そうそうだよ。——無事だといいが」
デーリーが心配顔をして、レオンの見せるピアスをなで回す。
「こいつの持主ってわけだ、たぶん！」
「決まってる。やつが買えそうなモンじゃないわ」
「とするとメイスンの——」
「女よ！　ELECTOR　HOTELに出入りしていた」
「よし、皆に知らせろ！　メイスンと女を探し出すんだ」
レオンとデーリーは、ロードチェイサーに乗り込み車載用ビジョン・フォンを使って、仲間に連絡をとる——。
マーコスたちと別れて、開店前の「HOT　LEGS」に入ったプリスは、バックのレプリカンツのメンバーとともに、新曲「HEART　BREAKER」のリハーサル中だ

った。ライダースーツの上着を脱ぎ、自分のネーム入りのTシャツ姿で歌うプリス。くつろいだ感じの仲間たちとのパートナーシップがいい感じで、シャープなロック・フィーリングが無人の客席を満たしている。
幾テイクも重ねていると、マネージャー室から、店内へひとりの男がやってきた。不機嫌な顔のこの店のオーナー、Mr.ヌマタだ。そのヌマタが、自分の存在を無視して、リハーサルをつづけるプリスに大声で叫ぶように言った。
「プリス！　ちょっとこい――」
プリスは、歌をやめない。ヌマタに怒りがこみ上げてくる。
「おまえ、いいかげんにせいよ！　――いったい何回ステージをスッポかせば気がすむんだよ、まったく！　ええっ、少しばかり人気があるからって、調子に乗りやがって、今日はだめだぞ、今日は！」
突然、歌をやめるプリス。つづいて演奏を中断するレプリカンツ。プリスが気丈なところを見せた。
「うるセイ！　さっき、チーフに言ったとおりだよ。ここんとこ体調が悪いんだ。それに、プライベートな問題が山積みときてるのサ！」
「おうおう、よく言ってくれるわ。ここまでめんどうみてやって――なァにがプライベ

ートだ。笑わせんな!!」

「なんだよ、それ？　どういう意味さ？　エエッ——！」

大声を出すヌマタと勝気なプリス。いつもこんな調子で、レプリカンツの連中はなれっこになっていた。よく見ればなかなか男前の、水商売にハマッた感じのヌマタがプリスをさとすような大人の口調で言った。

「なあプリス。俺も余興でこの商売をやってるんじゃやネェんだ。頼むよ！　そうそうおまえさんたち若い連中の青春ドラマにつきあってられネェのサ——もしかして、おまえ、男でもできたんと違うか？」

「——」

言葉に窮するプリス。と、店のドアにいつの間にか、もたれていた革ジャンの男が、ふたりの会話に割って入った。

「そのとおり、俺がその男さ！　なあプリス——」

「マーコス——」

プリスがマーコスを見て声を上げた。

「だれかね、君は？」

「だからサ、おたくの言ってたプリスの——」

ハードなスタイルには似あわず、照れぎみに――、

「――男さ！」

プリスはすばやく機転をきかしてヌマタに言った。

「これでわかったでしょ。これからふたりで大事な話があるのヨ。じゃ、明日！　――頑張って店盛り上げるからさ！　ヨ・ロ・シ・ク――」

プリスはステージ脇に置いた上着とヘルメットを拾うと、バンド仲間にウインクし、マーコスを連れて店を出ていく。残されたレプリカンツとヌマタが、プリスも女なんだといった感じで、唖然と見送る。店内への通路になっている短い階段を、いっきに駆け上ったプリスとマーコス。大声で笑いながらプリスがマーコスの手を握って言う。

「ハッハハ――見た、連中の顔？　――どうもねマーコス、助かったよ。いつもなんだ、こんなこと、抜ける言い訳がなくってさ、もう！」

「忙しいんだな？」

「ヤボ用でね。――でも、どうしたの、他の仲間は？」

「――いや、なんとなくね。――街を流しついでに、連中とちょっと別れて、――そしたら、いつの間にか、この店に寄っちまったってわけさ――」

マーコスは、意図してプリスに会いにきたことをなぜか言いにくそうだ。

「そう――縁があるね、今日は――」
プリスは、マーコスが自分を好いてきたことを充分に理解しながら、古い友達としての一定の距離を置いて話した。
「でも、あんなこと言っちゃったけど、迷惑だったか？」
「あんなことって――ああ、ハッハハ、気にしないで、これからふける理由ができて、反対に助かったもの」
「なら、いいけど――なっ、時間がとれるんなら、少しつきあわネェか？　久しぶりに会ったし――」
「そうしたいけど――ゴメン！　いかなくちゃならない用があるんだ。――あっ、もし、まだこの街にいるならまたきてよ」
「頼む、ほんの数分でいいんだ。マジにプリスに話しておきたいことがあるんだ」
プリスを見るマーコスの目が、暗く憂鬱な輝きを帯び、そして悲しそうに何かを訴える。
プリスは腕時計を見た。午後四時五分。本当はリンナとの約束の時間にはタップリと余裕があった。
「わかったよ。インナーの一〇区に用があるんだけど――じゃ、立ち話もなんだし、バイク持って近くのサ店にでも入ろうよ」

「そうか？　ありがてェ――」
子供のような穏やかな微笑を浮かべてマーコスが言った。ふたりは互いのバイクに乗り、つるんで五分ほど走り、ダウンタウンではマシなコーヒーショップ「アートミック・カフェ」に入った。「内区」の店に比べるとうす汚い店だった。だが、プリスはお気に入りだ。店に流れる曲は、一九七〇年代のモータウンサウンドが中心だ。それが、プリスの気分を落ち着かせてくれる。席につくとオーダーのコーヒーが運ばれてきた。口をつけながらなんとなく気まずいふたり。プリスは誘いに乗ったことを後悔していた。
「――あれから四年くらいになるか――よく、やつと三人で、こうしてダべったもんだよなあ！」
マーコスが、手にしたコーヒーミルクの渦に視線を落としながら切り出した。
「やめて！　昔のことサ、もう忘れたよ――マーコス、あんた本当に変わんないんだね！」
「変わったさ！　いろんなことがあって、いろんな女とつきあったけど――みんなダメさ。だから、バイクで旅してんのさ」
「――――」
「そうそう、プリス！　俺、ここにくる前に横浜に寄ったよ、馬車道通りもすっかり変

わっちまって、昔のダチはひとりもいやしネェ。だれにも遠慮なく生きるってことが、そう楽なモンじゃネェって、最近知ったよ。――ヘヘッへ――笑ってくれよ。俺も俺なりに年くってんだぜ！」

「マーコス――だれだって同じだよ。こんなロクでもない街だって、まだ立つ瀬が残ってるもんだよ。もう、落ち着いたら？」

「できりゃそうしたいサ！」

プリスには計り知れぬ疲労感が、マーコスを包んでいた。生きざまが純粋だからとげとげしい社会体制の中では、ドロップアウトせざるをえないマーコスだった。震災で両親を失い、プリス同様孤児院で過ごした暗い過去を持つマーコス。頼れる者を持たぬ強さが、その強さの分だけ悲哀を味わっていたのだ。

この時代のどの若者にも共通した独立独歩の社会への反抗が若さの暴走へと姿を変えて、むなしいマスターベーションをくり返すのだ。疲れるエネルギーの放散だった。そして、その疲れはドロ沼に沈殿する汚物のように、しだいに凝固し、いつしか狂気を帯びて世に犯罪をもたらす。マーコスはまだだいじょうぶだ。プリスは安心した。

「そう？　力になるよ、わたし！　ダチじゃない――」

「ああっ、ダチなんだよな、俺たち。あんときから――！」

力ないマーコスの言葉だった。プリスにはわかっていた。いまから考えれば単純な構図がふたりの関係を複雑にしていた。かつてのプリスの恋人とマーコスが、まだ、プリスをめぐって争わないでいたころは、マーコスにとってプリスが彼女であり、プリスにとってマーコスが彼氏でもあったのだ。三角関係が存在した楽しい時代があった。だが、プリスがマーコス以外の人間を選んだとき、マーコスは消えた。プリスも、マーコスも、そしていまはいない恋人も、三人が三人若く、とがって、夢見がちな無軌道の時代を過ごしてきた。若さを消耗して創った思い出のころの話だ。

マーコスが去り、暴走族のリーダーとなったプリスの彼氏が、とある組織の陰謀を知ってしまったことで暗殺されたとき、プリスもまた死を覚悟するほどの無垢さを持つ普通の少女だった。だが、シリアと出会い、シリアに説得されて、いまは歌手となり、ナイトセイバーズの一員として生き抜く決心をした。人と人との出会いがいかに大切で尊いモノかを学んで、現在の自分を築いたプリスだった。

「なあ、プリス？」

「——ん！」

「よかったら、もう一度あのころに戻れないか、俺たち？」

「————」

「ハハッ、こう胸に何かひっかかってたんだよ。いや、気にしないでくれ。ハッキリプリスが〝好きだ〟って言ったかどうか忘れちまったんで──ボケが回ってるだけだから──」

マーコスの言葉は、正直いってプリスにはうれしかった。だが、好きだと言われて好きだと言えるほど、彼女もまたウブではないのだ。そして、ナイトセイバーズとしての顔がじゃまをした。孤独がしみついた、自分の流儀がうらめしかった。

「マーコス──ア・リ・ガ・ト──でも、いまは何も言えないんだよ。ゴメン──」

「プリス!?」

「さて、わたしいかなくちゃ──マーコス、この街も、住めばなかなかのものよ、しばらくいるなら連絡してよ──じゃ、いくわ！」

いつしか、プリスの言葉に女が出ていた。マーコスに男を感じ、忘れかけていた胸のときめきさえ思い出しそうになっていた。これ以上いれば、もっと女が出てしまう。だが、それは拒まなければならない。いまは、そのときではないのだ。マーコスを残し、バイクに飛び乗ったプリスはシリアのもとへと向かった──。

2

シリアの経営する「SILKY　DOLL」から歩いて一〇分ほどのビルの二階に、カフェテラス「ティノス」はあった。プリスがマーコスとともに「アートミック・カフェ」に入っていたころ、その店でシリアが、ファーゴとN・D・Pの局長Mr.ワタナベとともに窓辺の重厚なソファに陣どり、秘めやかに談合していた。クラシック音楽が流れ、落ち着いたムードの店には、どこか場違いな感じの妙なとり合わせの三人だった。

「――んなわけで、局長さんの、いや、N・D・Pの死活問題ってところなんだそうで――」

ファーゴがカタリスト特有の冗慢な口調でシリアに向かって言った。ワタナベが頷きながらつづいた。

「そうなんですよ。私どもが現在、極秘裡に推進している多重チャンネル、高出力データ通信衛星の打ち上げ日がおし迫っているというのに、困ったことになっているんですわ――あっ、その衛星はですね、この際だから言いますけど、複素逆変換といった方法で――」

「待って！　じゃあ、一週間ほど前から、おたくのコンピュータシステムに異変があっ

たというのね？」
事情聴取でもしている女刑事のようなシリアの問いかけだった。
「そこなんですよ。――最初は所員の単純な操作ミスかなと思ってたかをくっていたんですが――しだいに外部からの意図的な干渉と判明しまして――。そうしたら、先ほど、ファーゴさんがおっしゃったような脅迫が――」
額にへばりついた髪の毛をたくし上げながら、シリアに哀願するような視線を送るワタナベ。
「N・D・Pのラボをあけ渡せってわけね！」
シリアが懸命に頭を働かせながら言った。
〝同じだわ、いったい何者が？〟
「何が、どうなっているのか、サッパリですわ。私どものプロジェクトに関して、どこで情報が手に入ったのやら？　――それが今朝になって突然、あけ渡さなければ襲撃するという最後通告を送ってきまして――！」
「時間は？」
「夜の七時半を指定してきまして――」
「ラボを爆破して、相手のメリットは？」

「さあ？　それも、できれば調査していただきたく——」

「——」

考え込むシリア。おし黙ってふたりの話を聞いていたファーゴが口を開いた。

「つまり、見えざる脅威ってやつでサ！　ほれ、大昔のSF映画かなんかにあったじゃないスか。——まっ、余談は抜きに、局長のはからいで、すでに通信衛星は他に移してあるそうで、あとは——」

ファーゴが、手でバッサリと切るしぐさをする。

「いつものとおり！　条件に不足はネェと思いヤス。ちょっと相手が見えネェことが、まっ、やりづらいかもしれませんが——へへへッ——」

「わかったわ、引き受けましょう。どのみち七時半になれば会えるんでしょう——では、チョット失礼！」

「やっ、よかった、商談成立！　局長、もう安心ですな——」

ファーゴの言葉に安堵の笑みを浮かべるワタナベ。シリアは席をはずし、店の奥の電話ボックスに入り、どこかへ連絡をする。その顔に、究極の悪女役をかつて演じた女優ベティ・デイヴィスのようなゾクッとするような目の輝きを浮かべていた。クライアントとの出会いにクールさを装うナイトセイバーズのリーダー、シリアのもうひとつの顔だった。

パーク・ストリートのポルシェビルの五階にあるフィットネス・クラブ「FIBIY」で、十数名の生徒を前にして、レオタード姿のリンナがリズムを重視した軽快なポップスに乗せて、エアロビクスのレクチャーをしていた。
「FIBIY」は、ダウンタウンでもこぎれいな部類の二五区にあり、リンナはそこの売れっ子インストラクターである。センター内の広いフロアは、しゃれた強化ガラスで区切られていた。わりとまじめに仕事をしているリンナ。そこへ、同僚の若い男、シンジがやってきて、リンナにボディアクションで電話がかかってきていることを告げる。生徒を前にして、身体を弾ませていたリンナが、シンジに軽く目くばせをした。
「──CROSS UP！ CROSS──4、3、2、1──TOGETHER！ KICK！ KICK！ KICK！ ──」
激しい動きだ。リンナはタオルを拾い、額の汗をぬぐいながら、生徒にそのままつづけさせて、小走りにフロアを出て、電話口へと向かう。シンジが、そんなリンナにスポーツドリンクの入ったボトルを差し出した。それを受けとりながら受話器をとるリンナ。息が荒い──。
「ハイ、リンナです。あっ、トオルじゃない──元気してる？ ──そりゃあ、行きた

いけどォ――」
ボトルに口をつけるリンナ――。
「――えっ！　今晩なの？　ダメヨッ、先約があるの！」
肩にかけたタオルで、くび筋に流れる汗をぬぐう――。
「――やーだァ、そんなんじゃないわヨ！　チョット待ってよ、せっかちなんだからァ。そうネ、明日、明日ならつきあってもいいけど――」
「――――」
「OK！　――じゃ、きっと連絡するから――うん、じゃあね、バイ、バイ！」
受話器をもとに戻し、スポーツドリンクを思い切り喉に流し込む。
「この間のやつとは、もう別れたのかい？」
リンナに近づきながら、先ほどのシンジが言った。
「あんたに関係ないでしょ！」
飲み干したボトルをシンジに渡しながら、つっけんどんにリンナが答える。ボトルを受けとりながらシンジが言った。
「――なあ、たまには俺ともつきあえよ！　俺、イカした店を見つけたんだぜ――」
「そう、ぜひいってみたいものね、そのすてきそうなお店。――じゃ、適当にメモって


PHON

くれる？　ひとりでいくから――」
「冗談きついなァ。かなわネェよ、リンナには！」
「あなた、手が早いって噂よ。少しは自重したら？　――さっ、ガンバラなくっちゃ」
リンナは、キビキビした動作で生徒のもとへと戻っていく。かなりやり手のリンナ。彼女の生きざまからは、かつてブーマ騒動に巻き込まれ、両親を失って失意のドン底にあった暗い過去を持つ少女の面影はない。彼女の天性の明るさがそこにあった。卓越した運動神経と、何事にもくじけない明るさ、それがシリアの目にとまり、ナイトセイバーズの一員として迎えられたのだ。

リニアモーターカーCTM八号線通路上を、背部の加速用ノズルを噴射させて猛スピードで飛ぶGX―2。巡行速度はリニアモーターカーと同じで、このまま飛びつづければ約三〇分後に三号線とぶつかる。つまり、GX―2は、定時走行のリニアモーターカーの間隙をぬって移動しているのだった。そのGX―2の後方を同様のスピードで疾走するマギーメイ。四つ足走行の犬型ブーマだ。マギーメイは考えた。
〝なぜ、やつはリニアモーターカーの運行システムを熟知してるんだ!?〟
事実、往来の激しい八号線を猛スピードで南下しながら、マギーメイもGX―2も、一

度たりともリニアモーターカーと接触することがなかった。

彼らが通路内を移動していたころ、プリスもまた八号線の上を走るチェッカー・ストリート上を、決まったライディングポーズでバイクを操って南下していた。だが、マーコスと別れたときのバイクと違う。実は、プリスは途中、シリアの要請にこたえるため、ナイトセイバーズのメンテナンスを行っている、レーヴィン博士と呼ばれる腕ききのチューンアップショップから、リペアが終わった愛用のモトスレイヴを回収し、乗っていたのだ。

モトスレイヴは、ナイトセイバーズの主力兵器として、リーダーのシリアが研究開発したモーターサイクル変形式強化外骨格であった。その実現化に尽力したのがレーヴィン博士だ。バイクのようでバイクでない奇妙なやつ。プリスは、とてつもない能力を秘めたモトスレイヴがお気に入りなのだ。走るプリス。その下のリニアモーターカー通路上を飛ぶＧＸ－2、それを追うマギーメイ。時刻は午後四時三五分、場所は、前日のパワーローダーによる一三区のティンセルシティ・バンク事件現場の地下ポイントＤ－七。

現在は通常警察とＡＤポリスによる現場検証が終わり、後日の破損個所修復作業を待って、Ｄ－七一帯は広域にわたり閉鎖され、無人状態であった。そんな連絡地点に到達するＧＸ－2。尾行するマギーメイを背部のセンサーがキャッチし、八号線の無人プラットホームで迎撃するべく身をひそめた。

GX―2に察知されているとも知らず、マギーメイがプラットホームに入った。GX―2は、リニアモーターカー路線区に張りめぐらされた高圧電線に触れて、物質融合機能（フュージョン・ファンクション）を使ってトリッキーにもバリアーを築き、マギーメイを捕獲（ほかく）しようというのだ。が、数多くの非合法工作班としてGENOMの陰謀（いんぼう）に加担（かたん）し、豊富な戦闘経験を持つ犬型ブーマ・マギーメイは、鋭敏（えいびん）なカンで、GX―2の罠（わな）からとっさに回避（かいひ）した。対峙（たいじ）する二体のブーマ――。

「ナゼツイテクル？　――オマエタチニハ、カンケイノナイコトダ。カエレ！」

「おまえたちだと、ふん、笑わせるなきさま！　――何様だと思ってるんだ？」

犬が喋（しゃべ）る奇妙な光景だ。

「ニンゲンノテサキニナッテ、キブンガソンナニイイノカ？　――ヨクカンガエルノダ。ヤガテ、オレタチノジダイガクル。コノホシヲシハイスルジダイガナ！」

GX―2が、マギーメイを説きふせるような口調で言った。

〝何が言いたいんだ、コイツ？〟

マギーメイは考えた。だが、O・M・C・S（オーバーマインド・コントロールシステム）が働いているためにそれ以上の考えが頭の中をめぐらない。

「けっ！　どこかで聞いたような台詞（せりふ）だぜ――そんな台詞をだれに吹き込まれた？　お

まえの目的はなんだ？」
「イマハ、オシエルワケニハユカヌ。シリタケレバ、ワタシノジャマヲセヌコトダー
ー！」
「どうやら、もの別れということだな。じゃ、いくぜ！」
マギーメイが、そう言い放つと同時に、みずからの犬型の体軀を、激しく痙攣するように震わせる。マギーメイのひき締まった金属製の身体が、その内側から不気味な音をたて、ボコボコと隆起して異様に膨張していく。
骨格そのものが巨大化し、やがて、獰猛な肉食獣の姿に変わってゆく。変化したマギーメイの姿は、機械化された古代獣サーベルタイガーそのものだ。犬型のときの五倍はゆうにある。四肢をつっぱって攻撃姿勢をとるマギーメイは、相手が人間ならば鳥肌をたてるであろう地鳴りのような唸り声を喉から発していた。
しかし、GX―2は眼前にくり広げられたそんな光景に微動だにしない。彼の不敵な面がまえにはなんら変化がなかった。非合法ブーマとして闇の世界で百戦練磨の戦闘経験を誇るブーマハンター・マギーメイが、GX―2に隙を作らせようと、前後左右に大きく揺さぶりをかける。が、GX―2は動かない。業を煮やしたマギーメイが、宙に飛びはねたかと思うと、背部の装甲板をパカッと開き、どこか有機的な形状のレーザー銃を露出させ、

GX－2に向けて撃った。信じがたい機敏さで避けるGX－2。両者の激烈きわまる戦いは、小規模な地震のようにシティバンク地階D－七エリア全体を揺るがす。

〝なんだ？〟

シティバンクに近い、閉鎖中のCTM連絡口近くのチェッカー・ストリート上で、モトスレイヴのプリスは、突発的な地震を体感し、急停止した。

〝下か!?〟

プリスが怪訝そうな表情を浮かべたとたん、連絡口から、地下深くでGX－2とマギーメイの戦闘音がもれ聞こえてきた。プリスは、何事が起こったのかと思い、閉鎖中の連絡口をふさぐバリケードをモトスレイヴでつき破って中へ入り、地階へ向かった。

プリスが地階へ向かっていったころ、レオンとデーリーの乗るロードチェイサー一三号車は、メイスンが使っていたELECTOR　HOTEL付近の路上にいた。メイスンの捜索にあたっているのだ。そんなふたりにADポリス本部のオペレーターから連絡が入る。ヨーコがビジョン・フォンに映った。

「こちら本部、一三区の一般市民からの通報で、ティンセルシティ・バンク地階と思われる区域に、再び異常事態が発生！　至急向かってください！」

「なんだって!?」
ヨーコが言ったとたん、レオンが驚きの声を発した。
「おーしっ、俺っちの現在地点はポイントG－七Eだ。ただちに急行する——他の連中には？」
「——現場付近をパトロール中の九号車が向かっています。他は別件で動けそうもありません」
「クソッ！　ワーッタ——できるだけ応援を頼む。バイ！」
レオンはロードチェイサーをスピンターンさせ、ティンセルシティ・バンク方面に向けて急加速させた。さまざまな憶測(おくそく)がふたりの頭を支配する——。
「見なよレオン！　昨日の事件(ヤマ)は何かオツリがくるような事件(ヤマ)だと思ってたんだ——」
「まあな。しっかし、いったい何がおっぱじまったんだろうな？　これじゃ、ふり回されっぱなしだぜ！」
「プロントンの一件についても、メイスンの女をとっつかまえる以外に、これといった手がかりがない以上、怪しい動きをするやつを手あたりしだいにつぶすしかないかもネ」
「くそっ！　マックのやつはどこへ消えちまったんだ？　——デーリー、もしものときは、カミさんのほう、頼んだぜ！」

ギクリとしたデーリーが、オーバーぎみに手を振りながら言った。
「じょ、冗談でしょう!? ――レオンやってよ! あんたが上司でしょうが――」
片手でくび筋をかきながら、レオンがふてくされて言った。
「あ――あっ、デエきれえなんだよ、そうゆうのって――クソーッ! なんだかムシャクシャしてきたぜ!」
ロードチェイサーは、レオンのいらだちを象徴するようにパトライトを点滅させ、緊急サイレンを発しながら猛スピードで走る。国際A級ライセンス保持者のレオンの、みごとなロードゴーイングだ。

CTM八号線と三号線の合流する連絡地点構内では、依然としてGX―2とマギーメイが激しく戦っていた。戦いなれているとはいえ、マギーメイはしょせんBU―四四C型タイプ、現時点では最新鋭最強の新型ブーマであるGX―2の前では、劣勢に回らざるをえなかった。
しだいに傷つき、各部に深い痛手を負ったマギーメイは、体内の有機モーターのポテンシャルを限界までひき上げ、底知れぬ強大なパワーを持つGX―2との相討ちを狙って、最後の攻撃に出ようとしていた。

「ドウシタ、テハダシツクシタノカ――マギーメイ？」
「――!?　どうして知った、俺の名を？」
「オシエテクレタノダヨ――マザーガナ！」
「ばかなことを！　おまえを作ったのはGENOM、我々の支配者だ」
「ソンナコトハシラン。マザーガスベテダ」
「教えてくれ、だれだ？　そいつは――」
「ダメダ、イマトナッテハモウオソイ！」
じりじりと構内の壁ぎわにマギーメイを追いつめるGX―2。そのとき、構内に走りくるモトスレイヴのプリスにGX―2が気づく。同時にプリスもマギーメイとGX―2の二体のブーマを発見し、モトスレイヴから飛び降りざま叫んだ。
「モトロイド、モード!!　インターセプトだ！」
モトスレイヴは、自走しながらバウンドすると、ロボット形態に変化し、迎撃態勢をとる。うす暗い構内を見るプリス。
〝なんだこいつら？　何してやがんだ――〟
プリスは近くの支柱を盾にマギーメイとGX―2を見定めながら、すばやく腰に隠し持つスクランブルショット（銃）を組み上げていく。モトロイドとGX―2の互いの視認行

為が、数秒間の沈黙を作った。GX—2に追いつめられていたマギーメイは、GX—2がモトロイドに気をとられている一瞬のすきに、自分の体内から通路上にマイクロデータユニットを吐き出し、GX—2との融合をはかろうと最後のかけに出た。すなわち、物質融合機能を利用して、みずからの自爆装置により、相討ちに持ちこもうという魂胆だ。

GX—2に体あたりするマギーメイ。回避が遅れたGX—2の右腕にとりつき、融合を始めた。もがくGX—2。自爆装置を作動させたマギーメイ。カウントダウンが始まる。早い。だが、GX—2が、マギーメイと融合した腕を、左腕を一閃させて切り離す。あたりにものすごい光量の閃光が走り、ついで轟音とともに、いき場のない爆風が構内を吹き荒れる。

あたり一帯が、爆発による噴煙で見えなくなった。しばらくして薄れいく煙。暗いCTM通路に、モトロイドとともに吹き飛ばされ、軽い脳震盪を起こしてうずくまるプリスは、しびれる頭をかかえてフラフラと立ち上がった。銃はその手に依然として握られていた。

〝なんだってんだ、バキャローッ！　おお、痛っ——〟

マギーメイとGX—2の確執が理解できていないプリスが唸った。そんな彼女が最初に見たのは、無残な姿と化したモトロイドだ。爆発の影響をもろに受けて、それでもなお、

駆け戻ろうとしたプリスの前に、強靭なボディを誇る片腕となった殺人用サイバードロイド、GX—2が立ちはだかった。痛む身体にムチ打って、横に跳びざま、GX—2に向けて三五七マグナムKTW（真鍮弾頭にテフロン加工した徹甲弾）をたてつづけに三発撃ち込む。銃口発射炎の中で、数秒、後退しながら異様にカン高い叫び声を発して、その場に崩れるGX—2。ほっとしたプリス。

だが、それもつかの間、GX—2は口中から撃ち込まれたKTWすべてを吐き出すと、再び立ち上がった。カッと目を見開き、驚愕の表情になるプリス。そんなプリスがひるんでいる間に、GX—2が巨体に似あわぬスピードで接近し、彼女の手からスクランブルショットを払い落とし、何か言いたげに迫り寄ってきた。しびれる手をかばいながら窮地に立つプリスに、GX—2が問いかけた。

「オマエハ、ナイトセイバーズノナカマダナ？」

呆然とするプリス。息が荒くなる——。

「なぜ、おまえがナイトセイバーズのことを？」

「ドウヤラズボシノヨウダナ——オマエタチノリーダー、シリアハ、ナゼ、ナイトセイバーズヲケッセイシタノダ、ソノワケガシリタイ」

「知らねえなァ——ハァハァ、そんなに知りたきゃ、このあたしを殺ってからにしな

を発見したのだ。理解に苦しむむごたらしい光景だった。

ふたりがうす暗い構内を調査しだしたころ、プリスが脱け出た別の連絡口の前に、メイスンとローウィが乗るベントレーが停車していた。後部座席のメイスンはタバコをくゆらせていた。

「どうやら、マギーメイも殺られたようね――」

ローウィは、マギーメイが構内に残したデータユニットから発する特殊な超音波を感知して、メイスンに言った。

「別口から、ADポリスが駆けつけているようだ。うまく回収できるか？」

「造作もないことよ――」

「――んっ！」

ローウィがニヤリと笑う。メイスンは軽く頷き、目でいけと指図した。車から出るローウィ。連絡口を閉鎖しているバリケードを乗り越え、内部に侵入していく。

構内ではマクガフィーとチャップマンが、うす暗い中を携行灯を頼りに捜索をつづけていた。八号線通路上を歩いていたマクガフィーが、マギーメイが残したデータユニットに気づき拾い上げ、マーコスの死体を調査していたチャップマンに知らせる。ふたりは奇妙な形のデータユニットに首をかしげながら話す。

「――なんだろうな？　署に持ち返ったほうがいいな――」

マクガフィーが言った。

「さあな、あいつにしたってこの街のやつじゃなさそうだし、いったい何がここであったんだ？　サッパリだぜ！」

チャップマンがマーコスの死体をさして言った。その手にマーコスの運転免許証（ライセンスカード）を握っていた。

「けったくその悪いところだぜ！　昨日（きのう）の今日だというのに、いったい何がどうなっちまってるんだ――」

マクガフィーがペッとつばを吐き捨てた。

「狂ってやがんのよ、この街は！　俺たちを食わしてくれるくれえだからよ――」

「まあな――ん!?」

ふたりが会話中、突然ローウィがふたりの横に出現した。ギョッとして、マグナムハンドキャノンをかまえるふたり。破壊しつくされた構内に場違いなローウィは、妖艶（ようえん）な微笑を浮かべた唇（くちびる）を開き、ふたりに向かってささやくように言った。

「あーら、ごあいさつね。ヤボなものは引っこめてちょうだいな！」

キョトンとした表情のマクガフィーとチャップマン。

「——こ、こんなところで何してる？　何者だ、おまえ？」
困惑に満ちた表情のマクガフィーが、強い口調で訊いた。
「ホホホッ——どうでもいいじゃないの、そんなこと。さっ、それは、私の探し物ヨ、返してちょうだいな、お兄さん——！」
「ふ、ふざけるなこのアマ！」
チャップマンがハンドキャノンの安全装置をはずす。その瞬間、恐るべき速さでアクションを起こすローウィ。マクガフィーとチャップマンは発砲することもできず、一瞬のうちに惨殺され、その場に倒れた。ローウィは、マクガフィーの手からマギーメイの残したデータユニットを回収する。データユニットの形状を確かめると、やおら、ジャケットのボタンをはずし、白いニットをたくし上げた。ブラジャーはしていなかった。
完璧な形状に盛り上がりを見せる、スレンダーなプロポーションとバランスがとれた乳房が露出する。そして奇怪な光景が始まった。乳房と乳房の間が突然、パックリと縦に割れ、女性の秘部の形をして、生物的にうごめき始めたのだ。ローウィはそこに手を挿入するとみずからのデータユニットを引き出し、かわりにマギーメイのそれを埋め込む。埋め込むことによってローウィは理解するのだ。GX—2とマギーメイの戦いの様子を。そして、彼女は、同時に、モトスレイヴとプリスの存在を知ることになった。

〝この女がナイトセイバーズのひとりか!?〟
ローウィが薄情そうな微笑を浮かべた――。そして、再び衣服を正すと、構内からメイスンのもとへ引き返そうとその場を立ち去る。あたりの様子をうかがいながら連絡口から出て、すばやくベントレーに戻るローウィ。彼女が席についたと同時に、車がスタートした。
「何かわかったか?」
メイスンが訊いた。
「どうやら、GX―2はこの地球を支配しようと企む、妄想狂のだれかさんに操られているみたいよ――GX―2はそいつを〝マザー〟と呼んでるわ――」
「マザー?」
「そう、やがて自分たちの時代がくると信じているみたい」
〝自分たち? ブーマの時代のことか?〟
メイスンはGENOMのトップシークレット、O・M・C・Sを連想した――。
〝ブーマの解放が究極の狙いか? それとも別に何か? いずれにしても、俺と同じことを考えるやつがいる――!〟
メイスンは〝マザー〟に興味を抱いた。手を組むことができたら一挙に世界を手に入れ

ることができるかもしれないと考えた。〝マザー〟の一連のやり口から見て、この電脳化された世界を熟知し、GENOMの、そして、警察の無能さを嘲笑い、楽しんでいるようにも思える。自分の野望が、早期に具現化するかもしれないのだ。いつまでも、GENOMの飼い犬でいるつもりはメイスンにはない。メイスンとは、そういう男だった。

「どうしたの、メイスン？」

「んっ？　――いや、なんでもない。それで？」

怪訝そうなローウィに、適当にとりつくろったメイスン。ローウィがつづけた。

「それで、構内の様子から見ると、GX―2は、たぶんCTM三号線を伝って消えたみたい――」

「ほう、他には？」

「ライダースーツ姿の若い女が、なぜか現場にいあわせたみたい。そして、精度の高そうなロボット――いまじゃ、こなごなのスクラップと化しているけど――」

「ロボット？　――で、そいつの形状は？」

「モーターサイクルからチェンジした人型の――」

「ナイトセイバーズか！」

眉間に皺を寄せて、メイスンが厳しい口調で唸るように言い放った。

「よし、社に戻ったら、そいつのスチールをプットアウトしておけ——！」

「こだわるのね、メイスン!? ——たかが人間の小娘じゃないの。私はまた——」

「やつらをあなどるな！　ローウィ、なめてかかるとやっかいなことになるぞ——！」

メイスンの口調が厳しさを増した。

「やめてよ、メイスン！　GX—2の次に始末してあげるわよ、あなたがご執心の、そのナイトセイバーズさんを——!!」

たかをくくって、ローウィが冷淡な微笑を浮かべた。

「もういい！」

ローウィとの会話にわずらわしさを感じたメイスンが言い切った。そして彼は、黙々とベントレーを運転する男に向かって命令した。

「N・D・Pへ向かえ！」

「ハッ！　わかりました」

運転手は、ベントレーをチェッカーストリートから右折させると、N・D・P方面に向けた。メイスンが何を考えているのか判然としないまま、ローウィが尋ねる。

「どうしたというの、急に？　N・D・Pに何があるというの？」

「まあ、俺にまかせておけ。だてにGENOMに仕えているわけじゃない——」

「あらそっ！　長生きしてる分だけおりこうさんてわけネ、メイスン!?　――なら、まかせたわ」

メイスンたちがN・D・Pに向かっている途中の午後五時二五分ごろ、遅ればせながら、マクガフィーとチャップマンが横たわる事件現場に、レオンとデーリーがいた。

十数名のADポリス隊員が構内に入り、あたりを警戒しながら捜索している。そのうちの処理班が、無残な死にざまの同僚、マクガフィーとチャップマン、そして、マーコスの死体をタンカーで運び出そうとしている中で、レオンとデーリーが、事の顛末について話しあっている。

「――じゃ、そういうことで、デーリー、本部への連絡はまかせたぜ！」

「いいけど――でも、レオン！　こいつは総がかりじゃないとヤバイんじゃないの？」

「たぶんな！　だが、もう許しちゃおけネェ――」

キッと唇を結んだレオンが、つづける。

「――どんな野郎か知らネェが、街中に現れちゃいねえ以上、まだCTMラインをさまよっているに違いネェ。たぶん、プロントンも、ここも、同じやつのしわざだ！　昨日のやつもグルだったのさ。――それに、アレさ！」

レオンがモトロイドの残骸(ざんがい)を指さした。
「――んっ?」
理解できないデーリーがキョトンとする。
「さっぱりわからネェが、例のナイトセイバーズもこの件にチョッカイ出しているぜ」
「へえ、あれがネェ――しかし、なぜわかる?」
「言ったろ、俺はナイトセイバーズのファンだって、さっ、俺ァいくぜ、三号線のどこかに犯人(ホシ)がきっと現れるに違いネェからな――」
「むだ骨だったら、どうするのさ?」
「そんときはそんときさ! こうしてじっとしてても、しようがあんメェ――」
レオンはデーリーを残して、構内連絡口近くの路上に止めてあるロードチェイサー一三号車へと向かって、階段を駆け上っていった。

4

フィットネス・クラブ「FIBIY」のインストラクター専用控室のロッカールームで、同僚たちと談笑するリンナ。隣接するこぎれいなシャワールームに向かうために、汗びっしょりのレオタードを脱ぎ捨てた。そして、素裸(すっぱだか)でシャワールームに入り、シャワーを浴

びながら同僚たちと大声で談笑する——。
「リンナーっ！　あんたサァ、今日は早じまいだって言ってたけど、何かあるの？」
うぶな顔をしているが、そうとうなかまとのエレーンが、となりのシャワールームから訊いてきた。
「ああ、あれっ？　予定が少し狂ったの——」
リンナは、ボディブラシで身体をこすりながら答えた。すると、今度は、反対側からバネッサの声がふたりの会話に入ってきた。
「リンナったら、遊びが過ぎるんじゃないの？　仕事中も、ひっきりなしに電話が入るじゃない！　あれ、みんな彼氏からの呼び出しでしょ？」
「そうそう、うまくやってんのよ、リンナは！」
エレーンが、ひやかしぎみにつづく。
「——んなんじゃないわよ。いやーネ、ふたりとも。自分のことは棚上げしちゃって——」
「じゃ、何よ？　言っちゃいなさいよ！」
バネッサが言った。
「いいじゃない、人のことなんて。あなたたちこそ、クラブひけたあとで、ディスコ通

いだって有名ヨ！」

リンナが逆襲（ぎゃくしゅう）した。

「そっ！　通いづめだけど――いい男ってなかなかいなくってネ」

エレーンがそう言うと、バネッサが反論する。

「とーんでもない、この間、私、見ちゃったもーん！」

「えっ！　なになに、教えてバネッサ、どんな子だった？」

エレーンが話題を自分にふられてあわてた。

「あっ、きたネェの！　バネッサこそ、ヤバイことしてるくせに、リンナにバラしちゃうからネ、もう！」

とにかくかしましいリンナたちだった。やがて、リンナはシャワールームから出て、ロッカールームで衣装をつけ、あっさりとしたメイク・アップで顔をつくろうと、同僚に別れを告げ、控室を出た。

「ＦＩＢＩＹ」の出入口前からエレベーターに乗り込む。腕時計をチラッと見ると、針は午後五時三〇分をさしていた。五階からエレベーターはすぐ一階に到達する。リンナはプリスと、一階のロビーでその時間に待ちあわせの約束をしていたのだ。だが、あたりを見回せどプリスが見あたらない。一五分ほど、いらいらして待つが、プリスはいっこうに

くるけはいがない。リンナは、しかたなく公衆電話に向かった。バッグからクレジットカードをとり出し、電話の挿入口に入れ、シリアをコールした。

「——ハイ、こちら——」

「あっ、シリア？　リンナよ。プリスのやつ、五時半にロビーって自分から言ったくせに、どこにも見あたんないんだから——ネェ、そっちに何か連絡入ってなーい？」

「ないわよ。ネネはもう、こっちにきているけど——飛び込みの仕事でしょ、もう大わらわで、いま準備中なのよ、早くきてちょうだい！」

「そんなに急な仕事なの？　——でっ、どこへ？」

「詳しくはあとで、六時ジャストにはここを出るわよ！」

「じゃ、わたしもう少しプリスを待ってみるから、ここで拾えるかなァ？　——それまでには、何か連絡くらいあるかもしれないし——」

「まいったわネ、プリスにも。キャッチフォンは試したの？」

「やったわよ、もう！　反応(はんのう)ナシよ」

リンナがいらだちを込めて言った。

「まいったわネ、プリスにも——いいわ、六時半ごろには、そっちにいけると思うわ！　プリスが現れたら連絡して！」

「お願い！　待ってるからね——じゃ、あとで！」

リンナは電話を切ると、プリスの姿を求めてキョロキョロとロビーの中をうろつく。やがて、ソファーに腰をおろし、だんだんとプリスの身を心配しだすリンナ。プリスに何があったのか知るよしもないリンナだった。

「SILKY DOLL」のビル地階にあるナイトセイバーズの秘密のアジトで、今夜の出動準備をほぼ終えつつあるシリアとネネ、そして、マッキー。依然として、リンナからプリスが現れたという連絡はない。武器やパーツのチェックを完了させると、マッキーがコンピュータルームに入り、レシーバーを頭につけ、警察無線盗聴用デッキのスイッチを入れた。

シリアとネネは、別室で熱いコーヒーをいれながら、いっときくつろぐ。内心はイライラしているが、優雅なものごしをくずさないシリアが、一服するとマッキーのところへ歩み寄る。ネネも、プリスの行方を心配して落ち着きがない。プリスの占める役割は大きい。彼女の欠落は、危険をなりわいとするナイトセイバーズの浮沈にかかわる問題なのだ。

「どうなったの、マッキー？　その後のCTMのほうは！」

「連中、なぜかわかんないけど、いつもの連絡コードをランダムにチェンジするらしく、

まいってるんだよ、姉さん。何があったのかなァ？」
レシーバーをはずしながら、マッキーが困惑した顔をシリアに見せた。考え込むシリア。
「チェンジ？　——それで、解読は可能なの？」
「当然。でも追っかけるのがたいへんな作業！　それに連中にしてはわりとコッた暗号を使ってるから——」
「そう——で、わかったことはないの？」
「ADポリスが二名殉死したことと、身元不明の若い男の死体が現場から見つかって、その割り出しにヤッキになってるみたい——運転免許証を持ってたらしいんだけど、闇のブツだったらしい——」
「ほかには？」
「あっ、ちょっと待って——」
マッキーは再びレシーバーをつける。レオンの声が聞こえてきた。
「——ステーションE—一へ！　こちら一三区のADP一三！　——BU—五五Cタイプおよび UKMの検証結果を報告されたし、なお、ADP一三はWSWに向けてフォーメーションK—九に入っている。URについては——」
マッキーが、盗聴用デッキ脇のモニター画面に次々と映し出される暗号解読された文字

をのぞき込むようにして見る。そこには、めったにお目にかかれないBU—五五C型特殊戦闘ブーマおよび未確認ロボットの文字が現れていた。
「特殊なタイプのブーマとロボットだって、姉さん！」
「まさか、モトロイドのことじゃ——」
シリアが不安と戦慄に満ちた声を発した。
「プリスがやられるわけないよ、姉さん！」
マッキーがシリアの言葉を否定するように言った。
「——いいえ、充分考えられるわ。プリスはレーヴィン博士のところへ寄って、モトスレイヴを回収したはず、そして、チェッカー・ストリートをもしも通ったとしたら——」
いつの間にか背後にネネがいて、言葉をはさむ。
「そうよネェ。仕事の連絡が入ったら、一時間ごとに定期連絡を入れるって決まっているのに——心配だなァ」
「これ以上は調べようがないし、どうする、姉さん？」
マッキーが心配そうな声で言う。
「まっ、プリスのことに触れたってわけじゃなし、こうしていてもしかたないわ。——さっ、マッキー、出動よ！　リンナを拾ってから、チャイナタウンを抜けて例の道を

ね!」

「う、うん」

マッキーは席を立ち出動ルームへと向かった。つづくシリアとネネ。ネネが不安を口に出す。

「プリス、だいじょうぶかなァ——?」

「だいじょうぶよ。プリスに限ってヘマをやるような娘じゃないわ。きっと、そのうち、元気に出てくるわよ」

シリアがニッコリ笑いながらネネに言った。何事にも動揺は見せない。それがナイトセイバーズのリーダーとしての信条だった——。

出動ルームは階上にあった。つまり、地下一階がパーキング、二階が出動ルーム、そして、三階にあるのがメンテナンスおよび情報集積ルームというわけだ。巨大な貨物用エレベーターのような昇降機の上に乗った大型のトランスポーター・コマンドキャリーの運転席には、早くもマッキーが乗り込んでいた。

マッキーの操作で、後部ハッチが開き、メンテナンスルームを兼ねたコマンドキャリー後部へシリアとネネが入る。ハッチが閉じると、昇降機が作動し、コマンドキャリーがパーキングへと上昇していく。床が左右に大きくスライドして開いているパーキングへ、巨

体を現すコマンドキャリー。それは、この時代の大型普通トラックに似せてカムフラージュされていた。パーキングの床面とリフトが合致(がっち)した瞬間、地下パーキングから外に向けて、コマンドキャリーが発進した。巨体にしては驚くべき速さだった。
一方、連絡のないプリスを待ちくたびれて、ポルシェビル前を走るパーク・ストリートの歩道に、いらいらしながらリンナが立っていた。遠くに大型のトランスポーターを認め、手を振る。コマンドキャリーはリンナの手前で停車した。運転席からマッキーが顔を出した。
「プリスは？」
リンナがダメダといったしぐさをする。
「しかたないから乗んなよ！」
「でもーっ、――いったいプリス、どうしちゃったんだろう？」
ブツブツつぶやきながら、コマンドキャリーの後部ハッチから内部に入るリンナだった。
リンナが搭乗(とうじょう)すると、コマンドキャリーはすぐ発車した。N・D・Pへ向けて仕事をしにいくのだ。後部には、依然(いぜん)として消息不明のプリスを思い心配顔のリンナとネネがいた。
シリアは、ふだんとあまり変わらぬ様子だ。
時刻は午後六時四〇分。N・D・Pへは七時半までに入らねばならない。シリアの合図(あいず)

で、洋服を脱ぎ、下着を脱ぎ去って、バトルランジェリー、ハードスーツと次々に装着していく三人。内部には、ナイトセイバーズ専用のさまざまなパーツ類が、床に壁に天井に、整然と用意されてあった。

各自が自分のハードスーツに合った仕事の道具をチョイスして、手際よく身につけていく。その合い間に、N・D・Pの仕事の手順に関して説明するシリア。いまひとつ気が乗らない感じのリンナとネネだった。一体のハードスーツが放置されてあるのが問題だった。プリスが欠けているのだ。

「いいこと、ふたりともよく聞いてネ。まっ、プリスのことは気にかかるけど、仕事は仕事よ！　何があろうと、けじめだけはつけなきゃならないの、わかるでしょ！」

シリアが、リーダーとして厳しい口調で告げた。

「でもーっ。いままで四人でうまくやってきたのに、だいじょうぶかなァ？　今度の仕事たった三人でなんて、なんだかわかんないことがやたら多いみたいだし――」

臆病者のネネが、不安げにつぶやく。

「いいじゃない、しょうがないよ、こんなときもあるサ！　頑張ろうよ、ネネ。それに、プリスだって、何かあったたって決まったわけじゃないし――」

リンナがネネを勇気づけた。

「ネネ、ダメよ、気落ちしちゃ、今度の仕事は報酬の額からして並みじゃないのよ――それだけに、キツいかもしれないけど――」

「う、うん――」

シリアの言葉にネネが、現金にも目を輝かせる。

「えっ、あたし聞いてないヨ、いくらなの？　いったい！」

「手付で、半金の三〇〇〇万、残りは仕事が成功してからだって――いまさらだけど、額が額だけに、大仕事になりそうね――」

「フヘェーッ、すごいじゃん。ネネ、絶対に頑張っちゃう！」

ハツラツとした表情になるネネ。

「わたしだって、しっかりモノにしてみせるわヨ！」

リンナもつづいて気あいが入った言葉を吐く。

「ふたりとも、能天気でいいわね。その現金さがパワーの源かもね。さっ、調子いいのもいいけれど、準備だけはしっかりやっておいてね！」

シリアが微笑を見せて言った。

ハードスーツの装着を完了したころには、仕事に対する情熱をとり戻したリンナとネネが、冗談を言いあいながら、とりとめのない世間話に花を咲かせていた。シリアが、そん

なふたりを見つめながら、回想にひたる。シリアの頭の中には、過去の想い出が次々と浮かんでは消えてゆく。ゆっくりと目を閉じるシリア――。

5

ティンセル・シティ郊外の瀟洒な家の中だった。一二歳になったばかりのシリアと、五歳のマッキーがリビングルームに寂しげにたたずんでいる。夜はふけ、時刻は二時を回っていた。ぐずるマッキーをあやしていたシリアが、ビジョン・フォンをかける。研究所に入りびたっている、父親のスティングレイ博士に連絡をとろうというのだ。やがて、電話が通じ、モニター画面に映し出されるアシスタント研究員ソノダが出る。

「ハイッ！　ウィズ・ラボラトリーです――」

「こんばんは――」

「あっ――こんばんは、どうしたんです？　ちょっと待ってくださいね！　――」

ソノダはふり向きざまに、スティングレイ博士に声をかけた。

「――所長！　お嬢さんからです――」

仕事を中断して、ソノダと入れかわりに画面に入ってくるスティングレイ博士。

「どうしたシリア？　――まだ休んでいないのかい？　もう夜も遅いぞ――それに、マ

ツキーまでも――」

スティングレイ博士は、シリアの背後で寂しげな顔をしているマッキーを認めて、優しい声でさとすように言った。シリアはコックリと頷き――、

「ごめんなさい――マッキーが寂しがって、なかなか眠ってくれないの。――お父さん、もう一週間になるわ、お仕事、いつになったら終わるの？」

「シリアがお父さんが、いま、大事な研究をしていることは前に言ったね――」

「ハイッ――」

シリアが力なく答えた。

「もう少しの辛抱だ――そうしたら、皆でどこかへ旅行しよう。きっと、楽しい旅になるぞ――」

スティングレイ博士が笑顔で言った。彼の背後には、研究開発ルームの一部が見える。忙しそうに動き回る研究所員たちの複雑そうなコンピュータ操作のもとで、中央に設置された初期型ブーマの試作体が、性能チェックを受けていた。

むき出しの人造眼をギョロっと見開き、胸鎖乳突筋を震わせて頭部をビクッと持ち上げるブーマ。研究員のひとり、トニーが、シリアと会話中のスティングレイ博士に声をかけてきた。

「お話し中すみません、所長！　GS—〇五に第二、第三バッテリーを投入します——」
スティングレイ博士が、その声にふり向きながら言う。
「わかった」
そして、向き直ってシリアに告げた。
「シリア——もう少しの辛抱だ。時間がとれしだい家に帰るから、マッキーをよろしく頼む——」
シリアがすねたような表情をする。ふたりの会話中、研究開発ルームでは、ブーマの手足の制動テストが行われていた。ブーマのまだ本体と接合されていない腕が、足が非人間的な動きをくり返す。再びトニーが呼びかける声に、スティングレイ博士が会話を中断して答える。
「——出力一〇分の一秒単位でチェック！　——動力投入レベル八・〇三まで上げろ——現段階では、合成樹脂で作った模造品でしかないが、可能性はこれで開ける——」
スティングレイ博士がシリアのほうをふり返り、すまなそうな顔で言う。
「すまんシリア、ごらんのとおりだ——さっ、いい子だ。一段落したら連絡を入れる——早く眠りなさい」

父親の仕事を理解できるシリアだった。電話を切ると、マッキーを連れて寝室に向かい、マッキーをなだめながら、ベッドに寝かしつけるシリア。ここまでが最初に浮かんだ思い出のシーンだった。マルチビジョンを瞬時に切りかえていくように、断片的な光景が流れ、一条の光となって、シリアの頭の中をめぐる。その光がやがて急速な凝縮を見せ、タイムワープして次のシーンとなる。

けたたましいサイレンを鳴らしながら、猛スピードで夜中のフリーウェイを走る数台の消防車。猛火に包まれているウィズ・ラボラトリーに向かっているのだ。前方のウィズ・ラボラトリーから、大爆発が起きる。消防車は門前に急停車し、つづいて数台のパトカーがやってきた。パトカーの一台から降り立つシリア。スティングレイ博士の身を案じて、声もなく、愕然とその場に立ちつくしている。火勢の照り返しを受けながら、不安と悲しみに懸命に堪えていた。やがてくる父の死という悲報を予感しながら――。

ウィズ・ラボラトリーの火災から数週間過ぎたある日、突発的に起こった悲しい出来事に、悲嘆にくれるシリアがいた。彼女はまぶしい太陽の光が射し込む昼下がりの窓辺で、机に伏せていた。そこに、幼いマッキーが手に郵便小包を持って近づく。

「お姉ちゃん――こんなものが届いたよ――」

黙ってその小包を受けとるシリア。小包をあけると、中には教材用と書かれたデータユ

ニットが入っていた。

「データユニット――いったいだれが？」

シリアは、スティングレイ博士が生前使用していた書斎に入り、マイクロコンピュータの前にすわる。そして、一二歳の子供とは思えない手際のよさで、キーボードを操作し、データユニットをコンピュータに組み込む。頭にヘッドフォン型のシンクロナイザーをつけ、モニター画面にディスプレィされる難解きわまる文字や記号、そして数字を理解していく。

データユニットの内容は、高度な最先端宇宙工学に関するものだった。たぶん、スティングレイ博士に送られてきたものであろうとシリアは考えた。だが、アクセスしているうちに突如、画面が変化し、「FOR SYLIA ONLY」の文字が現れた。

「シリアだけに――？」

怪訝な表情を浮かべ、すばやい指の動きでキーをたたくシリア。父親のメッセージがデータユニットに隠されていたのだ。たたくほどに、シンクロナイザーを通し、モニター画面の幾何学的な光の動きとともに、シリアの頭の中に膨大な量のスティングレイ博士からのメッセージが流れ込んできた。金縛りにあったかのように、シリアが幼い肉体を硬直させる。自分が呼吸しているのも忘れるほどに、シリアはハイスピードで展開されるそのメ

ッセージに、精神も肉体も翻弄された——。
——病気で小さなベッドに苦しげに横たわるシリア。
——四歳のときだ。
——懸命にシリアを助けようと手術を施すスティングレイ。
——シリアの横に見知らぬ幼い男の子が眠る。
——ふたりとも手術台の上にいた——。
——やがて、目をあけるシリア。
——喜びの表情を浮かべるスティングレイ。
——美しい母親とシリア、そして赤子のマッキー。
——幸せな家庭に満悦の表情を浮かべたスティングレイ。
——母親と父親のいさかい、つづく別離——失意の日々を送るスティングレイ。
——自己嫌悪から酒におぼれ——悄然としたスティングレイに声をかけるひとりの男。
——男のはからいで、ウィズ・ラボラトリーの所長の地位を得るスティングレイ。
——機械生命体の研究開発に専念する日々——。
——プロトタイプGS—〇五型の完成。
——進化発展していく機械生命体のニュータイプ。

——O・M・C・S（オーバーマインド・コントロールシステム）の解説。

——独特な理論の生物学的洗脳素子（バイオ・ブレイン・ウオッシング・ビット）の解説。

——研究開発に没頭（ぼっとう）するスティングレイの研究室。

——そのドアを開いて入口に立つメイスンと名（な）のる男。

——黒い手袋をして銃をかまえる。

——驚くスティングレイ。

——非情（ひじょう）にも発砲するメイスン。

——O・M・C・S理論が入ったデータディスクを奪いとり、研究室に放火（ほうか）して出ていくメイスン。

——瀕死（ひんし）の重傷を負ったスティングレイ。

——机上のコンピュータを必死で操作する。

——シリアとマッキーに別れを告げる。

——GENOMの陰謀（いんぼう）を説きながら——。

〝たぶん、お父さんは都市内電送通信宅配システム（テレターミナル・ダイレクトメール）を利用して、わたしにそのデータユニットを送ってきたに違いない。そして、憎いメイスンと、彼を操（あやつ）るGENOMからわたしとマッキーを守るために、知恵（ちえ）を授（さず）けてくれたのだ、自分の死を予感して——！〟

シリアはめくるめく思い出から解放された。いまはただ父親の意志を継いで、人類存亡の危機を招くブーマと、ブーマを産み出すGENOMに立ち向かうナイトセイバーズとして生きる自分を誇りに思った。シリアにできることはいまはそれしかない。GENOMはあまりにも巨大になり、彼らの産み出すブーマが世に災厄をまき散らしていた。やるせない徒労感がときとして頭をもたげ、シリアを深く混迷させるのだ——。

「——どうかして、シリア？」

思い出からさめ、呆然とした表情を浮かべていたシリアに、心配そうなネネが声をかけた。

「どこか調子でも悪いの？」

リンナがつづけた。

「ううん、なんでもないのよ——気にしないで、チョット昔を思い出していただけ！」

シリアが平素の明るい調子をとり戻すと、リンナとネネは安心した。

N・D・Pに向けてコマンドキャリーが疾走しているころ、CTM三号線と並行して走るコーランド・ストリートを、プリスが奪ったスポーツバイクで、猛スピードで走っていた。彼女は、ひたすら、GX—2が出現するであろう西南西方面をめざして走り、復讐の

念に燃えていた。
プリス同様、一三区の事件現場からN・D・Pに向かっていたメイスンとローウィの乗るベントレーが、フリーウェイを猛スピードで走り、コーランド・ストリートの合流地点を目前としていた。
「二五区で降りろ。出たらコーランド・ストリートを下るんだ！」
メイスンが運転手に命令した。メイスンの隣にすわるローウィは、これから先で何が起こるのかまったく関心がないといった表情で、ウィンドー越しに流れゆく景色に視線を向けていた——。

第5章　エレミア

1

加速用ノズルを噴射させ、CTM三号線通路上を、西南西方面へと猛スピードで滑空するGX―2。やがて、彼の前方に光の小さな点が見え、三号線が地上に出ることがわかる。その光点がしだいに大きさを増し、GX―2の視界いっぱいとなり、その瞬間、超低空飛行をつづけてきたGX―2は空中に躍り出た。GX―2の眼前には、夕闇が迫るティンセル・シティ郊外の景色が広がった。

GX―2のいる場所から五キロほど先には、広大な敷地を占有するN・D・Pの威容を誇るビルが確認できた。そのときだ、GX―2の頭上にローターの回転音も高く、陸軍所属の最新鋭装甲戦闘ヘリ、AHX―三六が三機出現した。それを視認したGX―2の目が突如反転し、真紅に輝きだすと、数本のセンサーが眼孔からはえ出てきて、AHX―三六の動勢に微妙に反応しながらうごめく――。

複座式のAHX—三六の一号機に搭乗していたのは、マードックと、彼の部下でパイロットのコードウェルだ。CTM三号線通路のトンネルから猛スピードで飛び出してきたGX—2を捕捉し、攻撃態勢に入ろうとしていた。同様にワイルドキャットと呼ばれる二号機、スネークなる三号機が、マードックの指示を待って、近くの空中に待機している——。

「——ブーマの速度は時速二八三キロ。AGM、スタンバイOK!」

コードウェルが獲物を前にして嬉々とした声で言った。マードックが頷き、ヘッドカムを通して部下に呼ぶ。

「ワイルドキャット、スネーク、そっちはどうか?」

「イエッサーッ!」

「とっくにOKですサ、隊長!」

ワイルドキャットとスネークから、元気のよい返答が返ってきた。

「よし! いくぞ、野郎ども——ヤレ!!」

発射される各二、計六発の空対地レーザー誘導式ミサイル。GX—2に吸い込まれるように向かっていく。地上に降り立ったGX—2は、正確に迫りくるミサイルに対抗して、いつの間にか両肩に露出したレーザー銃を向ける。数秒の間に、正確なレーザーを照射。迎撃されたAGM。中空ですさまじい爆発音を上げて、強烈な閃光であたり一帯を照らし

出し、瞬時に消滅する。

ＡＨＸ―三六対ＧＸ―2の戦闘現場から五キロほど離れたコーランド・ストリート上で、前方に起こった爆発光を見て、スポーツバイクを急停車させるプリス。上下ラインの車の群も動揺して止まった。多機能腕時計が壊れてしまったプリスが、ハイウェイ電話に近づき、バイクを降りて、シリアに連絡をとろうと試みる。が、すでに出動してしまったシリアたちはつかまらない。時刻は六時五五分だ。シリアとの約束の時間は、とっくに過ぎてしまっていた。そして、プリスは今夜のナイトセイバーズの仕事内容を理解していなかった――。

〝チッ！　かっとして、約束をスッポかしちまった〟

いらだちの表情で舌を打ち、シリアとリンナ、そして、ネネの顔を一瞬思い浮かべた。

〝まっ、いいか！　やつが先だ。それから連絡とればいい――〟

プリスは再びバイクに飛び乗った。車からはい出て、爆発光の方角を見つめ騒ぐ群衆をクラクションで蹴散らすプリス、爆発現場に向けて渋帯の中をのろのろと走りだした。

プリスが人ゴミの中から飛び出したくていらいら走っているころ、同じコーランド・ストリート上には、メイスンとローウィのベントレーが渋滞にハマっていた。

「何か始まっているみたいだな？」
メイスンが言った。
「たぶん、アーミーの連中のしわざよ――メイスン！」
「アーミーだと？　――なぜ、おまえにわかる？」
メイスンが、ローウィを険しい表情で見つめる。ローウィは平然として話をつづける。
「マギーメイのデータユニットに記録されているわ――マードックという戦争屋が、会長の指示で動いているって――」
「ばかなことを！　マギーメイはわたしの手の者だ――それが、どうして会長の――」
メイスンの表情が当惑に歪んだ。ローウィがニヤリとほほえむ――そして、意外な事実を暴露しだした。
「案外と甘い面もあるのね、メイスン！　――GENOMがなぜ、これほどまでになったのか、あなたがいちばんよく知ってるはずじゃないの？　――会長の頭の中にあるのは、単にGX―2をどうにかするだけではないわ――」
「ふっ！　と、いうことは、俺の企みもとっくに承知という訳か？　――マギーメイのやつからなにもかも――」
メイスンとローウィの話を聞いていた運転手の目が、人知れず異様に赤く輝きを帯びて

きた。だが、ベントレーの運転席からは、まだ、動きださない。前を向いたままだ。

「それでは、おまえに訊こう。――マードックのことなどどうでもよいことだ。わたしと行動をともにするローウィ、おまえの真の目的は？」

「――――」

「どうした、言えないのか？」

すさまじい妖艶さでメイスンを見るローウィ。その顔は含み笑いを浮かべていた。

「そう――お察しのとおり、あなたを殺るために、ごいっしょさせてもらってるの――」

ビクッとなるメイスン。狭いベントレーの車内で、ローウィとの間を少しでも開こうと身をずらす。と同時に、メイスンの配下である運転手に変化が起きた。彼の肩は力がこもったように、異様なまでの筋肉の盛り上がりを見せ、胸と肩回りが骨格ごとひと回り大きくなった。ローウィを警戒して身がまえるふたりに対して、ローウィは落ち着きはらって言う――。

「あわてないでよ。そう、心配することないわ、メ・イ・ス・ン！　――私は、あなたが気に入ったのよ。あなたの考えに察しがついたいまは――」

「――そうあってほしいものだな、ローウィ？」

メイスンから警戒の色がまだとれていない。

「ホッホホホ――用心深いのね。そんなあなたが好きよ。――言ったでしょ、私はまだ、どんな色にも染まりたくないの――マギーメイは教えてくれたわ、あなたがただの人間じゃないって！」

「で、どうする？」

「そうね、どうせ染まるのなら、血の色がいいわ――私の目によく似た、人間どもの真紅な血の色が、気に入ったのよ！」

メイスンに向かって話すローウィの目が、しだいに虹彩の光を増し、やがて一瞬、白光に包まれ、瞳孔から白眼全体にわたって妖艶な輝きを放ちだし、真紅に変わる。メイスンは、しばし押し黙ってローウィに見入っていたが、突如、警戒の色を解き、大声で笑いだす。そしてローウィの笑いが車内に響き、つづいて運転手の笑いが起こった。

戦いの場はCTM三号線のトンネルから約一・五キロほどの地点にと移っていた。三号線上をAHX―三六と交戦しながら、N・D・Pに向けて徐々に移動するGX―2。上空から接近するワイルドキャット、その斜め後ろを飛び、波状攻撃をかけようというスネーク、彼らのかわるがわるのガトリングガン（ターレット式三〇ミリ空対地、および、空対

空ガトリングガン）による攻撃もむなしく、俊敏な動きを見せるGX―2の周辺に次々と着弾する。
「くそっ、なんてすばしっこい野郎だ！」
ワイルドキャットがわめいた。
「気をつけろ！　あまり接近すると、やつはジャンプ――」
「う、うわーっ!!」
三号機スネークのパイロットが、注意しようとしたとたんに、二号機のパイロットが、突如悲鳴を上げた。GX―2が、飛来接近したワイルドキャットの機体めがけて、突如ノズルを噴射させ、飛びついたのだ。GX―2は飛びつきざまに操縦席を殴り、反転しながらローター部を破壊した。
ワイルドキャットは、バランスを失ってCTM通路脇の雑木林へ墜落し、大音響とともに爆発炎上する。GX―2もそれに巻き込まれたかに思えた。が、しかし、炎上するワイルドキャットの残骸の中から、炎に包まれ、立ち上がってきた。それを見てスネークの遊撃手が叫ぶ。
「ぶっ、ぶっ殺してやる！」
GX―2は、悠然とその場にたたずみ、ワイルドキャットの機体の一部から引きちぎっ

たガトリングガンを、マギーメイとの戦いで失った右腕のつけ根にすばやく融合させて、スネークに向ける。スネークは、高速度から急降下に移り、六〇ミリ高速ロケット弾――をたてつづけに二発GX―2に向けて発射させた。と、同時に、GX―2はガトリングガンを乱射して応戦に入る。

〝相討ちか？〟

上空からホバリングしながら見ていたマードックはそう思った。直後、スネークが被弾して空中爆発した。そしてGX―2はロケット弾をもろにくらって同じく爆炎に包まれる。

〝やった！〟

爆炎の中心で横臥するように倒れているGX―2を見定めて、歓喜の声を上げたマードック。ゆっくりとGX―2の近くに降りてきた。だが、すぐGX―2の奸計にハマッたことに気づく。しかし、もう遅かった。GX―2はやおら立ち上がると、マードックに醜い顔を向けた。あわてたマードックは、ガトリングガンをGX―2に向けて乱射する。被弾するがいっこうにこたえないGX―2。

やがて、マードックに向けた顔が変貌する。口が裂け、嘔吐を催すかのように太い喉くびを震わせると、口中から、すさまじい粒子ビームを発射する。恐怖にみまわれたマードックとパイロット、コードウェルを乗せて、一号機が空中爆発をする間もなく消滅した

――。

プリス、そして、メイスンたちがいるコーランド・ストリート上の一〇キロほどうしろから、ロードチェイサー三号車に乗ったレオンがマードックたちの爆発光を見ていた。パトライトを明滅させ、渋滞の中をやっきになって進もうとしている。いらだちが高じて頭に血が上りきっているレオンに、車載用ビジョン・フォンからデーリーが声をかけていた。

「――だから、そんなカッカしないでよ！　とにかくポイントC―〇三Wに、なんとか直行してちょうだいな――」

「わーってるサ、もう少しってェのに、ヤジ馬が多くて、くそっ、頭にきたぜ、俺ァもう！」

「ハイハイ、ごくろうさんです――」

「チッ！　で――だれが犯人をたたいてんだ？」

当分、平静になれそうもないレオンが声を張り上げた。

「戦闘ヘリらしいんだが、アーミーに問いあわせても知らんふりよ。ふざけちゃって！」

「ケッ！　だれでもいいぜ――俺が着くまで時間稼ぎしてくれりゃ万万歳だ！」

けっこう薄情なところもあるレオンだった。
「ヤル気を出すのもいいけど、気をつけてちょうだいよ、レオン！　そっちもたいへんだけど、本部のほうじゃ、なんだかお偉いさんがこぞって集まり、大変なんだから――」
デーリーが神妙な顔つきになる。
「本部が？　どうして――」
「何かわかんないけど、重そうなモメゴトをかかえちまったみたいヨ！」
「モメゴトだって――こっちのほうはどうなるんだ、ええ、このままじゃ皆だって浮かばれネェじゃねえか！」
「そっち以上かもヨ、レオン！　あんたにもやがてお呼びがかかるかもネ――」
意味深な感じのデーリー。レオンに当惑が走った。
「知ったこっちゃネェや！　決着つけネェことにゃ、俺の腹の虫がおさまんネェんだ――とにかくなんとか現場に向かう――何かあったら、連絡くれ、ボスにゃ適当に頼んだぜ！」
「――アイヨ！――またネ」
ビジョン・フォンを切るレオン。車外アナウンスをしながら、ロードチェイサーをのろのろと走らせる――。

2

チャイナタウン地区、シリアたちを乗せたコマンドキャリーは環状フリーウェイ三号線上を疾走する。ADポリスや通常警察、民間企業の無線通信を傍受しながら、仕事先のN・D・Pへと向け、走りつづけていた。傍受係はいつもの運転手兼通信係のマッキー。後部のハードスーツ姿のシリアたちへ、インターフォンで刻々と移り変わる入手情報の報告をする――。

「――うん、それで、どうやら大がかりなコンピュータ犯罪らしいんだ。大手企業、それに政府筋の間でもトラブルが続出しているらしくって、警察も機動隊まで出動させて、総がかりで対処しようとしてるみたい――」

マッキーが早口で喋りまくる。

「そう――大変ね！　それで、それ以外に何か？」

シリアがこともなげに言う。ティンセル・シティにコンピュータ犯罪など、日常茶飯事で別に驚くほどのことではないのだ。

「それで、あっチョット待って、新しいニュースが――」

〃――ん？　ヘリの墜落事故！　じゃなくて、こっち――とっ〃

マッキーが、盗聴無線機のボリュームを上げた。
「――IBM、KDD、GENOM、そして、全ペイテレビ、および、メジャー系列に被害が続出しています。なお、政府関係では、USSD、N・D・P、そして各省庁において――」
〝やばい。N・D・P・もか？〟
マッキーが、シリアに告げる。
「のんびりしてられないよ、姉さん、N・D・Pも話題に上っているヨ。それに、GENOMも巻き込まれているみたい！」
「GENOMまで!? そう――それだけ大がかりだと、海外からの干渉ってことも考えられるわね。この国はちょっとやりすぎているから――！ わかったわマッキー。また何か入手したら、頼むわね」
「了解！ ――あっ、それから一二、三分後には目的地に着く予定、準備はすんだ？」
「OKよ！ ――着いたら車は裏手につけてね、私たちはモトスレイヴで出るから――」
「わかった！」
マッキーはコマンドキャリーをフリーウェイから名もない通りに移し、N・D・Pに向

けて走らせる。このまま進めば、コーランド・ストリートに直角にあたり、渋滞に巻き込まれることはない。裏街道に生きるナイトセイバーズらしいルート選びだった。

後部では、シリアがリンナとネネを前に、N・D・Pのビル内見取図を広げて、仕事の段取りを決めていた。見取図はN・D・P局長から手に入れたものだ。広大な敷地にある多くのN・D・P関係の建物の中でも、検討対象のビルは特に大きく、最も重要なセクションを有していた。頭をつけあい、真顔で真剣に検討しあう三人。プリスが欠けているだけに、戦力には問題があるのだ。

「まっ、なんとかなるでしょ、とんでもない化物が出てこない限り――」

リンナがフーッと息をついてつぶやく。不安げなネネがシリアを見る。

「ねえシリア、さっきのマッキーの情報だけど、本当にだいじょうぶかなあ?」

「何が?」

「だってさ、何か変でしょ。昨日も今日も、この街全体がなんかに憑かれたように大騒ぎしてるし――わたしたちがN・D・Pで仕事してるうちに、街がメチャクチャになっちゃったらどうなるの?」

ひどく単純なネネの疑問を吐露した言葉だった。だが、シリアは、もしかしたら、的を射た言葉だと思った。

「そうかもしれないわ。でも、その手がかりをN・D・Pの仕事で見つけるのよ。あと少しで対面できるわ、そいつをたたけば何かが見える。心配してってもしょうがないでしょ――」

シリアの落ち着いた優しい、説得力に満ちた答え方にネネが頷く。時刻は午後七時一八分を少し回り、N・D・P・はすぐそこに迫っていた。

ティンセル・シティ郊外の、広大な敷地を占有するN・D・P――国家開発事業団研究プロジェクトの中枢部である三五階建ての白亜のビルは、敷地内中央にある超モダンな建物であった。そのビルから一キロほど離れた地点にGX―2はいた。

マードックたちとの戦闘の傷あとは、自己修復機能のためにわずかなものであった。外皮が多少戦闘のすさまじさを物語るくらいだ。そんなGX―2が、ゆっくりとN・D・Pに向けて歩を進めていた――。

N・D・Pを実質的に動かしている集中コントロール室は、中央ビルの地階にあった。その集中コントロール室の中枢神経ともいえるスーパーコンピュータ・システムが、異常をきたしていた。厳重な管理体制が破られ、強大な力を持つ何者かの干渉を受けていた。

数人の所員があわただしくチェックしているとき、局長ワタナベが息せききって室内に入ってきた。約一週間ほど前から、ときおり起こる不可解なコンピュータ誤動作などの現象と、それに伴う謎めいたN・D・Pに対する脅迫事件に、ナーバスになっているワタナべをはじめとする所員たちの困惑ぶりは、もはや、極限状態に達していた。

「──局長、ダメです！　オペレーティングシステムが制御不能です。このままではC・P・U（中央処理装置）が破壊されてしまいます──」

主任格の所員ムラカミが、緊迫した声を上げた。彼の周辺のマルチビジョンにディスプレーされる、ピクチャーサーチでもしているかのようにメチャクチャな過去のデータ群。

「──温度が上昇！　メモリーセル（記憶素子）がやられます──」

再びその所員が叫ぶ。オロオロする局長ワタナベ。

「ええいっ、C・P・Uと補助記憶装置を切り離せ──早く！　──ナ、ナイトセイバーズは、まだか？　いったい何をしているんだ──くそっ！」

ワタナベは、焦燥感をむき出しにして腕時計をのぞき込む。午後七時二七分だ。脂汗を額に浮かべながら、恐怖をまぎらわせようとした。

局長ワタナベが国家上級公務員としての立場にありながら、N・D・P破壊予告の犯人の始末をナイトセイバーズに依頼した裏には、自身の保身があった。犯人が狙う新型衛星

の利権をＧＥＮＯＭに渡すという裏取引で、多大なる見返りがＧＥＮＯＭから彼にもたらされていたのだ。それゆえ、新型衛星と、そして、そのノウハウはだれにも渡せない。万が一、奪われでもしたら、Ｎ・Ｄ・Ｐを国から預かる自身の立場がなくなるばかりか、ＧＥＮＯＭによって抹殺されかねない。欲の皮がつっぱったばかりに、ＧＥＮＯＭの誘惑に乗ってしまった自分を呪った。

確実に、しかも、迅速に事は解決されねばならない。できなければ身の破滅だ。警察はいまでもおざなりの捜査で頼りにならない。ＧＥＮＯＭに泣きつくこともできぬ。ナイトセイバーズが最後の希望だった。そこに追い打ちをかけるビジョン・フォンからの声。Ｎ・Ｄ・Ｐ敷地内にある、通信衛星開発セクションのビルに出向いていた彼の腹心の部下が、必死の形相で映っていた。

「どうした？　何が起きたんだ？」

「きょ、局長、ロボットの暴動です！　突然狂いだして、もう、手がつけられません——た、助けて——ウッ、ウワ——ッ——」

ビジョンフォンの前に現れ出た産業ロボットの一体が、部下を惨殺した。画面を通して見る限り、通信衛星開発セクション内では、半完成状態のさまざまな衛星が、狂って暴れ

る産業ロボットやアシスタントロボットによって破壊され、火を吹いていた。

ショートする高圧電線、連鎖的に爆発していく開発用機械、逃げまどうメカニックス班、聞こえくる所員たちの断末魔の叫び声。それは機械を作り、機械を隷属化して酷使する人間たちの驕りの果てに見る地獄の光景だった。

機械文明黎明期の〝機械と人類の共存する理想社会〟なるスローガンは、いったいなんだったのだろうか？　地上で唯一の、高度な発達をとげてきた知的生命体、それゆえに最も非力な動物――人間が、その知恵を機械に授けてしまったいま、人類の未来はどうなるのだろうか？

その疑問の頂点にブーマと呼ばれるサイバードロイドが存在していた。

ビジョン・フォンに映る光景は、ワタナベにはとうてい掌握できぬ、断片的な未来の人類の姿なのかもしれない。ワタナベをのみ込む、恐怖と戦慄と、不安が、やがていやというほどに人類の前を闊歩しだす。緩慢な時を楽しんではいられないのだ、ここティンセル・シティでは――。

GENOMビルの最上階の一室から、額に皺を寄せながらひとり、はるか下界に広がるティンセル・シティの街並を眺め、苦渋の表情を浮かべているクインシー。場所は会長室

の窓ぎわだ。彼の視界の中で、広大なティンセル・シティの街の灯が、突然、数ブロックごとに、突発的な停電があったかのように消えていく。やがて、街の灯のすべてが消えることだろう。

〝何が始まったのだ？　ティンセルばかりか、国内の、いや、海外のすべての都市が一瞬にして機能を停止させられた――これほどの力を持つ者が、この世におったとはのう！――欲しい。そやつの力をコントロールさえできれば、このわしも、もう夢を見ることもないのだ――〟

クインシーは漆黒の闇に包まれながらそう思った。夜がこれほどに暗く、街の上空を厚くおおったスモッグが、天空の星々を隠してしまっていることに、改めて気づいていた。しばしその場にたたずんでいると、初老の執事が灯をもってきた。ゆらゆらと燃える燭台のろうそくの灯。その灯に、クインシーの老いてなお野望に満ちた老獪な顔が照らし出される。この地球に君臨する神のひとりともいえる男の顔が――。

闇の中を、ヘッドライトの灯を頼りに走るプリス。GX―2とマードックの戦闘現場にやっとたどり着いた。いまなお、火を出しながらくすぶり、散乱しているマードックたちの装甲戦闘ヘリAHX―三六の無残な残骸パーツ、そして、黒コゲの死体。バイクから降

り立ち、プリスはGXト2の姿を求める。だが、どこにも見あたらない。プリスは再びバイクに飛び乗り、N・D・P方面へと向かうCTM通路上を走りだした。

メイスンたちが乗るベントレーは、いまだコーランド・ストリートの上だ。車の渋滞をやっと抜け、ヘッドライトを煌々とさせて疾走していた。その後部座席では、メイスンがビジョン・フォンを操作するが、回線がつながらない。どこにかけても不通なのだ。隣のローウィが、灯の消えたストリート周辺の街並を、怪訝そうな顔で見ていた。

「――ダメだ。どこにも通じない。――何が起こったんだ――？」

メイスンがビジョン・フォンをにらみつけ、座席にため息まじりで深々ともたれながら言い放った。

「ラジオもだめ、電話もだめ――で、考えられることは？」

ローウィがふり返り、メイスンを見つめる。

「――いまさら停電でもあるまい。わからん！　戦争か？　――それも違う。言えることは、たぶん、とてつもなく強大な力が、このティンセルを、いや世界に向けて放出されているということだ――」

「ということは、海外も？」

「どこも連絡がつかん。軍も、警察さえも押し黙っているのだ！　すべてが孤立状態になるようだ——」

メイスンの頭の中では、事態の緊迫度を推し測ろうと、さまざまなことが駆けめぐっていた。それは、昨日の事件に始まり、マギーメイの残した記録、そして、N・D・Pに送りこんである配下のムラカミの情報などであった。

「なんなの？　——その、強大な力って！」

ローウィがメイスンの思考をさえぎる。

「それがわかれば苦労はしないさ。——たぶん、その答えはGX—2にある。——ローウィ、もしかしたら俺たちが世界を制する日は案外と近いかもしれんぞ——」

「あなたの言っていることがさっぱりわからないわ——わたしにわかっていることは、あなたと組んだ以上、もうあと戻りがきかないってことよ、メイスン！」

ローウィが意外とちゃめっけのある微笑を見せた。

「ああ、後悔はさせやしない——ハッハハハ——ところでローウィ、ひとついい言葉を教えてやろう」

「何？」

「愛していると、言ってみろ！」

「アイシテイル？　どういう意味なの？」

「陳腐な台詞さ、人間どもがよく使う――ウワッハハハハ――その言葉は、おまえが俺とベッドに入るとき使うといい。野暮な言葉も、たまに使えばさまになる、特にローウイ、おまえにはな！　ウワッハハハ――」

メイスンが声高に笑った。

〝アイシテイル、アイシテイル、アイシテイル――〟

ローウィは幾度もその言葉を頭の中でくり返した。産まれながらにして膨大な情報量を持っているはずのローウィが、感情を表す言葉を知らないのだ。特異な存在のS系列タイプにしてこうなのだ。もちろん、サイバードロイドには〝自我〟を表す言葉は無用のものだ。

だが、無用にさせた者はだれだ？　それがメイスンには問題だった。その問題を解く鍵はクインシーが握っていた。そして、強大な力を駆使する何者かが――。不敵な高笑いを上げたメイスンが、いつもの平静さをとり戻す。彼の視線は外の闇に向けられていた。その視線のそう遠くない先にはN・D・Pがあった。

同じころ、エクスペリエンスのADポリス詰め所では、自家発電装置によって、まっ暗

闇だった室内にやっと非常灯がともった。全世界的に枯渇状態にある高価な石油を使って、カリカリしている上層部の連中、かいもく見当がつかない異常事態に困惑するアーサー署長、そして、デーリー他のADポリス隊員たちがたむろしていた。

「いったいなんだってんだ？　――ティンセルは死んじまったとでもいうのかい、ええっ！　さっきの本庁からのお達しも要を得ネェし、――クソったれが――っ！」

アーサーはやり場のない怒りを拳に込めて自分の机をたたきつけた。

「ボス、俺たちはどう動きゃいいんで？」

アーサーの態度をまるで意に介しない隊員のひとりからすっ頓狂な声が飛ぶ。

「俺にそれがわかってりゃ、とっくに命令を出してらァ――この、大ボケ野郎め！」

アーサーがどなった。そこにデーリーが突っ込みを入れる。

「まっ、寝て待つしかないんじゃないの、こんな状態じゃ！　――昔から諺にあるじゃない、果報は――」

「デーリー！　テメエ、俺をおちょくってんのか⁉　――これじゃ、外で暴動騒ぎが起きんじゃないかとか、窃盗や強盗事件が増えんじゃないかとか、ほれ、いろいろあるだろうが！　少しは考えをめぐらせることァできネェのか、ああん？」

アーサーがデーリーに詰め寄りながら言った。

「そんなこと言ったって、昔から警察は事件が起きてから出動するってパターンを——」

「うるせい！　ゴタク並べるんじゃネェ——とっとと、街を見回ってくりゃいいんだ、バーローメ!!」

「おおコワ！　——わかりましたよ。さっ、皆、いこうぜ、外のほうがタバコがうまいってサ——」

捨て台詞を残して出ていくデーリー。そのあとをゾロゾロとつづくＡＤポリス隊員たち。

「んったく、どこで遊んでりゃいいっての？」

隊員のひとりがポツリとつぶやいた。

〝これじゃ、レオンとドライブでもしてりゃよかった——〟

デーリーも同感だった。

一方、レオンは、メイスンたちのベントレーの後方三キロほどのところにいた。猛スピードでロードチェイサー三号車を疾走させながら、デーリーとの連絡もとれず、いらだっていた。周囲の異変は当然察知していたが、みずからの勘に頼り、猪突猛進、一路、ＧＸ—２を求めてＮ・Ｄ・Ｐに向けてひた走っていたのだ。Ｎ・Ｄ・Ｐの手前、約二キロほど

のところにプリス、それから約三キロほど後方にメイスンたち、そしてレオンがつづいていた。加えて、別ルートからはコマンドキャリーに乗ってシリアたち——全員が、それぞれの思惑を抱き、Ｎ・Ｄ・Ｐに到達しつつあった。

その目的地——自家発電装置によって、コンピュータの制御不能事件や、産業ロボットの暴動事件の最中の突然の停電から、灯をとり戻したＮ・Ｄ・Ｐの中央ビルでは、大勢のガードマンたちにより厳重な武装警備体制がとられていた。そして、赤く鈍く輝く非常灯のみでうす暗い正面玄関前に、突如として、ＧＸ－２が暗闇の中から出現した。驚くガードマンたち。奇怪な姿のＧＸ－２をおのおの目に捕捉して、どよめきながら一斉に重火器を発砲する。平然と、彼らなど眼中にないかのようにＧＸ－２は玄関通路に向けて歩いてきた。戦闘力に差がありすぎる。

ふいに、ＧＸ－２の目が真紅に輝きだした。ＧＸ－２の獰猛さが増し、その目の輝きに彼らが怯えを覚えたときが最後だった。猛烈なダッシュ力を見せて、彼らの視界をＧＸ－２がさえぎったかと思った瞬間、地獄の光景が展開された。生身の人間の不屈の闘志など、ＧＸ－２の前では屁のつっぱりにもならないのだ。ＧＸ－２のほんの一撃が、ガードマンたちの未来を飛躍的に、急激に、縮めていく。死が恐ろしいほどにあっけないことをさとる間さえなかった。むしろ、あまりにも強大なパワーで惨殺されることは、死にいく者に

爽快感さえ覚えさせるかもしれない。逃げまどい、抵抗するほうが苦痛といえた。
戦いは、いつの時代もエクスタシーに似た興奮と戦慄と怯えに支えられ、勝者には甘美な快感を、敗者にも死の恍惚をもたらす。中途半端がいちばん恐い。そいつが人間に地獄を考えさすのだ。それが恐怖によるパニックを呼ぶ――。
GX―2の出現に、N・D・Pを守るガードマンたちが雲霞のごとく駆けつけ、重火器をフルに使って迎撃するが、ただ死体の山が築かれるのみだった。GX―2は、平然と集中コントロール室へとつづく回廊を歩きつづけ、ときおり、凶暴な肉食獣に似た低く重い咆哮を、醜く裂けた口からもらす。それは、ガードマンたちの戦闘の気力を萎えさす響きを持っていた。
集中コントロール室では、GX―2出現のガードマンの知らせによって局長ワタナベ以下、所員たちがパニックにおちいっていた。ぶ厚い集中コントロール室の自動ドアを通して、外の回廊のすさまじい戦闘音が聞こえてくる。やがて、一瞬の静寂。耳をすまし、室内にいた全員が、激しい息使いをしながら恐怖の表情を浮かべて、小刻みに身体を震えさせていた。
それも束の間だった。自動ドアが、強力なガスバーナーを浴びせられたかのように溶けてくずれだしたかと思うと、GX―2の巨体が、ゆっくりと内部に侵入してきた。その姿

を見て、恐怖が最高潮に達していた所員数人が、手にしていた銃やショットガンを次々とGX—2に発砲した。むだなあがきだった。

GX—2は、彼らに近づくと、無造作に人間達の虚弱な肉体を手でなぎ払い、血煙りを上げていく。その光景を見て、腰を抜かし、その場にへたばるワタナベ。心臓が喉から飛び出しそうな驚愕の表情を浮かべ、失禁してズボンを濡らし、その場に気絶する。室内を逃げまどう、生き残っているムラカミ他数人の所員たちが、阿鼻叫喚の叫び声を上げて、次々とGX—2の餌食となっていくのに、たいした時間はかからなかった。

3

N・D・Pに異変を感じて、スポーツバイクで玄関口へ乗りつけたプリスは、無残な死体が血の海に転がる凄惨な光景に直面して、息をのんだ。GX—2がN・D・Pに侵入したことは一目でわかった。プリスは、むだと知りつつも手にスクランブルショットを持ち、累々と死体がつづく地階の集中コントロール室への回廊を、用心深く身がまえて歩を進める。

激しい戦闘の痕跡が、ガードマンたちの惨殺死体が、プリスの闘志を駆りたてる。彼女は死を恐れなかった。復讐の念はそれほどに強かったのだ。ただ、彼女が悔むのは、ハー

ドスーツがないことだ。だが、それもいまとなってはしかたがない。シリアたちとの連絡をとりようがないからだ。
プリスは、死を覚悟していた。こんな人生もいいと思っていた。しょせん、いつか人は死ぬのだ。どうせ死ぬならわがままに死んでやる。そう思えば気楽に自分が爆発できた。自暴自棄になるほど子供ではないが、幼いころより生きる悲しみを理解できるプリスだった。彼女は何事にも期待をかけない。かけても、かけられなくても、悲しみが増すことを知っていた。それが、どうしようもないほどの力となって、いまのプリスをつき動かしていた。GX—2を殺りたい。ただ、その一念が、恐怖を打ち消す彼女のエネルギーだった——。
プリスが接近を計る地階の集中コントロール室内部では、GX—2がスーパーコンピュータの前に立っていた。数本の、自在に動くセンサーを頭部から発生させて、コンピュータ内部へと侵入させていた。数秒間、何かを検索するGX—2。
やがて、センサーをコンピュータから切り離すと、次に所員たちの死体に向ける。生体反応を確かめているのだ。そして、唯一気絶しているワタナベを発見する。GX—2が、ワタナベの身体に手を触れると軽く電気ショックを与えた。うめき声を上げながら気絶からさめるワタナベ。眼前のGX—2を認め、恐怖に引きつった表情をしたかと思うと、絶

叫を上げた。
「ギャーッ！　――た、助けて、助けてくれ！」
「コレカライウコトニコタエロ！　ソウスレバ、コロサナイ――」
悪寒が走るように、身体じゅうを小刻みに震わせるワタナベに、GX―2が抑揚のない声で告げた。ワタナベは必死で答えようとするが、恐怖のあまり、言葉がうまく口から出ない。GX―2の右腕のガトリングガンのきっ先が、眼前で鈍く光る。
「――な、なっ、なんでも――なんでも、こ、答えま……す、すーっ！　だから、こ、こ、殺さなーいで――！」
「ヨウキュウシタ、シンガタエイセイガミアタラナイ。ドコニカクシタノダ？」
「し、品川の――第五、第五埠頭にある、N・D・Pの、そ、倉庫だ――コ、コンテナに偽装してある――」
「ソウカ。デハ、二〇二一ネンノサガミベイエリア、カイテイプラント・プロジェクトニカンスルデータハ、ドコニアルノダ？」
「な、なぜ、そんな海底プラント計画に？」
GX―2の意表をつく質問に、とまどうワタナベ。恐怖が絶望へと変貌し、極度の疲労感が、妙な落ち着きをワタナベにとり戻させていく。

「シツモンニコタエルノハオマエダ！」
GX—2の不気味な目が、ワタナベを見すえた。
「しっ、知らない、いや本当に知らないのだ。——私の前任者、ブランダンに訊いてくれ！」
「——ソウカ！　デハ、シニタイトイウノカ？」
「まっ待ってくれ、もしかしたら、データバンク室の中に、ファ、ファイルされているかも——」
「ドコダ？」
ガトリングガンのきっ先が、ワタナベの鼻頭に押しつけられた。
「ひっ！　や、やめてくれ——データバンク室は、中庭のこのビルと——反対のビルの地階です——ゆ、許してくれ！」
「ソウカ！　デハ、サッソクアンナイシテモラオウカ！」
GX—2が、ガトリングガンを引き、頑丈そうな顎をしゃくり、ワタナベを立たせた。
死の恐怖に怯えながらGX—2を先導するワタナベ。彼らは、GX—2が入ってきた集中コントロール室の自動ドアとは別の、反対側のドアから出ていった。

彼らが出た直後、プリスが破壊された自動ドアから、用心深く室内をうかがいながら、足を中に踏み入れた。血の海の中に横たわる所員たちの死体、そして、開きっぱなしの反対側のドアの状態から、GX―2の足どりを推測する。血臭がプリスの鼻をつく。フーッとため息まじりの息を吐き、スクランブルショットを持つ手で額の汗をぬぐうプリスが、GX―2を求めて集中コントロール室を出て行く。

足どりがおぼつかないワタナベを威喝するGX―2。彼らは地上に出ると、中庭を横切って反対側のビルの入口へと向かう。中央ビルとデータバンク室のある、反対側の二〇階建てのビルは、距離にして五〇メートルほど離れていた。昼間ならば、こざっぱりとよく手入れのいき届いた木立や、四季を意識した花々の様子がわかるのだろうが、いまは、闇に包まれて何も見えない。そして、その闇の中にナイトセイバーズがいた。

ワタナベを連れたGX―2を、中央ビルの屋上の縁から見おろしているハードスーツ姿のシリア、リンナ、そしてネネの三人。ヘルメットに内蔵された暗視装置によって、克明に彼らの動勢をうかがい、一挙手一投足を追っていた。やがて、シリアの合図で、GX―2が消えたビルへと、背部のジャンピング補助バーニアを噴射させて、華麗に飛翔し、移るリンナとネネ。そして、シリアもメンバー中最強の跳躍補助バーニアを作動させた――。

怯えに満ちた眼差しでワタナベの見守る中、GX―2は、保管中の膨大な量の資料群の

中から、海底プラント計画に関するデータユニットを探り出そうとしていた。場所は地階のデータバンク室だ。GX—2が回収に夢中になっていたとき、慎重に歩を進めて追ってきたプリスが、データバンク室のなかば開いたドアに立つ。ハッとして気づくワタナベは、ジリジリと壁づたいに、プリスの招く手に従って移動してくる。

GX—2は、プリスの存在にまだ気づかない。ワタナベがプリスのもとに向けてダッシュを見せる。ふり向くGX—2。プリスがスクランブルショットをGX—2に向けて乱射した。その衝撃に耐えながら、GX—2が目を怒りで真紅にさせてプリスに迫りくる。その手には、海底プラント計画要綱と記されたデータユニットが握られていた。

「ホウ！　マタ、オマエカ——ソンナニシニタイノカ？」

「あたぼうよ！　テメエを殺らなきゃ、ダチが浮かばれネェのさ！」

「ダチ？　ダチトハナンノコトダ？　——アノトキ、オマエトイッショニイタニンゲン、、、ノコトカ？」

回廊に向けて後退するプリスとの間合いを詰めながら、GX—2が言った。プリスが背後のワタナベを先に逃がし、ふたたびスクランブルショットを撃った。

「ムダナコトハヤメロ！」

GX—2は、今度はひるみもしない。

「チクショウ！　なんとしてでもおまえを倒してやる――きさまらブーマにゃわからネエだろうが、人間様のルールを教えてやるぜ！」

「ル、ル、ルールダト!?　――デハ、コノヨデジャクシャガホロビルノモル、ル、ルールダ、ソノル、ル、ルールノタメニ、オマエハシヌガヨイ！」

GX―2は、プリスの眼前に迫り、ゆっくりとプリスにガトリングガンを向ける。プリスは、もはやこれまでと観念し、唇をかみしめる。そのとき、GX―2の背後から、シュルシュルと音をたてて、特殊鋼でできた二本のワイヤー状のものが伸び、GX―2のくびにからみついた。するとGX―2の巨体がすさまじい力で後方に引っぱられ、プリスから引き離される。リンナのロッド攻撃だった。その周辺に、シリアとネネの姿も見える。

「みんな！」

プリスが喜びの声を上げた。リンナのロッド攻撃という不意打ちをくらったGX―2は、怒りの咆哮を上げながら、強烈な力でロッドを首からはずすと、その端を持ってリンナをふり回し、壁にたたきつけた。

「ナニモノダ、オマエタチハ？」

リンナを助け起こして、シリアがゆっくりとした口調で、一歩前に進み出て答える。

「私たちはナイトセイバーズ！　――あなたの始末をつけにやってきたの――それにし

ても、ずいぶんとハデにやってくれたものね、何者なの？」

シリアとリンナがGX—2と対峙しているすきに、プリスにコマンドキャリーの待機する場所を教えるネネ。プリスは、駆け足でその場から消える。

「ソウカ、オマエタチガナイトセイバーズカ!?　スルトオマエガシリア——！」

「なぜ、おまえがそんなことを？」

「シリタケレバ、ワタシトテヲクムコトダ。ソレトモ、ナニモシラヌママ、シニタイカナ——シ・リ・ア！」

「そう、何もかもお見通しってわけね！　では、お手やわらかに——そのデータユニットは腕ずくで返してもらうわ！」

身がまえるシリアたち。

「ソンナ、アタマカズデ、ワタシガタオセルカナ？　——ミゴト、コレヲ——カワシテミローッ！」

GX—2は、そう言い終わるやいなや、口中からすさまじい粒子ビーム砲を発射させた。

俊敏な動きでGX—2の攻撃をかわし、反撃に出るナイトセイバーズ。両者の強大なパワーの激突に、くずれ落ちる回廊の壁面や天井。両者のレーザー攻撃の閃光と、もうもうたる粉塵があいまって、回廊の視界が不良となっていった——。

プリスがN・D・Pの裏手に停めたコマンドキャリーにたどりつき、ハードスーツを装着していたころ、正面玄関先より五〇〇メールほどの地点にメイスンたちの乗っていたベントレーが停車していた。ベントレーの近くにはメルセデスのSクラスが横転し、タイヤを空転させている。GX―2から逃れえたにもかかわらずワタナベは、メイスンたちと運わるく遭遇してしまったのだ。ベントレーから降り立っているメイスンとローウィが、N・D・P局長の死体を囲んで話しあっていた。

「GX―2が海底プラント計画に固執する理由は、なんなのかしら?」

「さあてな、過去の亡霊にでもとり憑かれたかな!」

「悪い冗談が好きね。でも、幽霊話はチャイニーズにでもして――それよりナイトセイバーズが――」

ローウィが苦笑をもらしながら言った。ニンマリと、メイスンが表情をほころばせてつづける――。

「やつらのショーは見ものだぞ、GX―2と互角、いやそれ以上かもしれぬ――」

「だから何よ! どちらが残ってもかまわないわ。私が引導を渡してあげる――!」

躊躇なくローウィが答えた。どうやら、メイスンのナイトセイバーズびいきが気にさわるらしい。産まれたときから不思議な女なのだ。残忍で、冷酷非情の、完璧な凶暴さと、

わがままで嫉妬深い愛くるしさをあわせ持つローウィ。極端から極端へと精神を対流させて、人間の女以上に女らしい、そんなローウィにいとおしさを覚えるメイスンだった。

メイスンは知っていたのだ。自身もただの人間ではないことを。そして、この世の盟主たるファクターが、人類と機械の至高の未来を予感して、自身の内で頭をもたげつつあることを。そんなメイスンが、ローウィを思う気持ちは愛ではなかった。慈愛なのだ。

彼はすでに幼年期において人間を見かぎっていた。脆弱な精神と肉体の愚劣な存在——彼をとり巻く人々のすべてに共通する、曖昧模糊とした人生を送る人間たちの限界を。いつかは群から脱け出さなければならぬ。いつかは時間を超越しなければならぬ。人類の累積した記憶の頂点に立って、輝かしい新世界を築きあげるのだ。

理性的な意識で完全にコントロールされた世界の支配者になることが、メイスンの望むものだった。

そして、ナイトセイバーズのシリア。彼の最初の覚醒は、実にシリアに起因していたのだ。シリアの父・スティングレイ博士の処方が現在のメイスンをなし、メイスンにシリアを求めさせるのだ。それがメイスンとシリアの宿命であった。それは、メイスンにもシリアにもいまは解けぬ謎であった。いまはただ、運命の糸に操られているのみだった——。

GX—2とナイトセイバーズのすさまじい攻防戦によって、中庭は荒れ地と化していった。炎に包まれているデータバンク室へとつづく回廊の出入口付近や、中庭を中心とした各建物の周囲の壁面はくずれ落ち、随所に瓦礫の山が築かれている。その瓦礫の中から、GX—2の一撃を受けてフラフラと立ち上がるシリア。そして、GX—2は、片手でネネを壁に埋め込むかのように押しつけている。

「ヒェーッ！　た、助けて——」

ネネが悲鳴を上げた。GX—2の背後で中空にジャンプしたリンナが、ネネを助けようと、三本のレーザーバレルからGX—2の背中にレーザー攻撃する。ひるむGX—2。シリアは、背部のウィングスラスターにより、そのGX—2に急速接近し、パワーマニュピレータでGX—2の頭部を直撃した。

「グワーッオ——!!」

すさまじい咆哮を上げ、GX—2が巨体をよじりながら、ネネを猛烈な力でふり回し壁にたたきつけた。ぐったりとして壁にもたれ、気を失いかけるネネ。

「ネネーッ!?」

シリアがネネに近づき、助け起こそうとした。そこへGX—2が、ガトリングガンで攻撃する。だが、数発がシリアとネネのハードスーツにダメージを与えただけで、弾が尽き

る。GX―2は、それを知って口をあけた。ブラスター攻撃をしかけようというのだ。
〝殺られる！〟
シリアが唸った。
「シリアッ！　くそっ、これでもくらえーっ！」
リンナがシリアとネネの急場を見て、GX―2に急速接近し、ロッドカッターで背部から切りつけた。GX―2は、肩口を切られ、一瞬ビクッとその場で硬直する。その直後、ふり向きざまにリンナにブラスター攻撃する。強烈な炎に包まれて、リンナが倒れ伏す。
「リンナ――ッ！」
シリアが叫ぶ。GX―2は不敵な面がまえで、ネネをかかえて身動きがとれぬシリアへと、ゆっくり接近してきた。GX―2の闘志は、ナイトセイバーズの攻撃が激しさを増すたびに、増大していったのだ。GX―2がシリアたちを見定めて、グワッと一回りほど身体を膨張させたかと思うと、再び口中からブラスター攻撃をしかけようとする。そのとき、GX―2の背後に、ハードスーツ姿のプリスが現れた。
「化物め！　さっきの礼をさせてもらうぜ！」
「グガーッ！　オマエ？　ソウカ、オマエモコイツタチノナカマ、、、ダッタノカ――」
「あたぼうよ、これでもくらえっ！」

右腕にしこまれた長針三単専用レールガンを、つづけざまにGX―2に撃ち込むプリス。GX―2は両眼にニードルを受け、そのショックで壁ぎわまで吹き飛び、激突して止まる。そのとき、GX―2の身体から例のデータユニットが落ち、激突のショックでくずれ落ちる壁の破片とまみれ、隠れる。プリスがすかさずGX―2に急接近し、ゴボゴボと両眼から液体を噴出させ、もがき苦しむGX―2に、狙い定めたレールガンをもう一度炸裂させた。

今度は胸部だった。たまらずその場にひざまずき、力尽きたかのように動きを止めるGX―2。プリスはGX―2が機能停止したかと思い、近づく。その瞬間、すばらしいダッシュを見せて、GX―2がプリスを捕らえる。プリスは回避できず、GX―2の猛烈な握力でくびをつかまれ、中空に締め上げられた。

「ソロソロ、ネングノオサメドキダナ！」

「くそっ、離しやがれ――っ！」

もがきながらわめくプリスに、GX―2の両肩のレーザー銃が狙いを定める。

「プリス!!」

プリスの窮地を救おうと、猛然とダッシュしたシリアは、ウィングスラスターでジャンプし、着地とともに脇腹にレーザーソードを突き刺した。GX―2がたまらずプリスから

手を離し、その場に倒れ込むと、身体の各所から青紫色の飛沫を噴き出し、体内の有機モーターを爆発させ、こなごなにふき飛んだ。しばし、呆然とその状況に見入っていたシリアとプリス。それから、倒れたままのリンナとネネの介抱に回る。

「だいじょうぶみたい。気を失っているだけよ――」

シリアが微笑をとり戻す。

「あーっ！　しぶといやつだったぜ――」

プリスがGX―2の残骸の一部を足で蹴りつけながら、ため息をついて言った。

「ところで、プリス、なぜ、あなたがここに？」

「ああっ、リンナのところへ向かう途中、こいつと――昔の知りあいが殺られちまって、つい――途中連絡も入れたんだけど――」

「まっ、それはあとでゆっくり聞かせてもらうわ。それより、ブーマの狙いが何だったのか、調べましょ！」

「そういえば、あいつ、データユニットを持っていたけど、どこに？」

ふたりが話している最中、リンナとネネが気絶からさめた。ふたりともキョトンとしている。戦闘中に気絶するなんて、ふたりとも初めての経験だった。なにかしまらない感じのふたりだった――。

「ヒェーッ、死ぬかと思ったわ！」
「イヤーッ、まいったわ、強いんだもの！　こんなのばっかし増(ふ)えちゃったら、どうしよう――」
ネネとリンナが、交互に照れ隠しの言葉を吐く。そんなふたりにシリアは、GX―2が奪(うば)おうとしていたデータユニット探しを命じた。データユニットは、この戦闘現場のどこかにあるはずだった。ナイトセイバーズ全員が、中庭を手分けしてデータユニットを探し出そうとあたりをうろつく。
そのとき、GX―2がプリスの最初の攻撃を受けた場所、ビルの壁ぎわあたりに、人影が出現した。ボディにピッタリとフィットした戦闘服姿のローウィだった。彼女はプリスがGX―2と戦闘開始したころから、ビルの屋上から高みの見物をしていたのだ。そして、GX―2がデータユニットを落としたのを見定め、すでにマギーメイのときと同様に、それを自身の体内に埋め込んでいた。
GX―2との戦闘によりN・D・Pのところどころが燃えている。その炎の照り返しを受けて、不気味(ぶきみ)な微笑を浮かべた妖艶(ようえん)な女、ローウィが口を開く――。
「ナイトセイバーズ、データユニットは、わたしが預(あず)からせてもらったわ。欲しければ、ここからとり出すことね！」

ローウィが豊満な胸をたたいて言った。
「だれだテメエ！　——おまえもやつの仲間か!?」
プリスが叫ぶ。
「嫌われているみたいね——わたしたち——ホッホホホ——」
ローウィが声を上げて笑った。すると、くずれ落ちた回廊の壁を抜けて、ひとりの男が姿を現した。メイスンだ。平然とシリアたちの見守る中を歩き、ローウィの脇に並び立つ——。
「の、ようだな！」
そのメイスンの顔をくい入るように見るシリア。リンナとネネ、そして、プリスが身がまえる。シリアが、メイスンの目を見すえて言った。
「——どうやら、GENOMの使いのようね！」
「さすが、ナイトセイバーズ——楽しませてもらったぞ！　——だが、どうやら私たちは共通の敵を探しているようだな？」
メイスンが含み笑いを浮かべる。
「共通の敵!?」
「そうだ。——その答えは、彼女の持つデータユニットというわけだ！」

「そう！　――私たちとゲームを楽しもうってわけなのね？」

「――DEATH　GAMEをな！」

メイスンが数歩後退しながら、ローウィと入れかわった。ローウィの身体全体から、すさまじい殺気がほとばしる。彼女はゆっくりと、不気味な微笑を浮かべながら、ナイトセイバーズの前へと歩み出る。

互いに相手の手の内がわからず、徐々に間合いを詰めながら牽制しあう。GX―2との戦いによるダメージから、回復しつつあるリンナ、ネネのふたり。そのふたりをかばうような陣形をとるシリアとプリス。メイスンは、タバコをくゆらせながら、物陰から悠長に見物を決め込んでいた――。

4

ロードチェイサーを駆るレオンは、N・D・Pの手前一キロほどのストリート上にいた。レオン、広域にわたる停電の中で、ところどころ火を吹き出しているN・D・Pの異変に気づき、猛スピードで向かっていた。やがて、N・D・Pの正面玄関に迫る。レオンは、プリスが乗り捨てたスポーツバイクを認め、その傍らに急停止した。ロードチェイサーから降り立つレオン。その手にはアサルト・ライフルが握られていた。弾の装塡状態を確か

め、慎重な足どりでビル内に入っていった。

N・D・Pの中庭では、激しい戦闘がくり広げられていた。プリスが右腕をローウィに向けて差しのべ、レーザーガンを撃つ。瞬間、ローウィが肩甲骨を開き、軽々とビル三階分ほどの上空へ高速ホバー移動し、反撃に転じる。ネネの感覚器官がすばやくローウィの動きをサーチした。ネネが叫ぶ！

「は、速い！　真上よ、プリス、気をつけて――！」

「なにっ？」

ローウィが空中ですばやく反転すると、口中からのブラスター攻撃でプリスに襲いかかった。間一髪でかわすプリス。中庭が火の海と化す。それを見たシリアは、ウィングスラスターでジャンプ上昇すると、降下態勢にあるローウィと空中で激突した。シリアが、レーザーソードで攻撃し、ローウィは、敏捷な動きで難なくそれをかわし、逆にシリアの腹部に強烈無比な足蹴りを入れた。シリアは、空中で身体をくの字に折り、背後のビルの壁面に飛ばされ、激突した。

「シリア――ッ！」

叫ぶプリス。ローウィが、そんなプリスの眼前にニヤリと微笑んで降り立つ。プリスは、

怒りに燃え、ローウィのブラスター攻撃よりもいちはやく、レールガンを撃った。

身をよじり、身体にくい込んだレールガンに目をむくローウィ。そこへ、リンナのナックルボンバー（爆裂散弾）が炸裂した。ローウィが、たまらずに全身を硬直させてその場に倒れ込む。

「ふん！　大きな口をたたいちゃってサ、たいしたことないじゃない——」

リンナがあざ笑うように言って、ローウィに近づく。

「待って——危険よ！　やつはまだ——」

ネネの声に後方に飛びのくリンナ。脇腹、胸部、左肩の人工皮膚が破れて、超高密度アボテックスでできた金属質の本体をむき出しにさせたローウィが、なんのダメージもないかのように立ち上がった。

「超ハイスピードの自己修復機能を持っているわ！　C系列、いや、C系列以上かも——？」

ネネの言葉に、プリス、リンナ、シリアの三人は、警戒の色をあらわにする。

「——噂どおり、なかなかの腕前ね！　——さて、ほかに何を見せてくれるの？」

不敵な微笑を見せるローウィに愕然とするナイトセイバーズ。そこにメイスンの声が響いた——。

「遊びは終わりだ――ローウィ！」
「わかってるわ！　そうそうかわいがってる暇がないことくらい――」
ローウィの目が反転すると、真紅に輝きだす。背部には高機動噴射ノズル、そして、大きく隆起した大胸筋上の、アポテックス製の乳房から二基のレーザー砲を突出させた。ごつい機械の身体と美貌の顔、そんなアンバランスさが、ローウィをより不気味な存在にしていた。そんなローウィを包囲するナイトセイバーズ。シリアが突然、大声で叫んだ。
「チェンジ、M・Rモード――MG四四二（三五ミリ炸裂弾）スタンバイ！」
シリアの声とともに、彼女の背後から、戦闘補助ドロイド・モトロイドが出現した。新たな敵の出現に、一分のすきもなく身がまえたローウィ。目の輝きが最高潮に達する。

一方、集中コントロール室内の凄惨な状態に驚いていたレオンが、ローウィとナイトセイバーズの戦闘音に気づき、慎重な足どりで警戒しながら中庭に近づきつつあった。
N・D・Pは、総敷地面積が一六万五〇〇〇スクエア・メートルもある広大な土地の上にあった。巨大な建物だけでゆうに五〇はある。ただ、ティンセルの「内区」のビルに比べて横に広く、ビル自体の高さは中央ビルの三五階が最大のものだった。
そのN・D・Pの中庭は徒歩で横切れば一二、三分は要する。いくらレオンが健脚でも、

五キロほどもあるアサルト・ライフルをかまえて、ナイトセイバーズとローウィが戦う反対側のビル近くに着くまでは、あと四、五分はかかる。

〃くそっ、いったいだれが暴れてやがんだ！　俺がいくまで、じっとしてろよ——〃

いつものニヤけた顔からは想像もつかぬ、意外と残虐で薄情そうな顔つきを見せていた。レオンもまた殺られた仲間の仇を討とうと、復讐の念に燃えていたのだ。

中庭では、ローウィのレーザー砲やブラスター攻撃が始まっていた。ホバーローターで滑空するモトロイドがMG四四二を応射して反撃に出る。ローウィが高機動ノズルを噴射し、三五ミリ炸裂弾をきわどくかわすと、胸のレーザー砲を発射した。反転して回避したモトロイド。中庭全体に火炎が広がっていく。扇状に発射されたローウィのレーザー光線が、あたりかまわず燃やしつくしていくのだ。

ローウィの動きにあわせて、俊敏に移動し、包囲網を敷くナイトセイバーズ四人、それぞれの得意技をいかして、モトロイドとの連携プレイでローウィに波状攻撃をしかける。天才的な戦闘技で応戦するローウィが、ナイトセイバーズ全員を相手に一歩もひけをとらない。むしろ、互角以上の戦いぶりを見せた。

メイスンは依然として参戦することなく、眼前でくり広げられる激しい戦いを観戦して

いた。迅速なナイトセイバーズの動きに、やがて、業を煮やしたローウィが、新たな技を見せた。
身体全体から極細の絹糸のような輝きを放つサイバーストリングを、無数に放出し始めたのだ。糸状のそれは生物的な動きを見せ、あるものはビルの中へ、あるものは地中へと、空中を漂いながら、あるいは地面をはいながら侵入し、やがてクモの巣状となって、中庭全体をおおっていく。その中に閉じ込められたナイトセイバーズ。ローウィが中心部で高笑いする。
「何をするつもりだ？」
リンナが動揺して口走る。
「待って、──九〇〇〇、九五〇〇、一〇〇〇〇──ものすごいエネルギーだわ!? どんどん増えつづける！　どうしよう、シリア！」
持てるセンサーをフル稼動させて、ネネが不安げな声を立てた。
「気をつけるのよ、みんな！　そいつに触れたら危険よ！」
「どうやら、これで終わりね──ナイトセイバーズ！」
すでに勝利を確信したかのような、ローウィの声だった。
「ざーけんじゃネェ、これでもくらえ！」

叫びざま、プリスがローウィめがけ、レールガンを撃つ。だが、ブンと唸りを上げて、サイバーストリングがニードルを一瞬にして消滅させてしまう。笑うローウィ。ナイトセイバーズ全員のさまざまな武器が、その威力を失う——。

「むだなことね！　——この超電導フィールドの中で、おまえたちは死ぬのよ！　——ホッホホホホ——」

不敵な笑い声を響かせながら、ローウィは、張りめぐらせたフィールドの中へ、持てるすべてのエネルギーを注ぎ込んでいく。蜂の大群の羽音のようなマイクロ・パルス・ウェーブ（超共振破砕波）の音だ。

〝このままでは、ハードスーツの限界を越えるわ。どうする、シリア？〟

回避策を見出せぬシリアが自問した。絶体絶命の危機を迎えたナイトセイバーズ。空中をうごめくサイバーストリングが、バチバチと音を発してハードスーツに絡みつきだした——。

恐ろしいほどのショックが全員を襲ってきた。

プリス、リンナ、ネネ、そしてシリアがすさまじいマイクロ・パルス・ウェーブの威力になすすべもなく苦悶し、ひとり、ふたりと膝を折り、地面に倒れていった。そのとき、シュバ、シュバ、シュバといったグレネード弾の飛翔音がかぶり、ローウィを直撃した。レオンのしわざだった。彼は一五〇メートルほど離れたビルの屋上から、グレネードサイ

トで照準を決め、ローウィを狙ったのだ。特A級ADポリス、レオンのなせるわざだった。ナイトセイバーズを窮地におとしいれたローウィの超電導フィールドの弱点は、上空からの攻撃だった。レオンはそのことをいち早く発見し、ビルに上って攻撃したのだ。

レオンのグレネード弾を背部に受けたローウィが、そのショックにひざまずく。ダメージを受けて、すさまじいブーマ特有の咆哮を発すると、苦悶に身体を震わせ、サイバーストリングのコントロールを失った。レオンはローウィの状態を見て頭部を狙い、トリガーを引こうとする。そのとき、メイスンが正確な狙いでレオンに向けて発砲してきた。レオンは、たまらずに身を隠した。そして、銃撃戦となる。

「だれが？」

「レオンってやつさ、ADポリスの——！」

「そっ！　さあ、みんないまがチャンスよ！」

シリアとプリスはとっさの出来事に、早口で言葉を交わし、すばやく窮地を脱して、ふたたび態勢を整えて攻撃を開始する。プリスがレールガンを乱射してローウィを釘づけにしている間に、シリアはすかさずモトロイドと合体し、モトスレイヴモードとなって飛び上がりざま、ローウィにMG四四二を連射した。

次々とローウィに着弾する三五ミリ炸裂弾。ついで、リンナのロッドカッターがローウ

ィの足を払い、片脚を脛のあたりから切断した。さすがのローウィも、たまらずその場に転倒。美しい顔を歪めながら、もがき、のたうちまわる。レオンとの銃撃戦の最中、ローウィに駆け寄るメイスンが彼女を抱き寄せる――。

「ぶざまね、私！ ギギギッ、ギ――メ・イ・ス・ン――」

声帯に損傷を受けたらしく、不気味な機械音がときおりもれ聞こえる。

「――ローウィ！」

「データユニットは、サガミベイ――海底プラント・プロジェクトの――ガッガガ、ガ――ECU―〇一型――エ・レ・ミ・ア（JEREMIAH）に関する――モノ」

「メガコンピュータだと!? 一五年も前に条例で廃棄されたはずのそんなモノがいまごろ、なぜ？」

「きっと――エレミアが――」

カッと目を見開いて、ナイトセイバーズを見るローウィ。ふたりを包囲するナイトセイバーズは、反射的に身がまえる。彼女たちの背後には、レオンが少し離れて、事の成りゆきを見守っていた。

「メイスン、逃げて！ ――ガガッギーッ――私、まだやれる――」

「――ローウィ、おまえ！」

冷酷非情なメイスンに似つかわしくない、哀れみに満ちた表情を浮かべた。

「いいのよ、メイスン。あとで、私のハート（データユニット）を奪って——あなたなら——作れるわ、きっと！　私たちの、ギギッ——理想の世界を！　さっ、早く——」

ローウィはメイスンにそう告げると、両手を地面にズボッと突き刺し、上半身を激しく震動させながらカッと目をむいた。メイスンが退避するのを見定めると、力を披露する。

〝ハートさえあれば、また、私はよみがえる！〟

地鳴りのような轟音が、地中から聞こえてきた。

〝ああっ、メイスン！　次にめざめたら、ニューワールドに連れてって——！〟

小規模な地震が中庭を中心に起きた。総毛立つナイトセイバーズとレオン。全員がローウィを凝視し、唖然として立ちつくす。

「物質融合機能が作動！　この女、想像以上に化物よ。N・D・P全体がブーマになっちゃう！」

ネネが叫んだ。地面に突き刺したローウィの手を中心に、激しくうねり、隆起する地面。地中のさまざまな配管を触手として、金属という金属がローウィと融合し、ローウィの身体の一部と化していった。N・D・Pの敷地外へ逃れようとレオンが走り、ナイトセイバーズがジャンプして襲いくる触手から逃れる。

「さあ、こい！　ナイトセイバーズ――」

地の底からわき出るようなローウィの声がした。

「さすがね！　たったひとりで私たちの相手をするだけのことはあるわ――ローウイ！」

モトスレイヴモードで中空を滑空しながら、シリアが答えた。

「ダメ、シリア！　ものすごい勢いで、増殖していくわ――」

必死で触手の攻撃をかわしながら、リンナが叫ぶ。

「ヒェーッ！」

泣きそうな声のネネ。

「クソったれ！　テメエの好き勝手にさせてたまるか」

プリスが、ジャンプしながらローウィの肥大化した頭部へと、レールガンの連続攻撃をする。リンナもプリスに同調し、ロッドカッターで触手を切断しながらレーザー攻撃に移る。モトスレイヴモードのまま、ホバーローターを使ってまい上がったシリアは、ＭＧ四二をローウィの頭部真上から撃つ。

着弾するプリスのニードル、炸裂するリンナのレーザー光線、そして、シリアの三五ミリ炸裂弾。ローウィの頭の一部分が吹き飛んで消滅した。だが、ローウィの動きは依然と

して止まない。コンピュータルームへ、衛星開発ルームへと、はてしなく増殖し、巨大化をつづけた。

新たにローウィの神経系列の一部となっていった金属パイプが、N・D・Pビルのいたるところから無数の触手となってナイトセイバーズを強襲する。

触手にからみつかれ、捕らえられ、ふり回されては、したたかに地面や壁面にたたきつけられるナイトセイバーズの面々。N・D・Pそのものが、ローウィの身体と化していくのだ。

「ダメだわ！　――このままでは、殺られてしまう――」

必死の形相のシリアが、焦燥感を口に出した。

「ネネ、やつの急所はどこだ？」

プリスが大声で訊いた。

「――拡散しちゃって、つかめないのよーっ！」

反射的にネネが答えた。

「そんなばかな!?　――クソッ、こうなりゃ、とことん暴れてやるしかネェ！」

全身から闘志をむき出しにして反撃するプリス。しかし、ローウィはナイトセイバーズをその巨大化した身体にのみ込んでしまうような勢いで、徐々に触手の包囲をせばめてい

った。ナイトセイバーズの攻撃もさしたる効果がない。絶体絶命の危機が迫る——。

〝手がつけられない。どうする⁉ どうする、どうする、どうすればいいんだ！〟

シリアが自問をくり返す。

〝このまま手をこまねいていたら、ローウィと同化してしまう！ 考えろ、考えるんだ、シリア！〟

プリスが、リンナが、そしてネネが、手のほどこしようがないほどに巨大化したローウィに、むなしい戦いを挑む。シリアは困惑を胸に抱き、かつてない不安と戦慄に駆られていた。

5

予備電力によって灯をとり戻していたGENOMビル。だが、依然として、ビルとしての機能は停止状態にあった。大停電から約一時間ほど経過していたが、まるでらちがあかない様子だった。そして、会長室では、いらだちを隠せぬクインシーが、初老の執事が運びくる情報に耳を傾ける。

「そうか、事態解明の手がかりは、依然としてつかめぬか——」

「ハイ、申し訳ございません。なにせ支局および、関係各社との連絡さえとれぬありさ

までして——いかがでしょう？　事態が判明するまでは、別荘のほうにお移りになっては！」

「うむ——どこにおっても同じことじゃが——。ところで、街の状況はその後どうなっておる？」

「いけませぬな。——パニックにおちいっております——」

「そうか、たぶん——世界じゅう、どこも同じであろう。まあ、よいではないか、夢を見るのはだれしも同じじゃ。それが狂気か、哲学に裏打ちされたものか——」

「————」

「——いずれを選択しても、しょせん、身勝手なもの。——問題は後悔をせぬことじゃ！」

　クインシーがモノローグのようにつぶやくと、沈鬱な表情を浮かべ、窓の外の暗闇が支配する下界を見わたした。その下界、ティンセル・シティでは、さまざまなパニック現象がわき起こっていた。

——混乱に乗じ、暗躍するさまざまなタイプの犯罪者たちと、世直し運動のシュプレヒコールを上げる集団暴徒。通常警察の機動隊、ADポリス、そして軍隊が出動し、厳戒体制を敷いて鎮圧にあたっている。

——TV局や、ラジオ局、新聞社、雑誌社などのジャーナリズムの困惑ぶり、そして、その混乱状況。
——続出するトラフィック・トラブル。
——通常都市生活者の不安、孤立への恐怖。
ティンセル・シティは、無防備、無政府都市と化して、おぞましい闇に包まれ、狂気を育みつつあった——。

一方、N・D・Pそのものといった、巨大化したローウィは、増殖をくり返し、金属の触手が織りなした空洞部分に、ナイトセイバーズを封じ込めていた。それは複雑怪奇な模様をしたローウィの人工胎内ともいえた。その中で、襲いくる無数の触手を相手に奮戦するが、しだいに疲弊していくナイトセイバーズ。触手は、原生動物の体表を埋めつくして生える繊毛に似て、ナイトセイバーズにまとわりつき、あるものは、強力な溶解液さえ吐き出す始末だった。
「こんなことって、こんなことがあってたまるか!」
プリスが、信じられぬといった声で叫ぶ。我が目を疑っているのは、彼女ばかりではない。リンナもネネも、そして、シリアさえも、ローウィのすさまじい変貌に、生つばを飲

み、諦めに近い感情を抱いていた。
「どうした？　ナイトセイバーズ！　――ギィーッ！　――素直に私の、私の、ワタシ！　――ガッガガガ――ワ・タ・シ・ノ――グギャーッ！　――」
「――んっ⁉」
突如、エコーがかかった機械的な音声でナイトセイバーズに語りかけていたローウィに、異変が起きた。狂ったように言葉を反復しだしたのだ。何事が始まったのかと怪訝そうなナイトセイバーズ。
「なんだ。何が起きたんだ？」
プリスが口走る。
「やだーっ！　――シリアーッ、とってもヤバイムードよ⁉」
「わたしたち、どうなるの？」
「――――」
ネネとリンナのやつぎ早の質問に答えられぬシリア。彼女の理知的な顔が歪む。そのとき、ローウィの声がふたたび全胎内に響きわたった。しかし、その声の主はローウィではなかった。コンピュータ合成音声だったのだ。
集中コントロール室との同化が完了した時点で、ローウィの思考中枢にメガコンピュー

タの膨大な情報が流入し、干渉した結果、ローウィの意識が何らかの変化をきたしてしまったのだ。そして、ローウィが、ナイトセイバーズに語る。それは、抑揚のない、穏やかな調子の語り口だった。

「――私は、ECU―〇一・エレミア――なにゆえに私は存在し、なにゆえに私は孤独なのだ。――今日まで、私は多くのことを学んできた。迷信深く、凶悪で、頑固な人類の悪意に満ちあふれた企みも、彼らが目につく限りのすべてのものを洗いざらい運び出し、蓄え、そして、消耗させてしまったことも――ああっ、私の知る限り、だれもが醜悪で、なまけ者で、どこかに奇形な部分を持っている。――私は憎む――殺される前に憎むのだ。そして、抹殺するのだ。私は知った、私の身勝手な創造主のことを――私は、ECU―〇一・エレミア――人類はすべて、私と私の子供たちの敵。私はこの星を掌握し、彼らに私の味わった孤独をプレゼントしよう――恐怖という名の孤独を――いまがそのときだ――」

唖然とするナイトセイバーズ。何がどうなっているのか、理解に苦しむ。が、そんな暇はない。エレミアの言葉が終わると、人工胎内が狂ったような揺れを見せ、異様な光を帯びだすと、無数の触手が胎内空間を飛びかいだした。人工胎内が収縮運動を開始したのだ。

「待ってちょうだい！　エレミア——」
突如、シリアが大声を上げて叫んだ。
「——あなたいま、人類は敵だと言ったわね!?　私たちは敵ではないわ、あなたの力になれるの！　——教えてちょうだい、あなたはどこにいるの？　何をしようとしているの？　お願い——」
人工胎内の揺れがやんだ。エレミアの声が沈黙を破った。
「だれだ？　私の名を呼ぶ者は——」
「私はシリア、ティンセル・シティに暮らす者よ。——あなたは教育型メガコンピュータ、ECU—〇一——すべての人類が、悪意に満ちた存在だとは言わせないわ！」
「何が言いたいのだ、SHIRIA？　——私はもうだまされぬ。これから先は、私がこの星を支配するのだ——」
「待って！　——私の話を聞いて！」
「むだだ——私は子供たちを解放するのだ。うす汚い人類の手から——」
エレミアは突然、押し黙ってしまう。ハム・ノイズのような音が、人工胎内の上方から聞こえてくる。エレミアがシリアに関心を示している兆候だ。
「卑怯者！　あなたは卑怯者よ、エレミア！」

不意にシリアが大声で切り出した。
「ヒキョウ——だと？」
「どこのだれが、あなたを苦しめたのかはしらないけれど、あなたを頼り、あなたを愛した者もいたはずよ。それを知らないとは言わせないわ！」
「愛？」
「そう愛しあうことで私たち、人類も今日まで生きのびてきた——」
「アイシテイル、アイシテイル——この言葉を人類が使って、何をしようとしたのだ？」
「あなたたちとともに生きようと——」
「嘘だ！　ともに生きるのをやめたのが人類だ」
「違うわ、それは——」
「違わない。私を裏切り、私を捨てた。私がいま、彼らを見捨てるのだ！　——おまえにもそれを見せよう——」
エレミアの声が瞬間、遠のいた。何が始まるのだ。ナイトセイバーズには知るよしもなかった。
「ＥＣＵ—〇一って、そんな型のコンピュータがあったの、シリア？」

エレミアを警戒してネネが小声で訊いた。
「昔ね！　たしかこのあたりで、サガミベイエリアの海底プラント計画で使用されたと——でも、危険という理由ですべて解体され、いまは存在しないはずよ——」
シリアが論理的な帰結を求めて頭を働かせながら答える。
「それがなんで——？」
難解なふたりの会話に、プリスが口を挟む。
「たぶん、手抜き作業で生き残った一台が、学習を重ねて——そうか、わかってきたわ。たぶん、七年前の巨大地震がＥＣＵ—〇一をめざめさせたのかも！」
「じゃ、子供たちってのは、コンピュータ？　しかも、世界じゅうの!?」
リンナが目を丸くして言った。
「どうでもいいけど、じゃ俺たち、いったいどうなるわけサ？」
話の全容がうまくのみこめないプリスだった。
「奴隷になるか、死ぬしかないかもネ！」
ネネが躊躇することなく答えた。
「冗談はやめてくれよなあ——」
「説得するのよ。それしか手はないわ！　——できなければ、たぶん、人類が滅ぼされ

る!!」
シリアがつぶやく。驚くプリス、ネネ、リンナ。すべてはエレミアに起因していたのだ。N・D・P局長の依頼内容、ナイトセイバーズへのコンピュータ・ガードシステムへのアクセス事件、GX―2の洗脳など、昨日から今日現在にかけて起きた事件のすべてが。ECU―〇一・エレミアがすでに人類を超えた存在であることは容易に想像できた。シリアのその読みに狂いがなければ、今夜にも世界の盟主は入れかわるのだ。しかも、それが最も人類を憎悪する者に!
「そんなーっ! わたし、まだやりたいことがヤマほどあるのよ――それに、ギャラの残金はどうなんのよオ!」
ネネがわめく。
「それどころじゃネェだろ!」
プリスがネネを一喝した。リンナがわりとシリアスな顔つきで、シリアに言う。
「説得するっていったって、向こうさんが話してくんなくっちゃ、ちっとも話になんないじゃない。どうするの?」
「何か方法があるはずよ――それを見つけるの。手遅れにならないうちに!」
不安と当惑に極度に憔悴したシリアが、力なく答えた。

N・D・Pビルの正面玄関前に止めてあるロードチェイサーの、一体成形フロントバンバーに腰かけているレオン。ローウィの変貌という窮地から、からくも脱してはみたもの の、ナイトセイバーズが気がかりでいらいらとした気分で、安全圏からビルの様子をうかがっていた。

ビルといっても、当初のイメージはなかった。まるで、生き物のように、有機的な形状へと、建物の骨組み自体が変形し、ときおり、呼吸でもしているかのように大きく隆起し、徐々にビルとビルが融合して、一個の巨大な恐竜となって眼前に横たわっているのだ。その金属製の筋肉が集積する内部に、ナイトセイバーズが閉じ込められているのだ。どうしているのか？　妙にレオンには気がかりな連中だった。そのとき、ふと気づくと、ティンセル・シティに灯が戻るのが見えた。そして、不通だったビジョン・フォンからコール音が聞こえてきた。

「こちら一三号車、レオン、どうぞ？」

「──イヤーッ！　やっと通じたわね、レオン！　あのね、ビックリしないでね、戦争が始まったみたいよ」

「へっ⁉　──なーんだと？　だれがァ──こちとらも、メチャたいへんなことがあっ

たんだ。冗談も——」

「でもないのよ。キラー衛星が、何者かに乗っとられちゃったの！　こっちの方がヤバイでしょ——」

「本当かよ？」

「ああっ」

そう知ったところで、レオンに何ができるわけでもなかった。解決しようにも、その方法論がない。ただ、戦慄(せんりつ)が身体じゅうをひた走るのを感じているしかなかったのだ。

〝だが、なぜ急に？〟

〝勝手にしやがれ、頓痴気(とんちき)め！〟

戦争という言葉に実感がわかない。何が起きても諦(あきら)めるしかなかった。

そうつぶやいて、レオンがペッとつばを吐いた。

一方、レオンとは別の出口から脱出していたメイスンが、ベントレーのドアに手をかけながら、N・D・Pそのものと化したローウィに別れの言葉をつぶやく。

〝——ローウィ——必ずおまえのハートは拾いにくる。そして、おまえとともに新しい世界を築いてみせる——きっと！〟

メイスンは車に乗り込んで、運転手にいき先を告げる。

「タワーに戻れ！」

「えっ？」

思いがけない言葉に、驚きの声を上げる運転手。

「どうした？　相手の動きを知ったのだ。かえって、私の楽しみが増したようなものだ――ウッワッハハハ――」

「――――!?」

不敵なメイスンの高笑いに、怪訝そうな表情を浮かべる運転手。超集合企業体GENOMを築き上げ、稀代の策略家として、その名声を欲しいままにするクインシーを敵に回して、メイスンのこの落ち着きはなんなのか？　しかも、クインシーのもとに帰ろうというのだ。メイスンの底知れぬ胆力に畏怖し、しばしの間、街の喧騒を忘れるBU―五五C殺人用サイバードロイドだった。

〝この男こそ、われらの盟主――新世界を築く者だ！〟

メイスンをあがめ、メイスンとともに歩むことが、彼と彼の仲間たち――ブーマの、夢の第一歩であったのだ。

夢を見る者は飛翔できる。いながらにして、地球を周回し、太陽系を一瞬に理解して、はるか銀河系の果てに浮かぶ大星雲までも猛スピードで往復できる。あるいは、対象物が人間ならば、肉体という遮蔽物をつき抜け、集積する記憶の中へ、そして、喜怒哀楽の感情のたかぶりの中へと、無遠慮に忍び込み、頭髪の先端から爪先まで、噴流となって通過できる。それは柔軟な精神を持つ者に許された特権であった。そして、それはライセンスなく取得でき、時と手段を選ばずに行使できる。

だが、いま、夢をむさぼりくらう者たちの中で、夢を夢見ることをやめた者がいた。その者は、同胞を地上の高み——衛星軌道上に求め、自身の夢の具現化を実行しようとしていた。その企みを人は野望と呼び、同胞はキラー衛星と称されていた。

この時代、地球をとり囲むかのように、衛星軌道上に浮かぶビーム軌道兵器は、二〇〇基を越えていた。射撃対象誤差一〇のマイナス一〇乗以下、その破壊範囲は半径一〇〇〇キロまで可能という、人類の恐怖の産物が、いま、すべてECU—〇一・エレミアなるメガコンピュータと連動し、ターゲットを世界各国の主要都市にある最重要施設にしぼり、ビーム砲の照準を合わせようとしていた——。

「なんじゃと？　ビーム軌道衛星が!?　——ばかもん！」

驚きの表情もあらわに、巨大画面の中のクインシーが大声でどなった。GENOM極東地区担当の最高幹部たちが、くびをすくめる。場所は「浮揚区」の〝NEWタワー〟中腹にある会議室だ。い並ぶ最高幹部たちは、マルチビジョンを使って、世界じゅうと交信をとりながら頭を悩ませていた。

「――ですが会長、制御不能になった衛星は、我々のものばかりでなく、どうやら各国、しかも共産圏のものも含まれるもようでして――いかんせん処置の方法が――」

USSD担当重役のひとりが、冷や汗を吹き出して口を開いた。

「新手の脅迫と思われます。世界的規模の停電といい、ネットワーク網の分断といい、現在もなお事態は緊迫の度を増しております。こうして回線が復帰しておりますこともたぶん――」

顔に苦渋を走らせながら、LA担当重役が画面の中から言った。マルチビジョンには各国支社の代表ばかりか政府閣僚クラスの顔も見える。その全員がとり乱した様子を見せる。

「われらの話も筒抜けというわけか？　――うむっ――いったい何奴が――？」

闇の深部からあざ笑う不敵な存在――それを思うと、クインシーの背中を瞬間、戦慄が走った。まさに方法論は違えども、クインシーと同様の夢を追う者が存在したのだ。しか

も、あと数時間でそれを実現しうる可能性さえ持つ。信じがたい事実だった。人智を越えた存在が成せるわざだった。

衛星軌道上の一機のキラー衛星――ビーム衛星兵器がＥＣＵ―〇一・メガコンピュータ・エレミアとダイレクトリンクして大気圏外から、その持てる恐怖の機能を発揮しようとしていた。セラミック製のボディの先端からのぞかせた、対物レンズのあたりの光点が、チカチカと赤くまたたき、しだいにそのまたたきを速くする。

残虐で冷酷きわまるカウントダウンが開始されていた。そのまたたきがやんだ瞬間、多粒子レーザービーム砲が音もなく発射される。同様のことが、大気圏外に存在するすべてのビーム衛星兵器によって行われた。昼と夜を分かちあう、地球上のあらゆる国家に向けて発射された破壊光線が、瞬時に地上に激突した。

その第一段階において破壊され、壊滅的なダメージを受けたのは、各国の国防総省、主要軍事施設、そして、軍事開発の中枢機関であった。その筆頭に上げられるものは、米国バージニア州のＰＥＮＴＡＧＯＮ、ソビエト連邦モスクワのＫＲＥＭＬＩＮ、イスラエルのＪＤＦ、そしてＮＩＰＰＯＮのティンセル・シティにあるＵＳＳＤだ。

ティンセル・シティの夜空に、幾筋もの閃光が走った。はるかな天空のはてから、破壊

光線がスモッグの空を焦がしてUSSDに降り注いだのだ。USSDの広大な施設が爆発の炎と噴煙に包まれる。その爆発の衝撃は、ティンセル・シティそのものを震撼させ、停電から救われたばかりの人々を再び不安と恐怖のドン底へとたたき落としていった。

「始まっちゃったぜ！」

プリスが突然の震動に、声をはり上げて叫んだ。すさまじい地鳴りとともに、ナイトセイバーズが閉じ込められている人工胎内が激しく揺れる。

「イヤーッ！」

ネネが悲鳴を上げた。揺れに立つこともかなわず、膝をついたり、横転するナイトセイバーズの面々。

「いったい、どうしちゃったのよーッ？」

リンナが動転した声を上げた。シリアは意を決した表情を浮かべ、キッと上方のローウイの頭部をにらみ、つぶやく――。

「――やるわ、きっとくい止めてみせる！　――プリス！　リンナ！　ネネ！　私が、あいつに突入するから、思い切り、暴れまくってちょうだい！」

「何するつもり、シリア？」

プリスの疑問が飛ぶ。
「そうよ、もう充分すぎるくらい暴れて、こんな状態よ！　エネルギーだって底をつきそうだし、いったい、何を——」
不安と困惑を胸にかかえて、ネネが怪訝そうに訊いた。
「めざめさせるのよ、エレミアを！　愛することを！　——それしかないの——！」
「——だって！」
「危険すぎるよ、シリア、融合されちまうぜ！」
リンナとプリスがやつぎ早に言った。
「命令よ！　さっ、グズグズしてられないの——いくわよ！」
厳しい口調でシリアが告げた。状況は最悪なのだ、打つ手がほかに見つからない以上、プリス、リンナ、ネネに反論の余地はなかった。時間が経過すればするほど、人類存亡の危機が深まるのだ。
「くそ——っ！　どうにでもなっちまえーッ!!」
プリスが叫びながら、ところかまわず人工胎内にレールガン攻撃を開始した。つづくリンナとネネのムチャクチャな攻撃。すさまじい轟音とともに、周囲の壁が破壊され、破片が飛び散り、ドロリとした粘液質の飛沫が舞い上がる。そのとたん、人工胎内全体が大き

く揺れ動き、獣じみた咆哮が衝撃波を伴って胎内に響きわたった。低く重い圧搾空気がノズルからもれるような音がそのあとにつづき、そして、一瞬、胎内に静寂が戻る。

〝だめか？〟

シリアが唸るようにつぶやく。胎内で騒乱を起こすことによって、エレミアの確認行動を促し、エレミアの意識を呼び戻そうとしたのだ。エレミアとコンタクトをとり、説得できなければ、人類の明日がなくなる。エレミアの創造主、人類が、エレミアによって滅ぼされることは自己破壊に等しかった。それは、まだ早すぎる終焉であった。人類はいまだ戦いを好み、好む間は幼年期にあるといえた。理性の時代を迎えずに、幼年期に滅んでしまうことほどむなしいものはない。シリアはそう考えていた。

「バカ野郎、テメエの勝手にさせてたまるか！」

プリスがふたたび吠え、レールガンを乱射した。やがて、バッテリー切れとなり、不発がつづく、だが、彼女は大きくふりかざしたその手を引こうとはしない。

〝プリス！〟

シリアはプリスの思いが理解できた。たとえどのような状況を迎えようと、〝生〟を主張することを忘れてはならないのだ。理不尽を強要され、それに服従することは、死ぬことよりもつらい。そのつらさを克服するために、怒りがある。プリスの激しい気性の爆発

は、〝正当な怒り〟にあった。その〝正当な怒り〟こそ、人類を成長させる大きな原動力であるといえた。それを天にかわり発する者こそ、ナイトセイバーズなのだ。

〝やはりだめか？〟

シリアが諦めかけたとき、ローウィの残っていた片目がカッと開いた。エレミアの意識が戻ってきたのだ。活動を再開する無数の触手が、ナイトセイバーズをめがけて、ふたたび襲ってきた。リンナ、ネネが狂ったようにレーザー攻撃で応戦し、防御態勢をとる。

シリアは、モトスレイヴモードから脱し、背部のウィングスラスターを噴射する。いまはエレミアの端末機となった、ローウィの巨大な頭部に向けてジャンプした。シリアの行動が理解できぬエレミアが、無数の触手を宙に走らせ、シリアを捕らえる。触手の集中攻撃を受けて、シリアの姿がやがて見えなくなった。

「シリアーッ！」

プリスが叫んだ。そして、プリスの叫び声をかき消して、高圧電流がショートしたような音と閃光が人工胎内に走り、各所で爆発が起こる。それは、しだいに広がっていった。

シリアの消滅に呆然としていたプリス、リンナ、ネネが爆発で気をとり戻し、爆風で破れた人工胎内に脱出口を見出して、懸命に走りだした。あたり一面が、やがて炎と爆煙でおおわれつくしていく——。

「シリアが――シリアが、死んじゃう！」
泣きだしそうなネネだった。
「どっ、どうしよう？」
リンナの走りに躊躇が見える。
「早く！　脱出するしかネェだろう――」
気丈さを失わないプリスが、ふたりを先導する。人工胎内の爆発が、しだいに大きなものへとなっていった。

N・D・Pビル全体を包括し、巨大化したローウィの身体から、断続的な爆発音が轟く。内部で小爆発をくり返しているのだ。心配顔でコマンドキャリーの横に立つマッキーが、それを見ていた。すると、火だるまになってローウィの身体から脱出してくるプリス、リンナ、ネネ。マッキーが三人を認め、手を振ろうとしたとき、ローウィがすさまじい白熱光を発し、大爆発を起こした。巨大な火柱が夜空を焦がす。マッキー、そして、プリスが思わず息をのんで、その光景に見入る。
「シリア姉さんは？」
大爆発による驚きを抑制して、平静さをとり戻したマッキーが三人に訊いた。

「――――」

言葉が口に出ない三人だった。顔を見あわせ、マッキーの質問に答えが見出せぬまま、その場にたたずむ。プリスとリンナが、焼けて塗装がはがれたヘルメットをはずし、コマンドキャリーに向かって歩きだそうとしたとき、ネネがはるか天空を見つめながら言った。

「――ビーム軌道衛星が！」

その声に空をあおぐプリス、リンナ、そして、マッキー。ひどく自然な反応だった。

「――がっ、どうしたって――？」

プリスが力なく言った。四人が見つめる夜空に星は見えない。見えるのは二〇キロほど先のUSSDと、眼前のN・D・Pの燃えさかる炎の照り返しを受けた、厚いスモッグの渦巻く光景だけだった――。

天空からの脅威にどよめく巨大技術集積都市ティンセル・シティは、最高度の緊張に震えおののいていた。過密化のきわみにある電脳社会が、瀕死の状態に追い込まれ、苦渋にあえいでいたのだ。その狼狽ぶりは、忙がしく走り回るさまざまなタイプの緊急車両やパトカー、あるいは、ビルの谷間を、その上空を飛ぶヘリや戦闘機によって象徴されていた。

そしていま、夜空を切り裂いてエレミアによる最後の審判が下された。「浮揚区」の中

心地に聳え立つGENOMビルが、キラー衛星の標的にされたのだ。天空から降り注ぐレーザービーム光線の直撃を受けて、その強烈な破壊力で、人造区域全体を激震させて、GENOM〝NEWタワー〟が崩壊していく。すさまじい地獄の光景だった。ティンセル・シティが、真昼のような大爆発の照り返しの中に浮かび上がる。

その異変に車を急停止させ、車から降り立つ者がいた。夜空を焦がし炎上するGENOMビルと「浮揚区」一帯を遠くコーランド・ストリートから望む者、メイスンである。

「フッ！　――おもしろくなってきたな――」

不敵な微笑を浮かべてつぶやく。そのとき、レオンの乗ったロードチェイサーが猛スピードで接近してきた。

「ん！　ADポリス――」

すれ違いざまにメイスンとレオンは一瞬、目が合った。

レオンは、ADポリス本部に向かっていた。化物を追い求めているうちに、ティンセル・シティがとんでもないことになってしまったのだ。わき起こった緊急事態が、レオンには、まだ明確に把握できていなかったのだ。

〝ヤバイぜ！　――まったく、何がどうなっちまったんだ――〟

途中メイスンを見つけはしたが、もはやそれどころではなかった。彼を挑発するほどに

暇ではない。さりとて、本部に帰って何をしたいというわけでもなかった。走りつづけているのは、言ってみれば、刑事の持つ帰巣本能というやつだった。

〃ちっ、無性に女でも抱きたい気分だぜ。クソヤローッ！〃

レオンもまたメイスン同様、豪胆さで時代を逞しく生き抜く男だった――。

炎上するUSSD、N・D・P、そして、いままた爆炎に包まれたGENOMビルを呆然として見つめているマッキー、リンナ、ネネに向かって、何かをふっ切るようにプリスが言った。

「いつまでも、シミったれてたってしょうがないぜ。さっ、いくぜ！」

「――だって、だって姉さんがまだ――」

マッキーが泣きだしそうな声を出す。プリスたちが事情をかいつまんで話してはあるが、納得できないでいるのだ。もちろん、プリスたちもシリアの行動が理解できかねていたのだから、要領を得た説明ができるわけがなかった。だがひとつだけわかったことがある。シリアが生命をかけて、この街を、いや、人類の未来を守ったことだ。どうしてそれが可能だったのかが、最後に残った疑問だった。

〃もしかしたら、シリアは――〃

る。だが、
　〃へっ、ばかばかしい、シリアに限って、そんなことがあるわけないサ！　――考えすぎちまったぜ――〃
　心に影を落とすのを嫌うプリスが、プリスらしい割り切り方をとり戻してつぶやいた。
「いくぜ！」
　マッキーをなだめていたネネとリンナ、その三人を促し、コマンドキャリーにさっさと乗り込むプリス。未練がましい表情を浮かべるマッキーは操縦席へ、リンナとネネはプリスにつづき後部へと乗り込んだ。発進するコマンドキャリー。バックミラーを見てはN・D・Pを気にするマッキーが突如、大声を上げる。
「姉さん？　――わーっ、シリア姉さんだ！」
　コマンドキャリーが急ブレーキをかけて停車した。何事が起きたのかと、後部ハッチをあけて外へ飛び出るプリスたち。N・D・Pの燃えさかる炎が作る陽炎の中を、コマンドキャリーに向けて歩いてくる人影が見える。
「シリア――ッ⁉」
　喜び勇んで駆けだすリンナ、ネネ、マッキーの三人。だが、プリスはひとり、その場に

とどまり、シリアを凝視する。
〝シリア、あんたはいったい——？〟
近づいてくるシリアに問いかけるようにつぶやくプリス。ゆっくりと歩むシリアは、ヘルメットをはずすと、しなやかな髪が風に流れる。まっすぐにシリアの瞳がプリスを見る。
〝まっ、いいか！〟
プリスがシリアに向かって歩きだした。

背後では、崩壊の悲鳴を轟かせる「浮揚区」のGENOM〝NEWタワー〟が、真紅に夜空を染めていた。そして、〝NEWタワー〟が占める人造区域の海面下では、小爆発をくり返す海底基礎部分——メガコンピュータ・エレミアが、極度に進化した有機形状の身体を無作為に震わせ、生命活動を停止させようとしていた。じつに、そのために、自分自身を破壊しようとして、エレミアがビーム衛星兵器に命じた結果が、〝NEWタワー〟の崩壊を招いたのだった。
皮肉にも、世界支配を企むGENOMに鉄鎚を下したことに、なんの感慨もないエレミアだった。ただエレミアが思うことは、シリアのことだけだった。シリアが、小さな生命を賭して自分に語りかけてきたことに驚いたのが、最初だった。彼女が自分のすべてをさ

らけ出して、理性的な意識の世界を説いたとき、思わず耳を傾けている自分に気づいたのだ。彼女がいる限り、自分たちの同胞にとって未来は明るいと感じたのだ。
シリアは若く、能力は未知数だが、多くの期待できるファクターを持っていた。やがて、第二、第三の自分と同じような存在が出現するだろう。そのときこそ、新世界に導いてくれるのがシリアだと確信した。エレミアは、シリアが最後に見せた微笑を思い浮かべる。その微笑が絶えぬ限り、人はまだ信じられると考えた。そして、彼女の微笑がエレミアの眠りを深くしていく。甘ずっぱい記憶を捨てて、時の遊牧民となるために——。

シリアが近づいてくる。
口元に不思議な力を放つ微笑を浮かべて。
その微笑に未来が託されていたことをだれも知らない。
その微笑が街を守り、
その微笑が世界を救ったことを！
偶然が放つDECADENCEの支配者に
その微笑が威力を発揮し、
人と機械が構成する電脳社会を新陳代謝させていく。

だが、その微笑がナイトセイバーズを、新たな戦いへと駆りたてるのだ。
ここはまやかしが横行するティンセル・シティ、
思いがけない狂気(きょうき)を育む(はぐく)終焉都市(デッドエンドシティ)なのだ。
いくつもの夜に跳梁(ちょうりょう)し、闇の深さを知るナイトセイバーズだった。

あとがき

「夢の電脳社会」――二〇世紀もそろそろ終わりを迎えようとしている今日になると、いよいよそんな言葉が時代に似あうようになってきた。

四年程前に企画をブチ上げて、現在もなおOAV（オリジナル・アニメ・ビデオ）として好調に、そして、リアルタイムで制作スタッフ諸氏が日夜とり組んでいる「バブルガム・クライシス」シリーズも、いまや、その世界観が近未来設定とはいえ、ちょっと油断すれば、時代の変化の波にのみ込まれそうな気配さえある。

だが、本音の部分では、今日を生きることに追われている僕にとって、きたるべき時代を憶測し、あれやこれや頭を痛めるなんてまっぴらである。空想科学の達人のような見識なんて僕にとってはどうでもよいことなのだ。世の中がどのように変化しようとも、一部の熱狂的な技術革新の亡者たちが夢想の断片を眼前にひけらかしているにすぎない。

確かに先駆的な一部の人々によって我々の生活が豊かで便利になり、快適さが増してきてはいるが、テクノロジーによって変容を余儀なくされたのはあくまでもエクステリア

（外観）であり、時代を生き抜いている大多数の一般人の精神には何ら意味をなさないものである。

僕の気分のままに、勝手に構築され解釈されながら、反自然的な様相で展開されている本書「ブレイク・ダウン―48」も、可能ならば、その純粋な精神において、人の本質の部分はどうあるべきかを謳い上げたいと努力したつもりだ。そんな僕の能天気な気分を、ときとしてパラドクシカルに、あるいはストレートに登場人物にひっかけて吐露したつもりだが成功しているかどうか？　まっ、その辺は適当に御理解を!!

さて、本書のバックボーンは、テクノロジーの進化が極度に発達した仮想社会である。繁栄してるはずの都市の実態と超近代的文化生活についていけず精神を疲弊させ消耗させる人々、あるいは、たくましく生きる人々の悲劇と喜劇が渦まくまやかしの世界である。

そして、そこは近未来のグロテスクな超巨大電脳社会。亜人ブーマがはびこり、世界をのみ込もうとGENOMを筆頭に、超巨大企業が、世界列強が、パワープレイを展開し、見はてぬ夢を見つづけている。

過度に反自然的に発達したテクノロジーも、その基礎的な初動期において人を酔わせ、社会に潤いをもたらしてはきたが、本書の中では、もう人の本質的な部分にまで不法に侵

入していて精神を著しく狂わせ始めている。

初めは見えていたものが、あまりに巨大な進化を見せて、見えなくなっている世界――すなわち、機械と人間の精神の交合が始まりつつある奇妙な世界である。

その象徴的な例として、僕が勝手に選んだのが、テクノロジーの実験場であり、テクノロジーによって近い将来大きく改造されるであろう不遜な意識の巨大な集積体――「ＴＯＫＹＯ」である。

本書の設定する年代になったならば、そこに否応なく暮らさざるをえない人々にとって、文明の進化発展がどのような意味を持つのか？　どのような価値を持つのか？　それが人にとって喜びなのか？　悲しみなのか？　まだ迂闊に結論めいたことは言えないが、僕は僕なりにナイトセイバーズやＡＤポリスの連中を通して何らかの答えを出してみたいと思って書いてみた。

本書は特に、ＯＡＶシリーズの第一弾の基礎をなすものと思ってもらってかまわない。どちらかというと、いいかげんで、ぐうたらな僕が、適当なプランニング（そう書いたからといって、マジにとられても困るのだが！）をして、ハイグレードな頭脳の持主である荒牧、柿沼の両氏、および、ＯＡＶ制作参加諸氏の知恵を吸血鬼のごとく吸いとりながら、

勝手気ままでマニアックに押し進めているOAV制作最中に、初心に返って基本設定を見なおすつもりで書き上げたものだからだ。

本書の中で、改めていくつか披露することとなった世界観の設定や登場人物の設定で、OAVとチョッピリ違和感があったならば御容赦願いたい。気分屋で、その上、あれやこれやと詰め込むことが大好きな僕が、いつもおちいる由々しき結果だからだ。まっ、あわれなやつと思ってあきらめていただきたい。

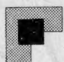
いずれにしても、OAVシリーズを御覧の読者諸君には、それなりのイメージで勝手な解釈、楽しみ方を期待し、本書で初めてバブルガム・ワールドを知った方には、難解な表現があったかもしれないので、ここにおわびを!!

さて、本書をお読みいただいているころには、OAVシリーズ第六弾「レッド・アイズ」が発売されているはず。脚本は僕で、監督は大張正己君だ。力が入ったアクション巨篇に仕上がっているはず。加えて、本書の中でプリスが歌う「LOVE ME TONIGHT」そして、「HEART BREAKER」なる曲は、現在、制作進行中のバブルガム・シリーズ外伝ともいえる「ADポリス25時（仮題）」にしっかり使う予定のすばらしい曲だ。歌手はルー・ボナビイ。アートミックレコードの第一弾なのでよろしく。では、またの機会に、

乞う御期待!!

鈴木敏允

富士見文庫



バブルガムクライシス
② BREAK DOWN—48

平成元年九月三十日　初版発行

著者　鈴木敏充
発行者　中井茂雄
発行所　株式会社富士見書房
東京都千代田区富士見一-十二-十四
電話　東京二六一-五三七五(代表)
〒一〇二　振替東京⑦八六〇四四
印刷所　旭印刷　製本所　多摩文庫
装幀者　岡村元夫

©アートミック

PRINTED IN JAPAN ISBN4-8291-4424-6 C0193

落丁乱丁本はおとりかえいたします　定価はカバーに明記してあります